

## 専任教員教育研究業績

平成28年 7月 1日

氏名	ふりがな	所属学科	職位	性別
吉田 眞理	よしだ まり	保育学科	教授	女

担当科目名	学内委員会等
家庭支援論、児童家庭福祉、保育相談支援、地域と福祉、ゼミナール	カリキュラム委員会、入試委員会他

学 歴		学位
和暦(西暦)年 月	事 項	
昭和50(1975)年3月	早稲田大学 第一文学部 社会学専攻 卒業	文学学士 (社会学)
平成13(2003)年3月	大正大学 大学院 文学研究科 社会福祉専攻 修士課程修了	文学修士 (社会福祉学)
平成16(2006)年3月	大正大学 大学院 福祉・臨床心理学専攻 博士課程修了	博士 (人間学)

## 教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
日本女子大学家政学部 通信教育課程	平成15年4月～平成18年3月	非常勤講師(児童福祉)
大正大学人間福祉学科	平成17年4月～平成18年3月	非常勤講師(市民活動論、社会福祉援助技術演習)
田園調布学園大学人間 福祉学部地域福祉学科	平成16年4月～17年3月	非常勤講師(社会福祉援助技術演習)

## 所属学会等

名称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本社会福祉学会	平成12年～現在	学会発表(平成14年)
日本ソーシャルワーク学会	平成12年～現在	学会誌発表(平成15年)
日本地域福祉学会	平成15年～現在	学会発表(平成17年18年19年20年22年23年)
日本保育学会	平成17年～現在	学会発表(平成17年21年)

## 社会活動等

名称	活動期間	活動内容
大正大学社会福祉学会	平成18年4月～現在	評議員
地域療育センターあおば(横浜市)	平成19年4月～現在	運営委員長
かながわ第三者評価推進機構	平成26年4月～現在	委員
小田原市教育委員	平成26年10月～現在	委員
横浜市子ども子育て会議	平成27年10月～現在	委員

## 担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
保育士	平成3年8月	山梨県

## 研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)	(著書)			
1. 「わが国におけるソーシャルワーク実践の展開」	共著	平成20年	川島書店	故人となった恩師(博士論文副査)の小松源助先生の追悼書。ご教授いただいた博士論文の研究成果の一部を掲載した。
2. 「生活事例からはじめる社会福祉」	単著	平成20年	青踏社	保育士養成課程の必修科目テキスト生活者の視点から事例を通じて短大生をターゲットに社会福祉の考え方を丁寧に著した。

3 「児童の福祉を支える 家庭支援論」	単著	平成 22 年	萌文書林	保育士養成課程の必修科目テキスト 福祉の視点からジェンダーや住民参加、ひろば活動の実施方法についても著している。
4. 「生活事例からはじめる児童家庭福祉」	単著	平成 22 年	青踏社	保育士養成課程の必修科目テキスト 生活者の視点から事例を通じて短大生を主たる対象に、児童福祉の考え方と実際の取り組みを著した。
5. 「児童の福祉を支える 児童家庭福祉」	単著	平成 23 年	萌文書林	保育士養成課程の必修科目テキスト 基礎編と発展編にわけ、学生の学習状況に応じて活用しやすく編集した。
6. 「児童の福祉を支える 社会的養護内容」	編著	平成 22 年	萌文書林	保育士養成課程の必修科目テキスト 全体の編集を行った。「社会的養護」の理念を現場でどのように活用するか、事例を用いて著した。
7. 「児童の福祉を支える 社会的養護」	編著	平成 23 年	萌文書林	保育士養成課程の必修科目テキスト 全体の編集を行った。いのちの重みをどうとらえるか、児童の権利についてどう考えるか問いかけている。
8. 「生活事例からはじめる保育実習」	編著	平成 24 年	青踏社	保育士養成課程の必修科目テキスト 保育士養成における保育実習Ⅰ、Ⅱを中心として、教育実習や保育実習Ⅲにも役立つ基礎的な生活力を視野に入れた指導書である。
9. 「親育ち導入ガイド」	共著	平成 26 年	神奈川県	神奈川県次世代育成部「親育ち支援プログラム検討会」で調査を経て親支援について、他学の研究者や実践者と意見交換をして作成した地方公共団体担当者向けの親支援の手引書である。
10. 「保育者のためのキャリア形成論」	共著	平成 27 年	建帛社	保育を目指す学生に向けて、保育現場に必要な知識・技術・価値を伝え、保育現場にある保育者に自己研鑽を促す書である。
11. 「社会福祉の制度と法律」	単著	平成 27 年	青踏社	看護分野の学生に、福祉にかかわる制度や法律について事例を交えて解説した。福祉における人間観・社会観も伝えることを意図した。
12. 「保育入門テキスト」	編	平成 27 年	萌文書林	小田原短期大学保育学科教員が保育分野を目指す高校生などに向けて、保育の資格について解説し、保育者養成課程における学びの内容について一部紹介している。
13. 基本保育シリーズ 「家庭支援論」	共著	平成 28 年	中央法規	第 14 章「子育て支援における関係機関との連携」第 15 章「子育て支援サービスの課題」を執筆した。
(学術論文)				
1. 保育士養成システムのパラダイム転換Ⅲ」	共同研究	平成 20 年	全国保育士養成協議会	専門委員として保育士の専門性、養成のあり方に関する研究と調査を行った。
2. 指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査	共同研究	平成 21 年	全国保育士養成協議会	専門委員として保育士養成施設出身者のアンケート調査及び分析を行った。
3. 「学生の自己尊重感を高める心理系グループセッションの試行(中間報告)」(査読あり)	共著 研究責任者	平成 22 年	本学紀要 41 号	自己尊重感が低い学生に対し、心理系グループセッションを行うことにより、人間関係上の課題発生、実習でのつまずき、退学などの予防に役立てようというものである。
4. 短期大学における今後の役割・機能に関する調査研究	共同執筆	平成 23 年	文科省先導的 大学改革推進 委託事業	本研究チームの保育士グループ研究員として、全国の保育所、短期大学への調査票を作成し、分析を行っている。

5. 子育て支援センターにおけるボランティア活動を通じた次世代育成	研究代表	平成24年	神奈川県	「かながわ子ども・子育て支援推進調査研究事業費補助金」を受けて小田原市マロニエ子育て支援センターをフィールドとして、中高生ボランティアについて研究を行った。
6. 「住民が運営する《地域子育てひろば》に関する研究[1]～ひろば運営の可能性と課題～」	単著	平成25年	本学紀要43号	小田原市主任児童委員が主宰する「ひろば」の調査を行ない参加型アクションリサーチの手法を用いて分析・研究した。
7. 「地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援（1）—小田原モデルの研究と試行—」	執筆者代表	平成26年	本学紀要44号	子育てひろばへの導入として開催する乳児向けの「赤ちゃんひろば」の小田原市における試行と本学独自プログラムOMPについて詳述した。
(その他) 1. 高大連携「保育者養成導入講座」事業	実施責任者	平成22年—23年	神奈川県	神奈川県政策部による『大学発・政策提案制度』の募集を受け、神奈川県と本学の共同事業として受託した。
2. 「子育て家庭の孤立予防のためのひろば全戸参加事業（赤ちゃんひろば事業）の開発」	研究代表	平成27年—28年	神奈川県	平成26年度神奈川県政策部による『大学発・政策提案制度』に2度目の採択を受けた。
3. 中核的専門人材養成等の戦略的推進による潜在保育士の就職・再就職支援事業	研究メンバー	平成26—27年度	文部科学省	三幸学園が事業受託した潜在保育士対策の事業展開において、研修にかかわる分科会メンバーとして研究し、eラーニング教材を作成した。
4. 神奈川県大学連携地方創生事業	代表	平成27年	神奈川県	平成26年度神奈川県県西センターによる『大学連携地方創生事業』の採択を受けた。
その他（表彰等）	表彰	平成22年5月		全国保育士養成協議会功労者表彰

専任教員教育研究業績

平成28年6月14日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性 別
今泉 明美	いまいずみ あけみ	保育学科	教授	女

担 当 科 目 名	学 内 委 員 会 等 (委 員 長)
音楽表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 卒業ゼミナール	全運評・教授会・カリキュラム委員会・教員養成カリキュラム委員会・入試委員会・紀要委員会、 総合文化・学生指導支援委員会 (委員長)

学 歴		
和暦 (西暦) 年 月	事 項	学位
昭和 59 (1984) 年 3 月	武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業	芸術学士
昭和 61 (1986) 年 3 月	東京学芸大学大学院教育研究科音楽教育専攻声楽講座修士課程修了	教育学修士
平成 6 (1995) 9 - 7 年 (1996) 12 月	ウエストミンスタークワイヤー大学 (米国) 別科にて (声楽・ピアノパフォーマンス) 単位取得	
平成 14 (2002) 年 7 月	第 9 回武蔵野音大インターナショナルサマースクールイントウキョウ (声楽講座) 修了	

教 育 歴 ・ 職 歴		
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容
南海保育専門学校	昭和 61 年 4 月～平成 1 年 3 月	保育学科非常勤講師(ピアノ I, II, 音楽リズム)
横浜高等教育専門学校	平成元年 4 月～平成 6 年 3 月	児童科保育課程、初等課程非常勤講師(器楽 I, II, 音楽演習、生活と表現)
横浜高等教育専門学校	平成 8 年 4 月～12 年 3 月	児童科保育課程、初等課程、非常勤講師 (器楽 I, II、音楽演習 I, II、生活と表現 I、音楽通論、声楽 I)
横浜高等教育専門学校	平成 12 年 4 月～平成 16 年 3 月	児童科保育課程・初等課程 専任講師 (器楽 I、II、ピアノ基礎、音楽 I、II、III、A、B、器楽合奏、声楽、総合演習)
小田原短期大学 (平成 26 年度 4 月より小田原女子短期大学から校名変更)	平成 16 年 4 月～平成 20 年 3 月	保育学科小田原女子短期大学幼児教育学科助教授「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「表現総合演習」「卒業研究ゼミナール」各担当
	平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月	小田原女子短期大学保育学科准教授「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「表現総合演習」「卒業研究ゼミナール」「海外文化事情」担当
	平成 21 年 4 月～平成 22 年 3 月	小田原女子短期大学保育学科 准教授「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「表現総合演習」「教職実務演習」担当
	平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月	小田原女子短期大学保育学科 教授「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「教職実務演習」担当
	平成 23 年 4 月～現在に至る	小田原女子短期大学保育学科 教授「音楽表現Ⅰ」「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」(現音楽表現Ⅰ, Ⅱ, Ⅲ)「卒業研究ゼミナール」各担当

所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)
日本声楽発声学会	昭和 60 年 9 月～現在	会員
横浜童謡協会	平成 1 年 4 月～現在	会員、実行委員 (平成 1 年 4 月～18 年)
日本保育学会	平成 9 年 5 月～現在	会員
全国大学音楽教育学会	平成 15 年 5 月～現在	会員・第 30 回 (平成 26 年) 全国大学音楽教育学会全国大会分科会記録員
日本オルフ音楽教育研究会	平成 16 年 8 月～現在	会員
日本ジャック・ダルクローズ協会	平成 16 年 9 月～現在	会員
日本音楽教育学会に入会	平成 18 年 6 月～現在	会員
幼児音楽研究会	平成 20 年 11 月～現在	会員

社会活動等				
名称	活動期間		活動内容	
小田原子育て支援フェスティバル実行委員会	平成18年4月～21年1月 平成19年4月～21年1月		小田原子育て支援フェスティバル実行委員(18～20年度)・会計監査(19～20年度)	
音楽活動及び親子音楽遊び音講師	平成19年4月～現在		茅ヶ崎子ども園音楽表現活動・親子音楽遊び(神奈川県子育て支援事業)	
大井町子育てセンター8月のお楽しみ会「子育てにもっと音楽を」講師	平成20年8月		大井町子育て支援センター主催「親子で音楽遊び」	
音楽活動及び親子音楽遊び音講師	平成21年11月～現在		松林保育園音楽表現活動・わくわくランド親子音楽遊び(神奈川県子育て支援事業)	
小田原市文学講座「白秋とマザーグース」第4回(講師)	平成26年度2月		小田原市文学講座「白秋とマザーグース」の第4回講座「子どもにとって童謡とは」	
担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
中学校教諭一級普通免許音楽	昭和59年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭二級普通免許音楽	昭和59年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭一級普通免許音楽	昭和61年3月	東京都教育委員会		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著 の別	発表の 年月	発表学会等の 名称	概要
「小田原短期大学保育学科通信教育課程テキスト科目「音楽表現Ⅱ」学習の手引き 2015年度版	共著	平成27年4月	小田原短期大学保育学科通信教育課程	本学、保育学科通信教育課程のテキスト科目「音楽表現Ⅱ」の学習を円滑に進めるための手引き書 第17～30講担当
「小田原短期大学保育学科通信教育課程テキスト科目「表現指導法」学習の手引き 2015年度版	共著	平成27年4月	小田原短期大学保育学科通信教育課程	本学、学保育学科通信教育課程のテキスト科目「表現指導法」の学習を円滑に進めるための手引き書(201改訂版) 第13, 14, 27, 28講担当
保育者養成における実践力を高める音楽技能教育への取組み	共著	平成21年5月	日本保育学会	第62回大会研究論文集 356ポスター発表(千葉大学)
保育者養成における実践力を高める音楽技能の教育への取り組みⅡ	共著	平成22年5月	日本保育学会	第63回大会研究論文集 ポスター発表(松山東雲女子大学・短期大学)
保育者養成校での音楽技能「声楽」の授業への一考察～呼吸法指導を中心として～	単著	平成21年10月	日本音楽教育学会	第40回大会研究発表 76(広島大学)
保育者養成校の音楽教育における感性を育む授業への一考察	単著	平成22年9月	日本音楽教育学会	第41回大会研究発表(埼玉大学)
保育者養成における実践力を高める音楽技能教育への取組みⅢ	共著	平成23年5月	日本保育学会	日本保育学会第64回大会発表論文集、ポスター発表(玉川大学)
子育て支援活動の音楽表現遊びから読み取れる望まれる保育者像	共著	平成25年5月	日本保育学会	日本保育学会第66回大会発表論文集、ポスター発表(中村学園大学短期大学部)
「タイ王国の幼児教育及び音楽表現活動の現状の一考察」	共著	平成26年5月	日本保育学会	日本保育学会第67回大会発表論文集、ポスター発表(大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学)
「地域力を活かした保育養成におけるピアノ技術の指導について」	共著	平成27年5月	日本保育学会	日本保育学会第68回大会発表論文集、ポスター発表(相山女学

「保育の音楽表現技術についての保育者研修方法の模索～外部講師による子どもの音楽表現活動についての保育者の振り返りシートに着目して～」	単著	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会研究発表論文集、ポスター発表（ロイトン札幌）
「音楽表現活動を通しての子育て支援の活性化への取り組み～」	単著	平成 19 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 37 号（2007 年 3 月）99 - 116
「音楽表現活動を通しての子育て支援の活性化への取り組み～」	共著	平成 19 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 37 号（2007 年 3 月）117 - 131
「実践現場における音楽表現活動の現状についての一考察」	共著	平成 20 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 38 号（2008 年 3 月）76 - 86
「乳幼児期における適切な音環境や音楽についての一考察」	共著	平成 20 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 38 号（2008 年 3 月）62 - 75
「おだっこ」におけるひろばと「おだっこワークショップ」の展望	共著	平成 20 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 38 号（2008 年 3 月）62 - 75
保育者養成校での音楽技能『声楽』の授業の取り組みへの一考察	単著	平成 21 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 39 号（2009 年 3 月）25 - 44
保育者養成における音楽技能の教育についての一考察	共著	平成 21 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 39 号（2009 年 3 月）45 - 53
地域に根ざす短期大学としての活動の枠組みに関する考察	共著	平成 21 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 39 号（2009 年 3 月）1 - 13
保育者養成校での音楽技能『声楽』の授業の取り組みへの一考察Ⅱ保育者の感性の養成に対する提言」	単著	平成 22 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 40 号（2010 年 3 月）26 - 46
保育者養成における音楽技能の教育についての一考察Ⅱ	共著	平成 22 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 40 号（2010 年 3 月）56 - 64
保育者養成における音楽技能の教育についての一考察Ⅲ	共著	平成 23 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 41 号（2011 年 3 月）40-48
子育て支援における音楽遊びの実践についての一考察～地域子育て支援の現状と課題の分析	共著	平成 24 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 42 号（2012 年 3 月）8 - 20
保育者養成における音楽表現の教育についての一考察～音楽的な表現活動の実践における課題～	共著	平成 25 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原女子短期大学研究紀要第 43 号（2013 年 3 月）30 - 41
「地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援（1）—小田原モデルの研究と試行—」	共著	平成 27 年 3 月	小田原女子短期大学	小田原短期大学研究紀要第 45 号（2015 年 3 月）50 - 63
ソプラノリサイタル（モーツァルト作曲『モテット』「踊れ喜び幸いなる魂よ」他	単独	平成 12 年 11 月	自主公演	「ベルカントの歌声をあなたに」（金沢区後援・長浜ホール）
コンサートに出演 ソプラノ独唱、重唱出演（ヴェディ作曲オペラ「リゴレット」より「美しい人の名は」他		平成 12 年 11 月	磯子文化協会	磯子スプリングンコンサート（磯子公会堂）の各年に独唱やアンサンブルで出演
ソプラノソリストとしてコンサートにゲスト出演（滝廉太郎作曲・水野利彦編曲「荒城の月 21」他）	共同	平成 15 年 11 月	コンサート実行委員会	琴のコンサート「ひとひらの桜によせて」長崎市チトセピアホール
ソプラノソリストとしてコンサートに出演	共同	平成 20 年、22 年の各 11 月	ベルカント茅ヶ崎	第 25 回、27 回クラシックヴォーカルコンサートにソプラノ独唱とアンサンブルで出演（茅ヶ崎市民会館）
第 23 回横浜童謡協会コンサートに出演	共同	平成 23 年 6 月	横浜童謡協会	横浜童謡協会童謡コンサート第 23 回出演
ソプラノソリストとしてコンサートに出演	共同	平成 23 年 10 月	ベルカント茅ヶ崎	第 28 回クラシックヴォーカルコンサート「城山三郎を偲んで」出演
第 24 回横浜童謡協会コンサートに出演	共同	平成 24 年 5 月	横浜童謡協会	横浜童謡協会第 24 回童謡コンサートに出演
タイ王国, アサンプション大学における招請コンサート出演	共同	平成 25 年度 1	タイ王国, アサンプション	タイ王国アサンプション大学音楽学部にて招待演奏及び同大学ミュ

タイ王国のダラサムット学校幼稚園の音楽表現活動を含む幼児教育についての研究視察	共同	月 平成 25 年度 1 月	大学 タイ王国ダラ サムット学校 幼稚園	ニケーションアート学部にて「竹 取物語」の音楽劇上演 タイ王国の音楽表現活動を含む幼 児教育の研究の為、タイ王国ダラ サムット学校幼稚園を視察
第 25 回横浜童謡協会コンサートに出演	共同	平成 25 年 5 月	横浜童謡協会	横浜童謡協会第 25 回童謡コンサ ートに出演
ソプラノソリストとしてコンサートに出演	共同	平成 25 年 10 月	ベルカント茅 ヶ崎	第 30 回クラシックヴォーカルコ ンサート（茅ヶ崎市民会館）に出演
第 26 回横浜童謡協会コンサートに出演	共同	平成 26 年 5 月	横浜童謡協会	横浜童謡協会第 26 回童謡コンサ ートに出演（関内ホール）
第 30 回全国大学音楽教育学会全国大会研究演奏	共同	平成 26 年 8 月	全国大学音楽教 育学会	全国大学音楽教育学会全国大会研究演 奏（暮らしの中の自然から生まれた子 どもの歌～昔と今～）に独唱と二重唱 で出演（音楽之友社ホール）
ソプラノソリストとしてコンサートに出演	共同	平成 27 年 10 月	ベルカント茅 ヶ崎	第 25 回、27 回クラシックヴォー カルコンサートにソプラノ独唱と アンサンブルで出演（茅ヶ崎市民 会館）
子育て応援ブックDVD～赤ちゃんを育て始めた あなたへ～	共同	平成 27 年 10 月		神奈川県政策研究に伴う地域赤ちゃん ひろばの運営の為の子育てヒント集の DVD「感性が育つ」項担当
乳幼児研究所幼児教室パンフレット制作	共著	平成 28 年 2 月		平成 27 年度神奈川県地域創生採択事 業の活動である乳幼児研究所の幼児教 室の 1 年間の活動の成果としてパンフ レットを製作した。（編著担当）
おだたんクラブのうたCD	共著	平成 28 年 3 月		平成 27 年度神奈川県地域創生採択事 業の一環としてのおだたんクラブのう たCD制作編集と歌唱担当、
その他（表彰等）	平成 11 年 8 月	ベストプレーヤーズコンテスト入選		

## 専任教員教育研究業績

平成 28 年 6 月 30 日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
上野 奈初美	うえの なうみ	保育学科	学科長 教授 准教授・講師・助教	男 (女)
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委 員 長)	
身体表現Ⅱ、表現指導法、保育実習指導Ⅰ、ゼミナール			自己点検・評価委員会委員長 (ALO) 通信学務委員会委員長	

## 学 歴

和暦 (西暦) 年 月	事 項	学位
昭和 56 (1981) 年 3 月	東京女子体育大学体育学部体育学科卒業	体育学士
平成 11 (1999) 年 3 月	大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻修士課程修了	修士 (教育学)

## 教 育 歴 ・ 職 歴

名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容
大手前女子大学文学部助手	昭和 58 年 4 月～昭和 62 年 3 月	「保健体育」担当
大阪成蹊 (旧大阪成蹊女子) 短期大学児童教育学科 幼児教育学専攻専任講師	昭和 62 年 4 月～平成 7 年 3 月	「体育Ⅰ・Ⅱ」、「教科・保育内容演習」担当
同 助教授	平成 7 年 4 月～平成 14 年 3 月	「体育Ⅰ・Ⅱ」、「教科教育法」、「健康」、 「教科・保育内容演習」担当
同 教授	平成 14 年 4 月～平成 26 年 3 月	「健康」、「幼児体育」、「専門演習」、「実習事前事後指導」担当
小田原短期大学保育学科 教授	平成 26 年 4 月～現在	「身体表現Ⅰ・Ⅱ」、「表現指導法」、「保育実習指導Ⅰ」、 「ゼミナール」担当

## 所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)
日本体育学会	昭和 58 年 4 月～現在	大会参加・発表
日本学校保健学会	平成 3 年 4 月～現在	大会参加・発表
近畿学校保健学会	平成 3 年 4 月～現在	大会参加・発表、評議員
日本保育学会	平成 18 年 4 月～現在	大会参加・発表
日本教育心理学会	平成 19 年 4 月～現在	大会参加・発表

## 社 会 活 動

名 称	活動期間	活 動 内 容
河合美智子モダンダンスア ート	平成 19 年～現在	幼児から成人までの身体表現活動を研究
平成 21 年度教員免許状更 新講習「幼稚園教諭」	平成 21 年	幼稚園教諭を対象に「健康」、「体育」を担当
発育表現アドバイザー資格 認定講座	平成 21 年～平成 22 年	認定講座テキスト執筆および講習会指導「身体表現」を担当
平成 24 年度全国保育士養 成セミナー・研究大会実行 委員	平成 24 年	第 12 分科会「保育士養成校教員に求められるもの」の企画、司 会および運営全般を担当

真鶴町立幼稚園園内研修 講師		平成27年10月	テーマ「3～5歳までの発達と保育」 教職員、園児および保護者対象の園内研修で講演と実践を担当	
担当教科目に関する資格・免許等				
名称		取得年月	取得機関	
中学校教諭一級普通免許状 (保健体育)		昭和56年3月	東京都教育委員会(4803号)	
高等学校教諭二級普通免許状 (保健体育)		昭和56年3月	東京都教育委員会(4845号)	
レクリエーション・インストラクター		平成17年4月	(財)日本レクリエーション協会	
福祉レクリエーション・ワーカー		平成24年9月	(財)日本レクリエーション協会	
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 幼稚園専門教養の要点と問題 (2016年度版) 2. 保育入門テキスト 3. 保育士のための基礎知識 (2017年度版)	共著 共著 共著	平成27年1月 平成27年3月 平成27年8月	大阪教育図書 萌文書林 大阪教育図書	幼稚園教諭を目指す学生向けに領域「健康」について要点を解説。第2章(63～102頁) 児期の「運動あそび」について解説。保育を志す高校生向けに執筆。Chapter3(14～18頁) 「保育表現技術(身体表現)」の展開方法について実践例を取り上げ解説。第10章(332～340頁)
(学術論文) 1. 資格取得科目で何を教えるのかー保育士資格『基礎技能 体育II』ー 2. 女子大学生のやせ願望に関する研究 3. 携帯電話の使用と自尊感情との関係 4. 短大生のメンタルヘルスに関する探索的研究ー2つの学科の比較ー 5. 女子大学生の生活習慣に関する一考察 6. 保育専攻学生の精神的健康度	単著 共著 共著 共著 共著 共著	平成20年3月 平成21年9月 平成23年9月 平成24年3月 平成25年2月 平成25年3月	教育支援センター年報(2007年度版) 大阪成蹊短期大学 大阪教育大学紀要第III部門第58巻 大阪教育大学紀要第III部門第60巻 大阪成蹊短期大学研究紀要第9号 人間関係研究14 大妻女子大学 大阪成蹊短期大学研究紀要第10号	FD研究の一環として授業改善へ向けた取り組みについて実践の振り返りをまとめ考察を加えた。 やせ願望の実態とやせ願望と自我同一性との関わりについて調査結果をまとめた。 携帯電話を介したインターネットへの依存と自尊感情との関わりについて調査結果をまとめた。 2つの学科に属する短大生を対象にメンタルヘルスに関する調査を行った。目的々学科に属する学生ほど「生きがい度」が高い傾向にあることが分かった。また、ストレスを抱えている学生ほど「生きがい度」が低いことが分かった。 質問紙を用いて女子大生の健康習慣について調査を実施し学年別の比較を行った。「規則性」については学年と共に低下傾向があることが明らかとなった。 保育専攻学生を対象に学習不適応学生を抽出し、精神的健康度の調査結果および生活習慣に関する自己評価記述をもと

-学習不適応学生の分析からの一考察-				に分析を行った。複数のストレスを抱えている学生を早期に発見し、入学直後からの個別指導が不可欠であることが分かった。
7.大学生の健康度と生活習慣 -保育・看護・一般学生-	共著	平成27年3月	小田原短期大学研究紀要第45号	保育、看護といった資格取得を目指す学生を対象に調査を行った。保育学生は「運動行動」が有意に低く、看護学生は「休息」が有意に低かった。保育学生には運動行動を促すような働きかけが必要なことが分かった。
8.看護系大学生の生活習慣とストレス・生きがいについての検討 -統計的な報告-	単著	平成28年3月	小田原短期大学研究紀要第46号	看護系大学の学生を対象に生活習慣タイプ別におけるストレスと生きがいの関連性について検討を行った。生活習慣が好ましいタイプはそれ以外のタイプと比較して、満足感や挑戦課題を持ち生活している傾向が強いことが分かった。
(報告書) 1.全国保育士養成セミナー報告書	共著	平成25年3月	保育士養成資料集第57号 (社)全国保育士養成協議会	平成24年開催の保育士養成セミナー分科会「新任教員の課題 -保育士養成校教員に求められるもの-」の討論内容についてまとめた。
(口頭発表) 1.保育所における生活リズム形成の実践研究(I・II)	共同	平成21年5月	日本保育学会第62回大会 千葉大学	保育所に通う4、5歳児を対象に生活リズムカードを保育の中で導入することにより、子ども達の生活リズムがどのように変化するか介入研究を行った。その結果、朝食・挨拶・手洗いへの意識が変わり積極的に取り組むようになった。
2.保育学生の心理適応過程分析の試み(第4報)	共同	平成22年5月	日本保育学会第63回大会 松山東雲女子大学	2年間を通して学生の「心の強さ」がどのように変化するか、データ分析を通して検討を行った。学生支援に用いるためには妥当性の高い尺度の開発が必要と考えられた。
3.「保育・教職実践演習」平成23年度実践報告と検討	共同	平成24年11月	日本教育心理学会第54回総会 琉球大学	平成23年度より開講した「保育・教職実践演習」の授業内容についてのまとめと今後の課題について報告した。
4.自己評価からみた実習指導の課題	共同	平成25年9月	全国保育士養成協議会第52回研究大会 サポートホール高松	1回目の実習終了後に実施した学生の自己評価結果から「保育課程や指導計画」についての理解を深める、「最善の利益を具体化する方策や倫理観」を確かなものとする、子どもを介在として「保育者、保護者、地域社会と関わる場面をつくる」ことが今後の実習指導の課題として明らかとなった。
5.資格取得を目指す学生の精神的健康度 -保育・看護・スポーツ専攻生の場合-	共同	平成26年11月	日本教育心理学会第56回総会 神戸国際会議場	資格取得を目指す学生を対象に精神的健康度調査を実施した。「注意散漫」といったストレス項目は看護学生が有意に高かった。また、満足感や精神的ゆとりも看護学生が低いことが分かった。
6.「保育表現技術(身体表現)」科目の授業内容について -シラバス分析を通して-	単独	平成27年9月	全国保育士養成協議会第54回研究大会 ロト札幌	保育者養成校における教科目「身体表現」の授業内容について加盟校を対象にシラバス分析を行った。多くの短大では基礎・基本から応用・発展といった積み上げ方式の授業を展開していることが分かった。
7.看護学生の生活習慣とストレス・生きがいについての一考察	共同	平成27年11月	第62回日本学校保健学会 岡山コンベンションセンター	看護学生を対象に生活習慣とストレスに関する調査を行った。「生活満足」や「生活意欲」といった生きがいを持っている学生ほど、生活習慣が良好であることが分かった。
(講演等) 1.現代保育研究所		平成23年8月	平成23年度現代保育	保育士養成校教員を対象に、養成課程改正に伴う新科目「保

<p>研修会講演・シンポジスト</p>			<p>研究所研修会 (社)全国保育士養成協議会</p>	<p>育表現技術(身体表現)分野における『新科目の基本的な考え方と授業展開』について、約30の養成校のカリキュラム分析を中心に講演および討論のシンポジストを務めた。</p>
<p>その他(表彰等)</p>				

## 専任教員教育研究業績

平成 28 年 6 月 20日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
間野 百子	まの ももこ	保育学科	学科長 教授・准教授・講師・助教	男・女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委 員 長)	
幼児理解の理論と方法、卒業研究 (ゼミナール)、 児童館実習指導、児童館の機能と運営、ボランティア活動、職業と社会 I・II 基礎学力演習			教授会、カリキュラム委員会、紀要委員会 おだたん人間成長講座運営委員会	
学 歴				
和暦 (西暦) 年 月	事 項			学位
S60(1985) 年 3 月	津田塾大学学芸学部英文学科			学士 (文学)
H14(2002) 年 3 月	東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士前期課程修了			修士 (教育学)
H20 (2008) 年 3 月	東京大学大学院教育学研究科総合教育科学専攻博士後期課程満期退学			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
都留文科大学文学部社会学科	H17年4月～H23年3月	非常勤講師「生涯学習論」「社会教育演習」「社会教育課題研究」担当		
明星大学日本文化学部言語文化学科	H17年4月～H23年3月	非常勤講師「生涯学習概論」担当		
立正大学文学部心理学科	H18年4月～H23年3月	非常勤講師「生涯学習概論 I・II」担当		
昭和音楽大学音楽部音楽学科	H21年4月～H26年3月	非常勤講師「生涯学習概論」「社会教育計画論」「社会教育演習・実習」「社会教育特講II」担当		
宇都宮共和大学子ども生活学部	H23年4月～H26年3月	教授「フィールドワーク」「子どもの生活史」「児童館の機能と運営」「現代の教養講座III」「子どもの生活とコミュニティ」「子育て支援演習」「世代間交流」担当		
日本映画大学映画学部	H25年4月～現在	非常勤講師「社会教育活動」担当		
小田原短期大学	H26年4月～現在	保育学科教授		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)		
日本社会教育学会	H14年7月～	学会員 (現在に至る)		
日本教育学会	H15年4月～	学会員 (現在に至る)		
日本家族社会学会	H15年4月～	学会員 (現在に至る)		
アメリカ教育学会	H19年4月～	学会員 (現在に至る)		
日本世代間交流学会	H22年6月～	学会員 (現在に至る)		
日本更生保護学会	H25年4月～	学会員 (現在に至る)		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
	年 月～ 年 月			
特定非営利活動法人日本世代間交流協会	H16年8月～ 年 月	理事 (現在に至る)		
日本世代間交流学会	H22年6月～ 年 月	評議員 (現在に至る)		
文部科学省国立教育政策研究所	H22年4月～H25年3月	「生涯学習の実態とその長期的変化に関する調査研究」研究員		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
中学校教諭免許一級普通免許 第4170号 (英語科)	S60年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭免許二級普通免許第4220号 (英語科)	S60年3月	東京都教育委員会		

研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
1. 『生涯学習がつくる公共空間』	共著 (分担執筆)	平成 15 年 3 月	柏書房	佐藤一子編著、佐藤一子・新谷周平・藤村好美他著 「高齢者の社会参加とセルフ・ヘルプ活動」第四章三節を担当。 (pp. 152-163) 担当章では、高齢者の社会参加のあり方を、共有課題の軽減や克服を目的とする「セルフ・ヘルプ」活動に焦点をあてて検討した。実践事例として、孫の養育・教育責任を担う祖父母たちの活動をグループワーク理論にもとづいて検討した。日本においても、教育・福祉の領域で高齢者主体のセルフ・ヘルプ活動が盛んになり始めている。結論として、わが国で高齢市民主導・参加型の相互支援活動を発展させていくうえでの課題を考察した。
2. 『インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流』	共著 (分担執筆)	平成 16 年 7 月	至文堂	草野篤子・秋山博之編集、草野篤子・秋山博之他著 「インタージェネレーションの現状と課題」を担当 (pp. 66-72)。 「インタージェネレーション」(世代間) という概念は、「若年世代と高齢世代の人びとの双方向的な交流活動が、両世代に特有の心理・社会的ニーズの充足に資する」という理論仮説に依拠している。現在では、成人世代の教育・福祉ニーズも視野に入れた社会問題対応型の活動へと発展している。 本章では、1960 年代半叶以降、米国を発祥の地として組織的・体系的に展開されているインタージェネレーション・プログラムの歴史的展開とプログラムを遂行していくうえでの課題を明らかにした (B5 版、全頁数 220 頁)。
3. 『世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から』	共編著	平成 21 年 5 月	三学出版	近年わが国においても、過度の競争主義が導入された結果、教育・医療・福祉などの公共領域にまで経済格差の拡大に伴う悪循環が及んでいる。本書では、このような社会・経済状況のなかで、異なる世代の人びとが各自の自立や発達を目指して相互に支援しあっている草の根レベルの活動に焦点をあてた。市民主導型・参画型の活動を理論的・実証的に検討し、世代間の交流関係から生じる特有の効果を科学的に検証していくことの意味とその課題について明らかにした。 担当章では、一般の高齢市民が、情緒不安、学業困難を抱えている子ども・若者を個別継続的に支援する世代間メンタリングに焦点をあてて、その社会的役割と独自の効果について検討した。米国では、1980 年代半叶以降、青少年による問題行動の急増が社会問題視され、非行予防対策の一環としてメンタリングが導入されるようになった。組織的・体系的なメンタリング実践のプログラムの立案から実施に至るプロセスを検討した結果、参加高齢者と青少年の関係を客観的な立場で支援するスタッフの役割も大きいことが明らかになった。
4. 『世代間交流学の創造—無縁社会から多世代間交流型社会の実現のために』	共編著	平成 22 年 12 月	あけび書房	草野篤子・柿沼幸雄・金田利子・藤原佳典・間野百子編著 (A 5 版、全頁数 245 頁) 「世代間の相互学習・相互支援の視点から」第 I 部 3 章を担当。 (pp. 49-59) 本書は、世代間交流という概念を既存の社会構造に導入することにより、これまで世代・職業・症状などに基づいて分断して営まれてきた保育・教育、福祉活動のあり方を転換していくことを提案した。さらに、世代間交流という「論」を「学」へと発展させていくために、その理論的枠組みと実践現場での活かし方について検討し、世代間交流活動が創出する多世代交流型の公共空間の展望と課題について明らかにした。 担当章では、世代間交流学の独自性を支える理論として、世代間の「相互学習・相互支援」を提案した。専門職化の進展に伴い、教育行為、支援行為の提供者・受容者としての役割が固定化されてきた現代の社会構造に「多世代共生」の視点を取り入れ、子ども・若者や高齢者が学習や支援行為の提供者として参加できる実践を発展させていくうえでの課題について検討した。

<p>5. 『教育老年学と高齢者の学習』</p>	<p>共著 (分担執筆)</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>学文社</p>	<p>堀薫夫編著 (A5版、全頁数253頁) 「アメリカにおける高齢者のセルフ・ヘルプ・グループの展開：孫を養育する祖父母たちの活動を事例として」第6章を担当。(pp.170-186) 本書は、生涯学習の完成期である高齢期に特有の学習理論を組み立てることを目的とした。高齢者の生活と人生に織り込まれた根底的な「学習」による成長を、支援者のみならず同輩や社会や組織がささえるという視点を加味して分析した。 担当章では、高齢世代の人びとの学習実践として、親の代わりに実孫を養育・教育している祖父母同士のセルフ・ヘルプ活動について検討した。祖父母は新しい役割に適応できないうえに、被害者意識を有している。不安や葛藤を内面化している祖父母たちが、互いの体験に伴う知識を共有したり、分からなかったりすることから生じる体験的学習を重ねながら次第に自分の役割を受け止めつつ他者を援助する、セルフ・ヘルパーへと変容していくプロセスについて明らかにした。</p>
<p>6. 『世代間交流の理論と実践 1：人を結び、未来を拓く世代間交流』</p>	<p>共著 (分担執筆)</p>	<p>平成 27 年 3 月</p>	<p>三学出版</p>	<p>草野篤子他編著 (A5版、全頁数181頁) 「非行少年の更生支援における民間ボランティアの役割：BBS運動の展開に焦点をあてて」第4章を担当 (pp.41-53) 担当章では、戦後日本における非行少年の地域内処遇の現代的意味について、少年の立ち直りを支えてきた民間ボランティアの支援活動に着目して検討した。検討をとおして、青年による非行少年支援活動である、アメリカ発祥のBBS (Big Brothers and Sisters) 運動の我が国における歴史的展開と今後の発展性について明らかにした。</p>
<p>(学術論文) 1. 「米国における高齢者の社会参加の意義と促進—AARPのコミュニティ活動を通しての考察」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p>	<p>『東京大学大学院教育学研究科紀要』第42巻、東京大学大学院教育学研究科、pp.429-437</p>	<p>AARP (「全米退職者協会」、American Association of Retired Persons) は、「高齢者もサービスの受け手ではなく、担い手になろう」という理念を掲げて 1958 年に設立され、現在では、全米最大規模の非営利団体へと発展している。本稿では、AARP がコミュニティを基盤として展開している会員によるボランティア活動の検討をとおして、高齢者の知恵や経験を社会全体の人的資源として活用することの意味と今後の課題を考察した。</p>
<p>2. 「米国における祖父母教育と祖父母同士のサポート・グループ—親役割の代行に伴う課題解決に向けて」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 15 年 12 月</p>	<p>『生涯学習・社会教育学研究』第28号、東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育研究室、pp.11-20。</p>	<p>北米では、1990年代以降、子どもの養育義務を果たせない親に代わり、実孫の教育・養育責任を担う祖父母が急増している。しかし、孫の「親役割」を代行する祖父母への公的な支援体制は整備されておらず、大半の祖父母は経済的・社会的・精神的に困難な状況に陥っている。本稿では、このような祖父母を対象とする情緒・情報支援のあり方について、祖父母に対するサポート・グループと大学が主催する「祖父母教育」をとおして検討した。</p>
<p>3. 「セルフ・ヘルプ・グループによるサポートの特質課題—米国における配偶者を亡くした人同士のグリーフ・ケアを中心に」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 16 年 12 月</p>	<p>『生涯学習・社会教育学研究』第29号、東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育研究室、pp.45-54。</p>	<p>現代社会においては、親族・家族を主体とする私的支援のみで、人びとが直面するさまざまな心理・社会的困難に対応することは難しい。そこで本稿では、インフォーマルなサポートの源としての「セルフ・ヘルプ」活動に着目して、同質課題を有する人たちの支援活動について理論的・実証的に検討した。実践例として、配偶者を亡くし、「グリーフ」(大切な人との死別に伴う精神的衝撃が多大で、日常生活を営むうえで困難を抱えている状態)に陥っている人同士の相互支援活動の現状と課題を明らかにした。</p>
<p>4. 「青少年との相互交流をとおした高齢者の社会参加活動—米国におけるメンター役割の遂行を中心に」</p>	<p>単著</p>	<p>平成 17 年 3 月</p>	<p>『東京大学大学院教育学研究科紀要』第44巻、東京大学大学院教育学研究科、pp391-399。</p>	<p>米国では、青少年と高齢者の相互交流の機会を意図的に創出する「世代間プログラム」の研究が教育学、社会福祉学、社会学などの領域で蓄積されている。本稿では、一般の高齢市民が、「メンター」として問題をかかえる青少年とともにコミュニティ活動に参加するプログラムについて検討した。検討をとおして、地域住民、学校、そして専門機関の協働によるプログラムを成功裡に進展させていくうえでの課題を析出した。</p>

5. 「世代間相互支援をとおした高齢者の若年世代への貢献—ソーシャル・サポート源の拡張に向けて」	単著	平成 17 年 6 月	『エイジレス・フォーラム』第 3 号、シニア社会学会、pp.19-29。	少子・高齢社会を迎えたわが国においては、心身の健康に恵まれた高齢世代の人びとが、教育・福祉サービスの提供者としての役割を果たすことが求められている。そこで本稿では、高齢市民がケア・サービスの担い手として関わる、「レスパイトケア（一時休息ケア）（心身の障害や慢性疾患を有する子どもの介護者のケア）について検討した。検討をとおして、高齢の一般市民の子育て経験などを活用するタイプの社会貢献活動を促進するうえでの課題を明らかにした。
6. 「世代間統合施設の今日的意義と課題—米国の展開をとおして」	単著	平成 17 年 12 月	『生涯学習・社会教育学研究』第 30 号、東京大学大学院教育学研究科生涯教育計画講座社会教育研究室、pp.11-20。	米国では、1990 年代以降、青少年施設と高齢者施設の統合化が進められている。本稿では、そのような施設において展開されている「世代間統合施設」（Intergenerational Shared Site）プログラムの分析をとおして、統合施設ゆえに遂行できる世代間活動を成功裡に進展させていくうえでの課題を析出した。その結果、プログラムの立案に始まり、実施、フィードバックへと至る過程に関与するスタッフの養成が緊急課題であることを提起した。
7. 「高齢者同士のセルフ・ヘルプ活動の意義と特質—米国における相互支援活動に焦点をあてて」	単著	平成 18 年 3 月	『明星大学研究紀要』第 14 号、明星大学日本文化学部・言語文化学科、pp.119-126。	米国では、1930 年代半ば以降、同質の問題を抱える人同士が共有課題の解決・軽減に向けて支援しあう「セルフ・ヘルプ」活動が展開されている。本稿では、高齢世代に特有の情緒面の課題に対処していくうえで、セルフ・ヘルプ活動が参加者に及ぼす影響について検討した。その結果、高齢者グループでは、「自己開示率」（内面の課題や葛藤を他者に打ち明けること）が高く、グループへの帰属意識も強い一方で、メンバー相互の依存性を高めてしまうことが課題であることを明らかにした。
8. 「統合施設における世代間活動の展望と課題—米国の IGSS プログラムに焦点をあてて」	単著	平成 18 年 3 月	『世代間交流学研究』第 1 号、関西世代間交流研究会、pp.47-59。	本稿では、さまざまな世代の人びとがそれぞれの世代特有の教育課題や福祉ニーズを充足するために集う「統合施設」の利用者のニーズにそくしたサービス活動を提供していくうえでの課題について検討した。その結果、異なるニーズを有する人びとを対象としたプログラムを効果的に遂行していくためには、「世代間スペシャリスト」（児童心理学から老年学にいたるまでの知識と現場経験を有する人）が活動をコーディネートしていく必要性が高いことを明らかにし、人材の育成が課題であることを提起した。
9. “Role of Self-help Activities in Lifelong Learning: An Examination of the ‘Grief & Loss’ Programs in the U.S.”	単著	平成 19 年 10 月	『都留文科大学紀要』第 66 集、都留文科大学、pp.139-151。	本稿では、生涯学習の実践に「セルフ・ヘルプ」活動を取り入れていくことの必要性と課題を米国の先進動向をとおして検討した。多様な「セルフ・ヘルプ」活動のなかでも、配偶者、家族、友人などの死別に関し、その精神的衝撃により「グリーフ」に陥っている人同士の活動に着目し、そこで展開される「学びのプロセス」とグループワークを主導するリーダーの役割に焦点をあてた。最後に、このタイプの活動を発展させていくうえでの課題を明らかにした
10. “Role of Intergenerational Mentoring for Supporting Youth Development: An Examination of the ‘Across Ages’ Program in the U.S.”	単著	平成 19 年 12 月	Educational Studies in Japan, International Yearbook, Japanese Educational Research Association, No.2 (『教育学研究』英語版、第 2 号、日本教育学会、pp.83-94)。	今日わが国においても、子ども・若者の非行予防に向けた取り組みが行なわれている。米国では、1990 年代以降、成人期に向けて心身ともに健全に成長していくうえで問題を抱え、非行に走る可能性が高い青少年の支援対策が官民協働で図られてきた。本論では、支援プログラムの一環として教育現場に導入されている、「世代間メンタリング」のモデルプログラムの企画・運営の仕方とプログラム参加者に及ぼす効果について分析した。結論として、子ども・若者の非行予防対策に「メンタリング」を取り入れていくうえでの課題を理論的・実証的に明らかにした。

<p>11. 「成人教育におけるセルフ・ヘルプ活動の役割—米国の『祖父母の会』に着目して」</p> <p>12. 「米国における祖父母と孫の世代間家族の現状と課題—孫を養育する祖父母支援に焦点をあてて」</p> <p>13. 「孫の養育者としての祖父母の役割—アメリカの『一世代スキップした家族』に着目して」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成 21 年 9 月</p> <p>平成 24 年 6 月</p> <p>平成 25 年 1 月</p>	<p>『アメリカ教育学会紀要』第 20 号、アメリカ教育学会、pp.58-69。</p> <p>『日本世代間交流学会』第 2 号、日本世代間交流学会、pp.9-17。</p> <p>『季刊家庭経済研究』家計経済研究所、平成 25 年、Winter, pp.42-49。</p>	<p>本論では、成人教育の理論やその実践における、セルフ・ヘルプ・グループ特有の役割について、全米規模にまで発展を遂げてきた活動、「祖父母の会」の展開に焦点をあてて検討した。市民が自治的に運営する草の根のグループ活動を財政的に安定させ、継続的に進展させていくうえで、NPO 団体との協働関係やセルフ・ヘルプ・リソース・センターをととした各グループへの情報支援が重要であることを明らかにし、日本での活動を発展させていくうえでの示唆を導いた。</p> <p>近年、自身の問題（失業、疾病、投獄、虐待など）により、子どもの養育義務を果たせない親が増加している。祖父母は実の孫が社会的養護のもとで生育することを回避するセーフティネットとしての役割を果たしている一方で、親族によるケアに対する公的な支援は整っていない。そこで本論では 1990 年代以降、世代間関係の主要テーマとして位置づけられている、「祖父母と孫の世代間家族」特有の課題とその支援体制について検討した。</p> <p>本号では、親世代を介在した祖父母と孫の関係性についての特集が生まれ、子育て中の親にとつて祖父母世代のインフォーマルなケアが重要であることが検証された。</p> <p>本稿では、親が実子の養育義務を果たせないために、孫の親権者として親役割と祖父母役割を担う祖父母とその孫を構成員とする家族の抱える特有の課題を明らかにした。孫を養育している祖父母も子育て支援対策の一環として位置づけられてきた歴史的展開をアメリカの動向をもとに検討した。</p>
<p>(その他、報告書)</p> <p>1. 『地域づくり・教育と自治体教育行政—川崎市・木曾調査報告書』</p> <p>2. 科学研究費報告書「NPO の教育力と社会教育の公共性をめぐる総合的研究」</p> <p>3. 「成人教育のための法制」『労働市場のためのオープン・ラーニング』「近隣センターとクラブスクール」</p> <p>4. 「世代間プログラム『どの程度深く関与するか』の問題」</p>	<p>共著 (分担執筆)</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 13 年 3 月</p> <p>平成 15 年 3 月</p> <p>平成 15 年 9 月</p> <p>平成 16 年 7 月</p>	<p>佐藤一子・小川正人発行、東京大学教育学部教育行政学コース編集、佐藤一子・小川正人他著</p> <p>平成 13・14 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1)</p> <p>東洋館出版</p> <p>至文堂</p>	<p>担当項目「奈良井宿の町並み保存活動」</p> <p>本調査では、神奈川県川崎市ならびに長野県木曾を事例として、それぞれの地域の特性を活かした「まちづくり」を推進していくうえで、行政職員と地域住民の連携がいかに図られてきたかを実証的に検証した。本論では、奈良井宿の町並み保存活動の歴史的展開について、活動に関与されてきた地域住民や行政側職員へのインタビューを踏まえて検討した。調査結果にもとづいて、過疎化、高齢化の進展する地域社会における官民協働の取り組みの今後の課題を明らかにした (A 4 版、全頁数 300 頁)。</p> <p>佐藤一子研究代表、佐藤一子・高橋満・田中雅文・辻浩他著 担当項目「高齢者の社会参加を推進する NPO—AARP」</p> <p>本研究では、わが国の NPO 団体の理論的・歴史的・実証的検討をととして、NPO 団体特有の「教育力」に関して検証した。担当論文では、全米最大規模の NPO 団体、AARP (「全米退職者協会」American Association of Retired Persons) が展開するコミュニティを基盤とした教育・福祉活動の特質を明らかにした。さらに、NPO 団体が公共的課題に対処していくために果たすべき社会対処の使命と役割について検討した (A 4 版、全頁数 337 頁)</p> <p>パオロ・フェデリーニ編、佐藤一子・三輪健二監訳『ヨーロッパ成人教育用語事典』翻訳箇所(pp.86-87, p.146, pp.156-157)</p> <p>EU 加盟国では、「成人教育」が教育市場の一翼を担っている。本書は、成人教育関連のキーワードを集約し、教育関係者の共通認識を促進することを目的として編纂された。</p> <p>担当箇所では、ルーマニア、ハンガリー、スイスの最新事例をととして、成人の特性を活かした教育方法、法制度について明らかにした。</p> <p>マット・カブラン著、間野百子訳、草野篤子・秋山博之編集「インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流」『現代のエスプリ』第 444 号 (B5 版、全頁数 220 頁) 翻訳箇所 (pp.51-58)</p> <p>本論文では「世代間関与の深さ」という尺度を用いて、世代間交流プログラムの参加者同士の人間関係がどのように変化していくかについて分析した。世代間交流事業をととして、がダイナミックで発達的な人間関係が構築されていくプロセス 7 を明示したうえで、参加者のニーズや状況に応じたプログラムの立案・遂行、ならびに、終了後の効果評価の結果を次に活用していくことの必要性について論じた。</p>

5. 「プログラムによる世代間交流の促進」	共著	平成 16 年 7 月	至文堂	ナンシー・ヘンケン著、間野百子訳、草野篤子・秋山博之編集「インタージェネレーション：コミュニティを育てる世代間交流」『現代のエスプリ』第 444 号 (B5 版、全頁数 220 頁)。翻訳箇所 (pp.59-65) 本論文では、家族関係や社会構造の急速な変動に対応していくうえで世代間交流の視点が鍵となることを提案し、コミュニティを基盤とする市民活動の一環として世代間交流プログラムが果たすべき役割と課題を明らかにした。今後、世代間共生型コミュニティを構築していく際に鍵となる事項を具体的提示し、それぞれの課題と展望について検討した。
6. 「世代間交流の実践における評価の重要性」	共著	平成 18 年 3 月	全日本社会教育連合会	サリー・ニューマン&エリザベス・ラーキン著、高橋恵・間野百子訳『社会教育』2006年3月号(A4版、全頁数88頁)。翻訳箇所(pp.30-36) 本誌は、世代間交流の特集を組み、「子ども」「高齢者」という世代別の縦割りの行政政策に世代間交流の視点を取り入れることを提案した。本論文は、世代間交流事業を発展させていくために、科学的・客観的な尺度を用いて、交流活動の効果を検証し、政策立案者や関係機関にアピールしていくことの必要性を訴えた
7. 『社会教育・生涯学習辞典』	共著	平成 24 年 11 月	朝倉書店	本辞典は国内外の「社会教育・生涯学習」に関連することがらを約 300 項目抽出し、各項目の定義、歴史的展開、最新の動向、今後の展望や課題について総括したものである (全頁数 674 頁) 担当項目「受容」(pp.274-275) ; 「ケアリング」(pp.122-123); 「グリーンワーク」(pp.118-119); 「エンカウンターグループ」(p.44); 「アウェアネス」(p.3) 「AARP、全米退職者協会」(p.36)。
8. 「生涯学習の学習需要の実態とその長期的変化に関する調査研究報告書」	共著	平成 25 年 3 月	文部科学省国立教育政策研究所生涯学習政策研究部、立田慶裕研究代表 (平成 22-24 年度) 国立教育政策研究所	本調査は、国民の学習ニーズを把握し、生涯学習政策に反映させることを目的に行なった、アンケート調査、インタビュー調査結果に考察・分析を加えたものである (A4版、全頁数 593 頁)。間野百子は、第 4 部「高齢者の社会参加と学習」第 3 章「高齢者の情報活用」を担当した。IT 化の進展が高齢者の情報収集力・活用力に影響を及ぼし、経済格差が情報の質にまで拡大しており、情報弱者に向けた取り組みが必要であることを明らかにした (pp.442-459、全頁数 18 頁)。
9. 「音楽と絵本のハーモニー」	単編著	平成 25 年 3 月	「麻生図書館、昭和音楽大学・昭和音楽短期大学協働企画報告書」昭和音楽大学・昭和音楽短期大学社会教育主事課程	本報告書は、昭和音楽大学における平成 24 年度社会教育主事課程の必修科目「社会教育演習・実習」の授業の一環として、麻生図書館と協働で企画・運営した親子向けイベントの一連の流れ (趣旨、企画案、台本作成、振り返り) について記し、このようなイベントが子ども、保護者、そして学生に及ぼす効果について考察したものである (全頁数 80 頁)。
10. 「リスクの高い青少年支援における世代間メンタリングの役割：更生保護ボランティアの支援力に着目して」	単著	平成 26 年 3 月	『日本世代間交流学会誌』日本世代間交流学会、Vol.4, No.1, pp.85-94	戦後の日本では、保護司を中心とする民間ボランティアが非行初年の地域社会内における立ち直りを支援している。本論では、少年の更生においても厳罰化・社会防衛が重視される現代社会において、非行少年の更生支援に民間ボランティアが関わることの現代的意味を世代間メンタリングの機能に着目して明らかにした。
11. 「子育て支援における世代間関係のプロセスモデルとその実証的検討」	共著	平成 27 年 3 月	独立行政法人学術振興会、平成 24-26 年度科学研究費補助金基盤研究 (C)	共同研究者として、幼児や小学生・中学生の子育て中の親と地域の子育て支援者の間に信頼関係が形成される要因とそのプロセスを明らかにした。

<p>(口頭発表)</p> <p>1. 「米国における高齢者の社会参加を促進するプログラム」</p> <p>2. 『米国における高齢者の社会参加を促進するサポート・システム—AARP「全米退職者協会」の地域社会サービス活動を通して』</p> <p>3. 「高齢者の社会参加活動を促進するプログラム—米国の世代間交流プログラムを通しての考察」</p> <p>4. 「高齢者の社会参加活動の意義と形態—世代間の相互交流を通しての考察」</p> <p>5. 「世代を結ぶ—共生型社会の構築と世代間交流の可能性」</p> <p>6. 『「学び」の機会としてのセルフ・ヘルプ活動の展開—「グリーン・ケア」プログラムに焦点を当てて』</p> <p>7. 「世代間交流学の創造に向けて—理論と実践の統合」 担当項目「相互学習・相互支援活動—教育・支援役割の固定化から双方向的関係—」</p>	<p>単独</p> <p>単独</p> <p>単独</p> <p>単独</p> <p>共同</p> <p>単独</p> <p>共同</p>	<p>平成 14 年 10 月 5 日</p> <p>平成 15 年 9 月 13 日</p> <p>平成 16 年 6 月 19 日</p> <p>平成 16 年 9 月 18 日</p> <p>平成 17 年 10 月 9 日</p> <p>平成 18 年 9 月 9 日</p> <p>平成 22 年 8 月 7 日</p>	<p>日本社会教育学会 第 49 回研究大会 (北海道大学)</p> <p>日本社会教育学会 第 50 回研究大会 (早稲田大学)</p> <p>日本シニア社会学会 第 3 回研究大会 (早稲田大学)</p> <p>日本社会教育学会 第 51 回研究大会 (同志社大学)</p> <p>日本社会福祉学会 第 53 回研究大会、シンポジスト (東北福祉大学)</p> <p>日本社会教育学会 第 52 回研究大会 (福島大学)</p> <p>日本世代間交流学会 第 1 回研究大会 (芦屋大学)</p>	<p>本発表では、全米最大規模の非営利団体、「全米退職者協会(AARP, American Association of Retired Persons)」の会員が提供している地域住民へのサービスプログラムの検討をとおして、高齢市民が地域住民と相互関係を育むことの意義について検討した。多様なプログラムのなかでも、1970 年代初めに設立された「グリーン&amp;ロス」プログラムに焦点をあてて、大切な人との死別に伴う喪失感を共有している人同士が自立と社会復帰を目標として支援しあう活動の現代的意味と課題について報告した。</p> <p>本発表では、高齢市民が社会活動に自発的に参加していくことをサポートする民間主導のシステムについて検討した。その先進例として、米国において、各種 NPO 団体や専門機関が協働してどのように高齢市民の社会参加をバックアップしているかについて検討した。財政基盤が安定しており、知名度も高い「全米退職者協会」などの NPO 団体が高齢者の社会参加活動を促進していくうえで担っている社会的使命と役割について明らかにした。</p> <p>本発表では、高齢期の人びとの経験や知恵を社会に還元していくタイプの社会参加活動として、「世代間交流プログラム」に焦点をあてた。世代間交流プログラムは、1960 年代以降、米国を発祥の地として、組織的・体系的に展開されている。発表では、連邦政府がプログラムを創設するに至った歴史的推移や社会的背景を明らかにし、わが国で展開されている世代間交流事業との共通点、相違点も加味して考察した。</p> <p>本発表では、子ども・若者と高齢者の相互交流を育む活動の一つとして世代間交流プログラムについて検討した。多様な展開を遂げる世代間交流活動のなかでも、一般の高齢市民が素行面・学業面で問題を抱える子ども・若者の発達支援に関わる「メンタリング」活動に焦点をあて、米国において急速に発展してきた社会的背景、教育事情などについて検討した。結論として、地域社会全体で青少年の発達を支援していくことの現代的意味とその実践例を報告した。</p> <p>本シンポジウムでは、教育、医療・福祉、経済学、社会学などの多領域で研究されている、「世代間交流」が依拠する理論的根拠とその実践的展開について報告した。 シンポジスト：草野篤子・栗山昭子・多湖光旨・間野百子・杉岡さとる。間野百子は、共生型社会を構築していくための公共空間としての機能を有する複合施設の発展性について報告した。1990 年代以降、わが国においても子どもや高齢者の福祉・教育ニーズを充たすために分離して設立された公共施設の統合化が進められている。このような公共施設に集うさまざまな世代の人びとが相互に学習・支援しあえるタイプの交流活動を今後開発していくうえでの課題と可能性について提起した。</p> <p>本発表では、「セルフ・ヘルプ」(共有課題を抱えている人同士の相互学習・相互支援)活動を社会教育の現場に導入していくことの必要性と課題について報告した。多様性を増すセルフ・ヘルプ活動のなかで、「グリーン・ケア」を目的とするセルフ・ヘルプ活動に参加することが、参加者に及ぼす心理的・教育的効果、プログラムを発展的に運営していくうえでピア・リーダーの存在意義、NPO 団体、教育・福祉施設との連携が課題であることなどを明らかにした。</p> <p>本発表では、これまで学際的に論じられてきた世代間交流特有の概念とその社会的意味を明らかにし、学問の一領域として体系的に発展させていくうえでの展望と今後の課題を明らかにした(草野篤子・金田利子・藤原佳典・間野百子)。 担当箇所では、世代間交流学活動特有の機能として、「相互学習・相互支援」活動に着目し、さまざまな世代の人びとが、職業、性別、年齢の差異を超えて、相互に学び、支援しあうことの現代的意味とその理論的根拠を明らかにした。</p>
--	---	---	--	---

8. 「米国における世代間メンタリング活動の展開—困難を抱える子ども・若者の発達支援」	単独	平成 22 年 9 月 25 日	アメリカ教育学会第 22 回研究大会 (芝浦工業大学)	本発表では、1990 年代以降、米国で教育現場に導入されている「世代間メンタリング」の特質と課題について焦点をあてた。世代間メンタリングは、学業不振、情緒不安などの困難を抱えている子ども・若者の支援対策の一環としてプログラム化され、一般市民がボランティアとして支援役割を担っている。わが国でも、地域住民が児童・生徒の支援者として公教育の現場に参加する活動が展開され始めているなか、このような支援活動の展望と今後の課題について検討した。
9. 「世代間交流プログラムの従来型と発展型の検討—祖父母と孫の世代間家族を事例として」	共同	平成 24 年 10 月 6 日	日本世代間交流学会第 3 回全国大会 (名古屋芸術大学)	本発表では、社会・家族変動を受けて、世代間交流プログラムの対象も多様化しながら発展し、その結果、親族間や家庭内の私的な家族関係にも世代間介入が行われるようになったことを明らかにした。具体例として祖父母と孫のみを構成員とする家族が抱える特有の課題や祖父母に対する支援網のネットワーク化について検討した。孫育ても子育てと同様に、公的な課題として位置づけて、その支援対策を講じる必要性が高いことを提起した。
10. 「異世代間の関係を構築する一子育て支援につなげるための理論の検討」	単独	平成 25 年 3 月 17 日	日本発達心理学会第 24 回大会 (明治学院大学)	ラウンドテーブル話題提供者 企画・司会 加藤邦子、話題提供者 (間野百子・藤原佳典・諏澤宏恵・井上清美) 指定老論者 牧野カツコ 本ラウンドテーブルでは、子育てに地域社会のシニア世代が関わっていける関係を構築していく上での働きかけていくうえでの理論的枠組みについて検討した。
11. 「非行少年の更生支援における民間ボランティアの役割—世代間メンタリングの機能に着目して」	単独	平成 25 年 10 月 6 日	日本世代間交流学会第 4 回研究大会 (東京都健康長寿医療センター)	戦後日本の更生保護制度では、非行少年の地域社会内における個別的特処を重視してきた。本発表では、非行少年の立ち直りのプロセスに保護司やBBS(Big Brothers and Sisters) 会員の若者などの民間人が保護観察官と協働で関わることの意味と課題について検討した。
12. 大会企画セッション「ともだち活動の現状と課題について—BBS運動を最も特徴づける活動を考える」	共同	平成 27 年 12 月 6 日	日本更生保護学会第 4 回大会	「非行少年の更生支援における『ともだち活動』の役割—活動経験者に及ぼす互恵的相乗効果に着目して」というテーマのもと、BBS(Big Brothers and Sisters) 会員を対象とした質問紙調査の中間報告を行った。
その他 (表彰等)	年 月 年 月 年 月	特記事項なし		

専任教員教育研究業績

平成28年6月 30日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
宮川 萬寿美	みやかわ ますみ	保育学科	学科長 教授・准教授・助教	男・♀
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
保育課程論 ・ 保育内容総論 I・II 保育原理 ボランティア活動 施設実習			乳幼児研究所 所長	
学 歴				
和暦 (西暦) 年 月	事 項			学位
S52 (1977) 年 3 月	お茶の水女子大学 家政学部 児童学科 卒業			
S54 (1979) 年 3 月	お茶の水女子大学大学 大学院 家政学研究科 児童学専攻修士課程修了			家政学修士
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
市町村の乳幼児健診の発達相談・子育て相談	平成 13 年 5 月～22 年 3 月	箱根町・山北町・松田町・大磯町などの 乳幼児健診・親子教室における子育て相談・子どもの発達相談。		
箱根町保育巡回相談員	平成 14 年 10 月～現在に至る	保育園・幼稚園・幼児学園に巡回相談を行い、保育内容や子どもへのかかわり方、集団活動・環境構成への助言等		
箱根の森小学校心の相談員	平成 20 年 4 月～22 年 3 月	教育相談		
洗足学園短期大学 (非常勤講師)	平成 16 年 4 月～ 21 年 3 月	カウンセリング論・家族援助論		
昭和女子大学 (非常勤講師)	平成 21 年 4 月～22 年 3 月	保育内容総論・乳児保育		
聖セシリア女子短期大学 (非常勤講師)	平成 21 年 4 月～ 22 年 3 月	保育内容「人間関係 I・II」		
蒲田保育専門学校 (非常勤講師)	平成 21 年 4 月～ 21 年 3 月	保育内容・言葉		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)		
日本関係学会	昭和 52 年～	H21 年より運営委員・研修委員 第 30 回 (H21) 31 回 (H22) 大会実行委員 H26・27 大会実行委員 H26.27 大会にて口頭発表		
日本発達心理学会	平成 13 年～	大会等に参加 H22 大会自主シンポジウム話題提供		
日本臨床発達心理士会	平成 14 年～	大会・研修会に参加 H18 第 2 回大会実践研究発表		
日本 LD 学会	平成 16 年～	大会・研修会・資格更新研修会に参加		
日本保育学会	平成 17 年～	H17/18/19/20/21/22/23 研究発表 (口頭およびポスター)		
日本人間関係学会	平成 21 年～	H21/22/23/24 研究発表 (口頭)		
日本心理劇学会	平成 22 年～	H28 年度第 2 2 回全国大会運営委員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
幼稚園園内研究会 講師	平成 13 年～	小田原市公立幼稚園等での園内研究会の講師		
湘南心理研究会 コスモスの会	平成 13 年～	神奈川県西湘地区の子育てや子どもの発達支援にかかわる専門職の勉強会 H16 より世話人会役員		
発達支援研究所 MANA	平成 21 年 9 月 ～	研究員として発達障害を持つお子さんや家族とともに、よりよい生き方・支援に関して研究		
小田原市 子ども・子育て会議委員	平成 24 年 4 月～ 現在 にいたる	委員長		
社会福祉法人鎌倉すこやか会 会保育園みつばち	平成 26 年 9 月～	監査		

担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
小学校教諭 1級普通免許	昭和52年 3月	東京都教育委員会 1513号 (専修免許)		
幼稚園教諭 1級普通免許	昭和52年 3月	東京都教育委員会 625号 (専修免許)		
臨床発達心理士	平成15年 3月	学会連合資格「臨床発達心理士」認定運営機構 第00297号 平成25年2回目の更新		
特別支援教育士	平成20年 3年	特別支援教育士資格認定協会・LD学会 08-057 平成25年更新		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) みんなで支える・わたしが輝く「子育て支援広場」	共著	平成24年3月	小田原女子短期大学保育学科	第3章 たくさん遊んで、ぐんぐん育ての項。2歳・3歳の子どもたちの発達の特性と遊び p25～p32
保育・教職実践演習-保育者に求められる保育実践力-	共著	平成25年2月	建帛社	実践研究事例・幼保と小学校との連携の事例 (P89-P92)
生活事例からはしめる-保育内容総論-	編著者	平成26年3月	青踏社	第4章 子どもの生活と保育 (P47-64) 第5章子どもの発達と保育 (P78-84) 第6章 遊びによる総合的保育の展開 (P85-87) 第7章保育における計画の重要性 (P103-114) 第8章保育の多様な展開 (P115-124)
保育・教育課程総論	共著	平成26年3月	大学図書出版	第14章 幼稚園指導要録・保育所児童保育要録 P147-P156
生活事例からは始める「造形表現」	編著者	平成27年4月	青踏社	Ⅱ 応用編 (P90-112) 第1章 保育内容としての造形表現 第2章 保育現場での制作活動の実際 第3章 制作を主活動とする指導計画
生活事例から始める保育の心理学	編著者	平成27年4月	青踏社	Ⅱ実践編 (P112-126) 第1章 生活や遊びを通じた学び 第2章 子どもの発達と保育実践
生活事例から始める保育原理	編著者	H27年4月	青踏社	子育て支援に関する章を担当
(その他) 1、保育現場の発達支援-集団での「表現遊び」を通じての事例研究-	単著	平成20年6月	日本関係学会第30回大会(口頭発表。関係学研究に掲載)	保育の場での発達支援は、保育者に成立するその子の困った行動に焦点を当てるのではなく、関係状況にあらわれてくる課題と捉え、どのような保育を展開するとよいか表現遊び「ピーターパン」の劇を通じて考察した
2、心理臨牀的な諸問題のある子どもへの支援-幼稚園・保育所における実践から-(査読つき)	連名・発表者	平成20年8月	臨床発達心理士全国大会発表 第4回・論文集	発達に困難を持つ子どもに関して、専門家がどのように役割分担して、連携しているのかを、タイプ別に事例研究した。各機関の資源をおたがいに知ることの重要性が示唆された

3、遊びの発展とともに広がる人間関係を基盤とした個別支援の深まり	単著	平成 21 年 10 月	日本人間関係学会 第 17 回 (文教大学)	友だちとコミュニケーションが取りにくい子どもが保育者との好きな物を媒介とした活動を通じ、友だちとのごっこ遊びに参加し、役割をとって遊びこんだ事例の研究
4、幼保から小への学びの違いを乗り越えるには—読みの力を育てる保育環境の工夫—	単著	平成 23 年 3 月	小田原女子短期大学研究紀要第 4 1 号 (研究ノート)	幼少の接続期に文字への興味や関心を持つ子どもは多いが、今まで「いつの間にか読めていた・書けていた」子とまった興味のない子どもがいるなど、非常に個人差のある子どもの実態がある。読む力の差が、就学後の生活への適応に重要な意味をもつと考えられた。幼稚園や保育所など就学前教育においては学習のレディネスを意識した意図的な環境構成をし、見通しを持って「読む・書く力」を保育計画に入れ込むことで、より豊かな経験につながるのではないかと考えられた。74-81 頁 (総 81 頁)
5、多様な視点を育てる授業の工夫 (3) 行為法の導入	共著	平成 25 年 9 月	保育士養成協議会 研究大会	学習成果の発表の際に、行為法(心理劇法)を取り入れた授業の効果について論じた
6、幼児の人間関係力 (3) —人との関わりの実践知を探る— “誘う” をてがかりに	共著	平成 25 年 11 月	日本人間関係学会 第 21 回大会 (東京理科大学)	幼稚園の生活の中で、幼児の「人と関わる力」に意味がある とらえられたエピソードを「誘う行為」に焦点をあて、手続きを踏みながら仲間関係を広げていく子どもの行動についての考察した (P17-18)
7、地域の祭りをきっかけとした保育内容 —地域文化の継承と創造—	共著	平成 26 年 9 月	保育士養成協議会 研究大会	保育園で行った「獅子舞プロジェクト」の保育展開や地域の祭りを取り入れた保育内容に関して分析し、地域の文化を継承していく保育園の役割に関して考察した。
7、発達臨床における子どもの自己のありように関する基礎的検討 —親面接による質的研究—	単著	平成 27 年 6 月	日本関係学会 第 3 7 回大会 (東京薬科大学 千代田キャンパス) 口頭発表 研究誌に掲載	発達に困難をもつ児・者の自己理解に関する従来の研究は、対象者が言語表現のできる必要があるとあり、言語力に課題を持つ場合は研究対象となりにくい。本研究では親が捉えた子どもの有り様を話してもらおう中で、子どもがどのように自己を捉えていたのかを探っていく方法を試み、自己の有り様理解のカテゴリー化を試みた。
その他 (表彰等)				

## 専任教員教育研究業績

平成 28年6月27日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
吉田 収	よしだ おさむ	保育学科	学科長 教授・准教授・助教	Ⓐ・女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
造形表現Ⅰ、造形表現Ⅱ、保育実習指導(1, 2年)、表現総合演習(造形コース)、卒業研究(ゼミナール)			FD運営委員会	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
S60(1985)年3月	武蔵野美術大学 造形学部油絵学科卒業			芸術学士
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
武蔵野美術大学 助手	S62年4月～H4年3月	共通絵画研究室基礎絵画実技指導及び指導補佐		
武蔵野美術大学 講師	H4年4月～H16年3月	共通絵画研究室基礎絵画実技指導		
和泉福祉専門学校 講師	H7年4月～H10年3月	一般教養美術講義及び美術全般実技指導		
和泉短期大学 講師	H9年4月～H11年3月 H26年4月～H28年3月	幼児教育学科、児童福祉学科図画工作講義及び実技指導		
横浜国際福祉専門学校講師	H10年4月～H17年3月	児童福祉学科図画工作、造形表現Ⅰ,Ⅱ講義及び実技指導		
近畿大学豊岡短期大学講師	H10年4月～H17年3月	通信教育学部こども学科図画工作面接授業		
小田原短期大学	H16年4月～	保育学科(～H19.3専任講師～H22.3助教,H22.4～准教授)		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
保育学会	H22年8月～H28年3月	H28年3月脱会		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
小田原市シルバー大学	H22年6月～H22年7月	伝承玩具制作実技指導		
箱根町立宮城野保育園	H22年6月～H23年3月	宮城野保育園内園内研究造形アドバイザー		
小田原私立幼稚園協会研究部会	H28年5月～	小田原私立幼稚園協会研究部会講師		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
中学校教諭1種免許(美術)	H4年1月	東京都教育委員会		
高等学校教諭1種免許(美術)	H4年1月	東京都教育委員会		
研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発行年	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 紙の民族性	共著	平成13年7月	武蔵野美術大学短期大学部美術科研究室	日本、韓国、欧州の手漉き紙の産地を取材し、それぞれの民族の紙に表れる民族性を検証する。
2. 保育入門テキスト	共著	平成27年3月13日	萌文書林	高校生のための保育者を理解するためのテキスト。担当は2章の造形遊び。絵の具を使っての造形遊びを中心に造形の意義を解説。
3. 生活事例から始める造形表現	共著	平成27年4月1日	青踏社	保育を学ぶ人のための造形表現のテキスト。生活事例から造形表現を学んでいく内容で、担当は第一章の基礎編を担当し、造形実践の内容を分かり易く解説。

<p>(学術論文) 「保育者養成における表現の教育についての一考察～「五感を使った表現」の授業の試み～」</p>	<p>共著 (本学准教授有村さやかと共著)</p>	<p>2011年</p>	<p>本学研究紀要・H23 保育学会ポスター発表</p>	<p>表現総合演習」の中で行った「五感を表現する」から、聴覚、触覚を取り上げ、学生の表現に対する気付きをアンケート調査から抽出し、音楽的な見地と造形的な見地から表現の本質を考察する。(共同執筆者：有村さやか)</p>
<p>(その他) 展覧会発表 1. 個展 2. six directions 3. PARKING調-2001 4. 個展 5. 公共彫刻 6. テレビ用オブジェ 7. 個展 8. Art Jam'Gift' 9. テレビ用オブジェ 10. 野外彫刻 11. 個展 12. 丹沢アートフェスティバル 13. 「森展」2011 14. 「和み」展 15. 「蔦谷」展 16. 個展 17. 個展</p>	<p>単独 共催 共催 単独 単独 共催 単独 共催 単独 単独 共催 共催 共催 単独 単独</p>	<p>H13年2月 H13年4月 H13年6月 H14年1月 H14年3月 H16年4月 H16年9月 H17年2月 H17年9月 H19年7月 H21年8月 H22年5月  H23年3月 H23年9月 H24年4月 H26年3月 H27年3月</p>	<p>トキ・アートスペース アート・フォーラム プラザギャラリー トキ・アートスペース クロスフォート玉川上水 日本テレビ ギャラリー山口 ギャラリー山口 日本テレビ 小田原女子短期大学 トキ・アートスペース 田中現代美術研究所 八ヶ岳倶楽部 Gallery hippo 書店「蔦谷 代官山」 ギャラリーなつか トキ・アートスペース</p>	<p>無垢の木から彫りだした作品12点の展示発表 6名の作家によるグループ展。木を積層によって表現した作品を展示画廊並びに周辺の屋外の4名によるグループ展 木を積層によって表現した作品の展示 木を積層によって表現した作品を設置 番組「おしゃれイズム」にて舞台セットとしての作品が展示 木を積層によって表現した作品の展示 無垢の木から彫りだした小品2点の展示 特番「衆議院選挙速報」にて舞台セットで作品展示 元型を木で制作し、ブロンズ鑄造した作品を設置 木を積層によって表現した作品の展示 古民家にて木を積層によって表現した作品の展示  八ヶ岳「八ヶ岳倶楽部」にて屋内外における展示 小品のグループ展 書店内での小品の展示 卓上や棚に小作品12点を展示 卓上や棚に小、中作品9点を展示</p>
<p>その他 (表彰等) なし</p>				

専任教員教育研究業績

平成28年 5月25日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
有村 さやか	ありむら さやか	保育学科	学科長 教授(准教授) 助教	男・(女)

担当科目名	学内委員会等(委員長)
音楽表現Ⅱ, 音楽表現Ⅲ, 総合文化, おだたん人間成長講座	

学 歴		
和暦(西暦)年 月	事 項	学位
H13(2001)年3月	東京学芸大学教育学部中学校教員養成課程音楽専攻卒業	学士(教育)
H16(2004)年3月	東京学芸大学大学院教育学研究科修士課程音楽教育専攻修了	修士(教育学)
H11(1999)年8月	ハンガリー国立リスト音楽院夏期セミナーピアノ演奏コース修了	

教 育 歴 ・ 職 歴		
名 称	期 間	教育内容又は業務内容
貞静学園保育福祉専門学校 保育学科	H16年4月～H18年3月	専任教諭として勤務。「音楽Ⅰ」「音楽Ⅱ」「総合演習」
小田原女子短期大学 保育学科	H18年4月～現在	H18～H22 助教, H23 より准教授として勤務。「音楽表現Ⅱ」「音楽表現Ⅲ」「総合文化」「おだたん人間成長講座」を担当。 (「表現総合演習」「教育実務演習」「保育所実習Ⅰ」「保育所実習Ⅱ」「教育実習」「音楽表現Ⅰ」「卒業研究(ゼミナール)」)

所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
九州・沖縄作曲家協会	H18年3月～現在	会員, (H25年度九州外地区理事)
日本音楽教育学会	H18年5月～現在	会員
日本保育学会	H18年5月～現在	会員
幼児音楽研究会	H18年5月～現在	会員
日本オルフ音楽教育研究会	H18年5月～現在	会員, 運営委員

社 会 活 動 等		
名 称	活動期間	活 動 内 容
茅ヶ崎子ども園音楽表現及び親子音楽あそび講師	H19年6月～H22年3月	音楽表現及び親子音楽あそび講師(神奈川県子育て支援事業)
子育て支援講座講師	H20年8月	神奈川県大井町子育て支援センター主催講座講師
さくらチャイルドセンター 音楽表現講師	H21年5月～現在	音楽表現及び親子音楽あそび講師(神奈川県子育て支援事業)
松林保育園親子音楽あそび 講師	H21年3月～現在	わくわくランド親子音楽あそび講師(神奈川県子育て支援事業)
小田原私立幼稚園協会主催 教職員技術研修会講師	H24年8月	小田原私立幼稚園協会主催講座教職員技術研修会講師として「音を楽しもう!～歌・リズム・音楽表現を通して」を講演(於:南足柄文化会館小ホール)
箱根町幼児教育研究会技術 研修講師	H25年6月	箱根町幼児教育研究会技術研修講師として「幼児の音楽表現と楽器あそび」を講演
神奈川県カトリック保育連 盟研修会講師	H26年7月	神奈川県カトリック保育連盟研修会講師として「幼児の音楽表現(楽器あそび)」を講演
神奈川県私立幼稚園新規採 用教員研修会講師	H27年8月	神奈川県私立幼稚園連合会講師として神奈川県内の私立幼稚園の新任教諭(参加者50名)に「幼児の音楽表現(楽器遊び)」のテーマで実技研修を実施(於:小田原短期大学リトミック室)
日本オルフ音楽教育研究会 音楽教育夏期セミナー講師	H27年8月	第28回カール・オルフの音楽教育夏期セミナー～身体で感じるリズム・身体で表すリズム～(於:東京家政大学)において、分科会ワークショップ「おと かたち いろ」を講演

夏の保育講座	H27年8月	保育者志望の高校生及び保育に興味のある一般の方々に対象に、「音で遊べば 心もはずむ」を講演。(於:小田原短期大学)		
白峰学園保育センター特別セミナー(うたって遊ぼう)講師	H27年8月	神奈川県内の現任保育士、児童福祉員、介護福祉士等を対象とした特別セミナー「子どもとつながる歌あそびリズム遊び」を講演(於:白峰学園保育センター)		
担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
中学校教諭専修免許(音楽)	H16年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭専修免許状(音楽)	H16年3月	東京都教育委員会		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1.最新保育講座保育内容「表現」 2.「保育入門テキスト」	共著 共著	H22年3月 H27年3月	ミネルヴァ書房 萌文書林	第11章 第2節身体性と子どもの表現 第3節保育者養成と子どもの表現 執筆  Chapter4「音楽あそび」執筆
3.「小田原短期大学保育学科通信教育課程テキスト科目・音楽表現Ⅱ(学習の手引き)2015年度版」	共著	H27年4月 (H25年4月初版)	小田原短期大学 保育学科通信教育課程	通信教育課程テキスト科目音楽表現Ⅱの学習の手引きとして執筆。コード理論、オルフの音楽教育、創造的音楽学習について執筆
4.「オルフ・シュールヴェルクの研究と実践」	共著	H27年8月	朝日出版	日本オルフ音楽教育研究会がオルフの音と動きの教育に関する研究誌として制作。幼児教育から教員養成、障がい児者・社会教育を対象としている。 第3部 14-4 資料編日本におけるカール・オルフ関係の資料リスト(楽譜及び音源) (pp.156-167) 執筆
(学術論文) 1.「Distance-ヴァイオリン・コントラバス・ピアノのための」 2.「現代における音楽の多様化と音楽教育の研究」 3.「実習現場における音楽表現活動の現状についての一考察」 4.「乳幼児期における適切な音環境や音楽についての一考察」 5.「保育者養成における音楽技能の教育についての一考察」 6.「保育者養成における音楽技能の教育についての一考察Ⅱ」	単著 単著 共著 共著 共著 共著	H 16年3月 H 16年3月 H18年3月 H19年3月 H21年3月 H22年3月	東京学芸大学 東京学芸大学 小田原女子短期大学 小田原女子短期大学 小田原女子短期大学 小田原女子短期大学	修士主論文として修了演奏会にて新作初演。(於:東京学芸大学芸術館ホール 演奏:ピナコテーク・トリオ)  修士副論文として現代の音環境と現代音楽の教材化について研究した。  共同研究(共同研究者:今泉明美・有村さやか)小田原女子短期大学研究紀要第37号(pp.117~131)にて論文発表。  共同研究(共同研究者:今泉明美・有村さやか)小田原女子短期大学研究紀要第38号(pp.75~86)にて論文発表。  共同研究(共同研究者:有村さやか・今泉明美)小田原女子短期大学研究紀要第39号(pp.75~86)にて論文発表。  共同研究(共同研究者:今泉明美・有村さやか)小田原女子短期大学研究紀要第40号にて論文発表。

7. 「子育て支援における音楽表現遊びの実践についての一考察～地域子育て支援の現状と課題の分析～」	共著	H24年3月	小田原女子短期大学	共同研究（共同研究者：今泉明美、有村さやか、小川晃、小澤祐子） 「小田原女子短期大学研究紀要」第42号（p.8～p.20）にて論文発表。
8. 「保育者養成における音楽表現の教育についての一考察～音楽的な表現活動の実践における課題～」	共著	平成25年3月	小田原女子短期大学	共同研究（共同研究者：有村さやか・今泉明美） 小田原女子短期大学研究紀要」第43号 p.30～p.41にて論文発表。
(その他) 1. 「実習現場における音楽表現活動についての一考察」	口頭発表	H18年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：有村さやか・今泉明美） 日本保育学会第60回大会（於：十文字学園女子大学）にて口頭発表。要旨集 pp.192-193 掲載。
2. 「保育者養成における実践力を高める音楽技能の教育への取り組み」	ポスター発表	H21年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：今泉明美・有村さやか） 日本保育学会第62回大会（於：千葉大学）にてポスター発表。要旨集 p.356 に掲載。
3. 「保育者養成における実践力を高める音楽技能の教育への取り組みⅡ」	ポスター発表	H22年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：有村さやか・今泉明美） 日本保育学会第63回大会（於：松山東雲大学）にてポスター発表。要旨集 p.584 掲載。
4. 「保育者養成における表現の教育についての一考察」	ポスター発表	H23年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：有村さやか・吉田収） 日本保育学会第64回大会（於：玉川大学）にてポスター発表。要旨集 p.298 掲載。
5. 「保育者養成における実践力を高める音楽技能の教育への取り組みⅢ」	ポスター発表	H23年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：今泉明美・有村さやか） 日本保育学会第64回大会（於：玉川大学）にてポスター発表。要旨集 p.846 掲載。
6. 「子育て支援活動の音楽表現遊びから読み取れる望まれる保育者像」	ポスター発表	H25年5月	日本保育学会	共同研究（共同研究者：今泉明美、有村さやか、小川晃、小澤祐子） 日本保育学会第65回大会（於：中村学園大学）にてポスター発表。要旨集 p.503 掲載。
(作品発表) 1. 「Scenes for two Pianos」	作品発表 単独	H13年11月	南日本新聞社	新作初演。第50回南日本音楽コンクール作曲部門優秀賞（2位）受賞。
2. 「Nostalgia for Recorder solo」	作品発表 単独	H14年11月	南日本新聞社	新作初演。第51回南日本音楽コンクール作曲部門優秀賞（1位）受賞。
3. 「Window—アルトリコーダー・ピアノのための—」	作品発表 単独	H15年11月	南日本新聞社	新作初演。第52回南日本音楽コンクール作曲部門入選（3位）。
4. 「Distance—ヴァイオリン・チェロ・ピアノのための—」	作品発表 単独	H17年9月	東アジア作曲家協会	東アジア現代音楽祭 “Young Composer” s Concert”（於：大邱芸術文化会館（韓国））にて新作初演。

5. 「Infiltration for Violin solo」	作品発表 単独	H18 年3月	九州・沖縄作曲家 協会	「スプリングコンサート」にて新作初演。現代芸術社「音楽現代 2007年6月号」にて作品批評掲載。
6. 「Expression for Flute solo」	作品発表 単独	H19 年3月	九州・沖縄作曲家 協会	「スプリングコンサート—現代九州・音の創造空間—(於:福岡市あいれふホール)にて新作初演。
7. 「風樹—コントラバスのための」	作品発表 単独	H20 年10 月	九州・沖縄作曲家 協会	九州・沖縄現代音楽祭(於:琉球大学50周年記念会館)にて新作初演。
8. 「Expression for Flute solo」	作品発表 単独	H21 年10 月	東アジア作曲家 協会	東アジア現代音楽祭「室内楽の夕べ」(於:啓明大学(韓国))にて改訂初演。
9. 「Expression for Flute solo」	作品発表 単独	H22 年10 月	東アジア作曲家 協会	東アジア現代音楽祭(於:啓明大学(韓国))にて再演。
10. 「The shadow of air - for Guiter and Contrabass」	作品発表 単独	H 23 年 11月	嶺南作曲家協会	第14回嶺南国際現代音楽祭招待作品(於: Daedu Suseong Artpia Muhak Hall 韓国テグ 演奏: Junge Musik Berlin) 新作初演
その他 (表彰等)		H13年11月 H14年11月		第50回南日本音楽コンクール作曲部門優秀賞(2位)受賞。 第51回南日本音楽コンクール作曲部門優秀賞(1位)受賞。

## 専任教員教育研究業績

平成28年6月28日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
宇佐美 かおる	うさみ かおる	保育学科	准教授	女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等	
健康指導法、健康・スポーツ理論、健康・スポーツ実技、教育実習指導、卒業論文ゼミ			安全衛生委員	
学 歴				
和暦（西暦）年 月	事 項		学位	
S59年3月	東京学芸大学 教育学部初等教育教員養成課程卒業		教育学士	
S61年3月	東京学芸大学大学院教育学研究科 修士課程修了		教育学修士	
H18年12月	玉川大学文学部教育学科通信教育課程（科目等履修生）受講修了			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
尚美学園短期大学	S61年4月～H8年3月	助手（S61年4月～S62年3月）、専任講師（S62年4月～H8年3月） 「体育実技」「体育講義」		
津田塾大学	S61年4月～H20年3月	非常勤講師 「動きの教育」「スポーツと身体スキル（硬式テニス）」「コンディショニング」		
共立女子体育大学	H3年4月～4年3月	非常勤講師 「体育実技（卓球）」		
日本女子大学	H10年4月～24年3月	非常勤講師 「身体運動Ⅰ（テニス）」（H20年4月～21年3月を除く）		
駒沢女子短期大学	H12年4月～24年3月	非常勤講師 「体育実技（バレーボール、バドミントン、バスケットボール、ミニスポーツ）」「体育講義」		
お茶の水女子大学	H14年4月～24年3月	非常勤講師 「スポーツ健康実習（フィットネストレーニング、硬式テニス）」（H20年4月～21年3月を除く）		
和泉短期大学	H18年4月～20年3月	非常勤講師 「子どもと健康」		
明治薬科大学	H20年4月～22年3月	非常勤講師 「体育実技（卓球、バドミントン）」		
豊島区役所	H20年9月～24年3月	豊島区生涯学習指導員		
駒沢女子大学	H21年4月～24年3月	非常勤講師 「スポーツⅠバドミントン、バスケットボール、バレーボール、ミニスポーツ」		
立教大学	H21年4月～24年3月	非常勤講師「スポーツスタディ（テニス、卓球）」		
立教大学院短期大学	H21年4月～現在まで	非常勤講師「体育（テニス、バスケットボール）」		
お茶の水女子大学附属高等学校	H21年4月～24年3月	非常勤講師「体育（テニス、バスケットボール）」		
小田原女子短期大学	H24年3月～現在まで	准教授 健康指導法 身体表現Ⅰ・Ⅱ 卒業論文ゼミ 教育実習指導		
洗足こども短期大学	H27年4月～現在まで	非常勤講師「保育内容 健康」		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）		
日本体育学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
東京体育学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
日本バイオメカニクス学会	S59年4月～現在に至る	大会参加・発表		
日本体力医学会	S59年6月～現在に至る	大会参加・発表		
日本保育学会	H19年5月～現在に至る	大会参加・発表		
日本発育発達学会	H25年1月～現在に至る	大会参加・発表		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
豊島区生涯学習指導員	H20年9月～24年3月	豊島区生涯学習指導員として豊島区文化商工部学習・スポーツ課スポーツ振興グループに所属し、豊島区におけるスポーツ推進活動に関わった。		

担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
小学校教諭一級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
中学校教諭一級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
高等学校教諭二級普通免許	S59年3月	東京学芸大学		
高等学校教諭一級普通免許	S61年3月	東京学芸大学大学院		
幼稚園教諭2種免許	H18年12月	玉川大学通教育課程		
保育士資格	H27年2月	東京都資格試験		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1.大学生のための保健体育教本の保健体育教本	共著	H1年3月	道和書院	大学生の保健体育理論の学習に供することを目的に、保健体育に関する基礎的、一般的内容を含みかつ幼児教育的な情報も加味してまとめたものである。 A5版 全126頁 編者：宇佐美茂 共著者：宇佐美茂、鈴木武文、幾島正、山城屋正満、宇佐美かおる 本人担当部分：「IV幼児の遊びと体育」(pp.35~47)の図表掲載に関して検討を加えた。
2.体育実技	共著	H3年3月	犀書房	大学教育における健康教育として組み込まれているスポーツに関する歴史やルール、実施の方法などについて解説したものである。 A5版 全250頁 編者：宇佐美茂 共著者：宇佐美茂、幾島正、山城屋正満、宇佐美かおる 本人担当部分：「硬式テニス」(pp.34-45)「バドミントン」(pp.56~68)について、歴史、特徴、用具、ゲームの進め方、ルールについて解説したものである。
3.スポーツを知る・する・考える	共著	H7年3月	不昧堂出版	スポーツを知りたい、スポーツをやってみたい、スポーツとは何なのかを知識として理解しようとする人を対象に、さまざまな角度からスポーツに対するアプローチができるような内容を盛り込み、理論と実践の両面にわたって役立つような幅広い内容となっている。 A5版 全175頁 編者：スポーツ実践研究会 共著者：森敏生、岡本悌二、長谷川裕、吉田清司、綿引和美、須田和也、財部重孝、佐藤雅幸、高橋伸次、宇佐美かおる、本間正行、時本久美子、柳井義裕、重村博美、宇佐美隆憲、時本識資、高田正義 本人担当部分：第3章「トレーニングの組み立て」2節「トレーニングの種類と方法」3「コンディション・コーディネーションのトレーニング」(pp.102~109)の概念およびそのトレーニングの種類・内容について解説したものである。
4.楽しく遊んで体づくり！幼児の運動遊び「幼児期運動指針」に沿	共著	H27年1月	チャイルド本社	文部科学省の定めた「幼児期運動指針」に沿った形で、運動遊びについて提案したもの。特に、既存の運動遊びを多様化させるためのアレンジの視点や変化の工夫などについて実践例を掲載。

<p>つて</p> <p>5. 保育の心理学</p>	<p>共著</p>	<p>H27年4月</p>	<p>青踏社</p>	<p>共著者：吉田伊津美、宇佐美かおる、内田裕子、塩野谷祐子、鈴木康弘、町山太郎          本人担当部分：アレンジの協議、検討、アレンジ提案及び作成（かけっこ、どんじゃんけんぼん、縄とびこし、しっぽとり、おいもごろごろ、リズムダンス、先生を引っ繰り返せ）</p> <p>保育者、施設職員等を目指す学生を対象とした子ども理解を進めるための保育の心理学としての提案書。          I 基礎編では発育発達について、II 実践編では、心理・発達の観点からまとめたものである。</p> <p>共著者：宮川萬寿美、神蔵幸子、宇佐美かおる、金澤久美子、片山伸子、小倉直子          本人担当部分：基礎編第3章第1節</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 児童の筋出力特性について</p> <p>2. Squat Jumpにおける膝角度と下肢筋力特性の関係について</p> <p>3. 児童の背筋力と握力の異同に関する研究</p> <p>4. アイソメトリック収縮時における能動的と受動的筋出力特性の差異について          (修士論文)</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>S59年10月</p> <p>S60年10月</p> <p>S60年12月</p> <p>S61年3月</p>	<p>体力科学 Vol.33-5 pp.251-252</p> <p>東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育 第37集 pp.223-229</p> <p>体力科学 Vol.34 Suppl. pp.79-87</p> <p>東京学芸大学修士論文</p>	<p>動的、静的筋力の測定により児童の筋出力特性を検討した。対象は小学生児童1～6年生で反復握力、背筋力と脚筋力、能動筋力と受動筋力、垂直とび、上体そらしの5項目について測定した。</p> <p>各測定項目について男女差はほとんどみられなかった。筋力発揮の持久性をみた反復握力に関しては、各学年とも70～80%の維持率を示した。また、受動的に発揮させられる筋力に関して、受動握力が能動握力の170～205%の比率を示し、低学年ほど大きな値を示し、女子が男子より高い値を示す傾向がみられた。負荷をかけた上体そらしでは男子の測定値が女子より有意に高かった。これらのことから、筋力の発達差、男女差等を考慮し、指導にあたる必要性のあることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明、宮崎義憲</p> <p>大学生男子バレーボール部員を対象に種々の膝屈曲角度における Squat Jump を行わせ、その際の地面反力記録と膝角度変位記録の分析から膝関節屈曲角度とか下肢筋群の筋出力特性との関係について検討した。</p> <p>その結果膝角度の増大に伴う筋出力特性の変化として、踏み切り時間の延長、最大踏み切り力の減少および踏み切りの力積の不変傾向が示された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>小学生児童を対象とし握力や背筋力を中心としたいくつもの筋力測定を同一個人に実施し、その測定結果を握力と背筋力の異同という観点から検討した。</p> <p>その結果、背筋力と能動握力あるいは受動握力には有意な相関を認めたが、その相関関数は能動握力より受動握力のほうが低いことが示された。</p> <p>本人担当部分：測定、データ集計および分析          共著者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>大学生男子を対象にアイソメトリック収縮時における能動および受動上腕屈曲力を測定し、その筋出力特性の差異について筋電図学的に分析した。</p> <p>その結果、筋力発揮に際して能動と受動では運動単位の参加頻度数が異なることにより差異が生ずることが考えられた。</p>

5. 垂直とびにおける巧みさと下肢筋力の発達について	共著	S61年10月	第8回日本バイオメカニクス学会大会論集 Pp.21-24	5歳から20歳までの男女を対象として、垂直とびの跳躍動作における巧みさと下肢筋力の発達について検討した結果、垂直とびにおいて腕の振り込みや膝の反動動作などを跳躍に有効に作用させる巧みさは、5～6歳と14～15歳、垂直とびの踏み切りにおける下肢伸展筋群の筋力集中発揮能力は、12～13歳頃にそれぞれ著しい発達が示された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
6. 幼児のSquat Jumpにおける下肢筋出力特性について	共著	S62年2月	財団法人 体育科学センター「体育科学」第14巻	幼児と大学生を対象とし異なる膝角度からの Squat Jump を行わせ、その際の鉛直方向地面反力と膝の角度変位記録から、大学生と幼児との差異を比較することにより幼児の Squat Jump における下肢筋力発揮特性について検討した。その結果、幼児では跳躍前において下肢伸展筋群が強く予備緊張された場合には、むしろその筋力発揮能力は低下することが示された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
7. 硬式テニスの各種ストロークの呼吸相について	共著	S62年10月	東京学芸大学紀要 第5部門 芸術・体育 第39集 pp.231-238	大学硬式テニス部員を対象に硬式テニスにおける各種ストロークを行わせ、その際のインパクト時点と呼吸相との関係について検討した。 その結果、フォアハンドストローク、サービス、およびスマッシュでは、吸気相から呼気相への転換相あるいは呼気相においてインパクト時点がみられ、バックハンドストローク、フォアハンドおよびバックハンドボレーでは一定の傾向は見られなかった。 本人担当部分：測定、データ集計および分析 共著者：宮崎義憲、宇佐美かおる、岡部洋、井上直子
8. 受動筋力におけるトレーニング効果に関する一考察	単著	S63年6月	尚美学園短期大学研究紀要 第2号 pp.89-113	大学生男子を対象に一般的なトレーニングが受動筋力に及ぼす影響について上腕屈曲力を測定することにより検討した。 その結果アイソメトリック収縮での能動的な筋力による上腕屈曲トレーニングでは、能動および受動上腕屈曲力ともにトレーニング開始時よりも約20%の増加が認められた。
9. 本学学生の健康度指標化の試み	単著	H6年3月	尚美学園短期大学研究紀要 第8号 pp.117-139	本学女子学生の健康に対する意識を健康、食、生活習慣、運動習慣の観点から調査し、本学学生の健康度指標化への基礎資料を得ようとしたものである。健康については約9割の学生が平均3.1件の不定愁訴を訴えている。食については偏食傾向が目立ち、実際の食行動も栄養面の軽視などがみられた。生活パターンは夜型が多く、運動については実践よりも観賞する傾向が強くと見られた。
10. 専攻別にみた女子大生の健康に関する意識と行動について	共著	H7年4月	体力研究 第89号 pp.32-39	首都圏に位置する大学・短大の1・2年生女子を対象に健康に関する調査を行い、身体、生活、食、運動の側面から健康意識と行動について専攻別に検討した。 その結果、健康に対する自己評価は専攻による違いは認められなかった。健康に対する知識、生活習慣、食に関しては、専攻による違いが認められた。このことから、健康や食に関する指導には専攻意識を絡めた指導内容の検討が必要であることが示唆された。 本人担当部分：測定、データ集計および分析

11. プロトコル分析からみた投動作と打動作の類似性	共著	H17年3月	津田塾大学紀要 No. 37. pp.43-56	<p>共著者：井上直子、宇佐美かおる、湊久美子、西島洋子、坂木佳寿美</p> <p>成人女性の投能力の基礎資料を得るために、投動作と打動作の画像分析と観察的評価に加えプロトコルを採取し、両動作の類似性を検討した。</p> <p>その結果、両動作の基本フォームは同じであるが、道具を用いることによって意図的にフォームを変化させていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：投、打動作の画像分析および観察的評価を担当 共著者：井上則子、宇佐美かおる</p>
12. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について	共著	H19年3月	駒沢女子短期大学紀要 40号 pp.33-39	<p>駒沢女子短期大学保育学科1年次生を対象として、運動や栄養に関する意識の実態を把握し、今後の指導の一助とするための基礎資料を得ること、また、保育者を志す学生の実態を把握することを目的として、運動、健康意識、食習慣、サプリメントの利用の観点から意識調査をおこなった。その結果、運動定期的に実施する習慣を持つ学生は多くは見られず、サプリメントに利用についてもその効果を強く感じている者は多くはなかった。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施および集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
13. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について (第2報)	共著	H20年3月	駒沢女子短期大学紀要 41号 pp.21-34	<p>駒沢女子短期大学保育学科1年次生を対象として、運動や栄養に関する意識の実態を把握し、今後の指導の一助とするための基礎資料を得ること、また、保育者を志す学生の実態を把握することを目的として、運動、健康意識、食習慣、サプリメントの利用の観点から意識調査をおこなった。その結果、運動定期的に実施する習慣を持つ学生は多くは見られず、サプリメントに利用についてもその効果を強く感じている者は多くはなかった。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施および集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
14. 駒沢女子短期大学生の運動、健康、食習慣およびサプリメントに関する意識について (第3報)	共著	H21年3月	駒沢女子短期大学紀要 42号 pp.21-28	<p>本調査では、これまでの筆者らの調査に体力測定を加え、基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、運動習慣のない学生が多く、健康に関心はあるが、自信のある学生は多くなかった。また、運動習慣のあることが基礎体力の維持につながっていることが示唆された。サプリメントを知っている学生は全体の半数を超えるが、利用している学生は多くなかった。</p> <p>第1・2報および今回の調査および測定において、学生の実態が見えてきてはいる、これらの現状をふまえ学生に日常の運動習慣やバランスのとれた食生活をこころがけることの意識を定着させることが今後の課題である。限られた時間のなかで、生涯学習として学生が生活習慣や運動を理解できるよう指導にあたっていきたい。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
15. 駒沢女子短期	共著	H22年3月	駒沢女子短期大学紀	<p>本調査では、駒沢女子短期大学保育科学の保育者を</p>

<p>大学保育科学生の健康と体力の関係について</p>			<p>要 45 号 pp.49-52</p>	<p>志す学生の健康と体力に関する意識調査および体力を測定することで学生指導の基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、健康や体力に関する自信の無さが明らかになった。また、生活習慣の不規則な学生が多く見られた。しかし、体力値からみると基礎的な体力の大きな落ち込みは見られなかった。これは、週 1 回でも体育実技の授業が定期的な運動習慣としての意味を持つであろうことが推測された。しかし、生活習慣の不規則な点を考えると指導の内容として、生活習慣の適正化や運動習慣の定着化を含める必要のあることが示唆された。 本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、三辻浩子、木下茂昭</p>
<p>16. 小田原女子短期大学学生の体力と生活習慣の関係について</p>	<p>共著</p>	<p>H26 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要第 44 号 pp.60-63</p>	<p>本調査では、小田原女子短期大学学生の生活習慣に関する意識調査および体力を測定することで学生指導の基礎資料の充実を図ることを目的とした。その結果、健康や体力に関する自信はある程度持っていることが分かった。しかし、体力値は全体的に低く、自覚と実態にずれがあることが気になる点としてあげられる。また、ほとんどの学生が運動をする習慣がなかった。これらのことから、今後、健康、体力に関する正しい理解を促すと同時に、学生が運動しやすい環境を設定し、運動機会の提供を含める必要のあることが示唆された。 本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、木戸直美、白澤貴子</p>
<p>17. 地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援(1)～小田原モデルの研究と試行～</p>	<p>共著</p>	<p>H27 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 pp.50-63</p>	<p>こんにちは赤ちゃん事業が開始されているが、全戸支援にまでは至っておらず、支援の行き届いていない家庭も全体の約 8 割あると考えられている。本研究では、自治体と連携した全戸支援を目指すために、ひろばの活用・運営などを検討し、子育て家庭の地域とのつなぐための方策を検討したものである。 共著者：吉田眞理、今泉明美、稲葉佳代子、内山麻子、宮川萬寿美、宇佐美かおる、菊地篤子、野津直樹、金澤久美子</p>
<p>18. 子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究(1)～箱根町よさこいソーラン踊りを通して～</p>	<p>共著</p>	<p>H27 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 pp.78-80</p>	<p>最近の子どもの特徴として体力低下が指摘され様々な取り組みも行われている。本研究では、保育活動の中によさこいソーラン踊りを導入している箱根町保育所をモデルとして、子どもの発達とも関連を見ることを目的とした。今回の調査では、地域との連携の中、子どもたちの変化の様子を観察するための環境についてまとめたものである。 共著者：宮川萬寿美、宇佐美かおる、東元りか 本人担当部分：Ⅱ、Ⅲ-3・4</p>
<p>19. 子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究</p>	<p>共著</p>	<p>H28 年 3 月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第 46 号 pp.109-115</p>	<p>筆者らの前回の調査では、地域との連携の中、子どもたちの変化の様子を観察するための環境についてま</p>

<p>(2) ~箱根町よさこいソーラン踊りを通して~</p> <p>6. 過去3年間の小田原短期大学学生の体力と生活習慣の現状報告</p>	<p>共著</p>	<p>H28年3月</p>	<p>小田原短期大学研究紀要第46号 pp.82-87</p>	<p>とめた。本著では、前回の指導状況、指導環境をふまえ、地域指導者、保育者からの聞き取り調査を実施した。その結果、指導者と園、指導者と保育者相互の連携により、地域の文化に触れながら、子どもたちの発育発達を促すことにつながっていることが示唆された。</p> <p>共著者：宇佐美かおる、東元りか、宮川萬寿美 本人担当部分：Ⅱ、Ⅲ-1・2・3(1)①~⑤・(2)・Ⅳ</p> <p>本調査では、過去3年間の小田原短期大学学生の体力と生活習慣に関する調査をまとめ傾向把握を試みた。その結果、各年度の特徴は、ほぼ同傾向を示した。この傾向を、小田原短期大学に所属する学生の特徴として受け止め、今後は、この特徴を伸長あるいは改善するプログラムを検討すること、また環境を整える必要性等が示唆された。</p> <p>本人担当部分：アンケート実施及び集計・分析、体力測定および測定値集計、論文執筆を担当 共著者：宇佐美かおる、木戸直美、白澤貴子</p>
<p>(その他) ・口頭発表 1. 児童の跳躍動作における協応能の発達について</p> <p>2. 背筋力の出力制限因子に関する分析的検討</p> <p>3. 能動握力と受動握力の発達</p>	<p>共同</p> <p>共同</p> <p>共同</p>	<p>S59年9月</p> <p>S59年10月</p> <p>S60年9月</p>	<p>第39回日本体力医学会</p> <p>第35回日本体育学会</p> <p>第40回日本体力医学会</p>	<p>小学生1~6年生までの児童を対象とし、いくつかの条件による垂直とびを行わせ、その際の地面反力記録を分析することにより児童の跳躍動作における協応能と筋出力の発達について検討した。</p> <p>その結果、児童期における跳躍動作の協応能や筋出力は、加齢とともに徐々に発達し、特に男子では中学年ごろから腕の共応能の発達が著しくなることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>大学生男子を対象に上体前傾角度を変化させて背筋力を測定するとともに、背筋力発揮中の姿を写真分析により検討し、背筋力の出力制限因子を明らかにしようとした。</p> <p>その結果より、一般の背筋力測定では上体の前傾角度が小さく、上部背筋群が主働筋として作用するため高い値となり、文部省実施要領に正しく準拠した測定では、主働筋が下部背筋群となるため筋出力が制限され低い値を示したことが考えられる。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、朽木勤、宇佐美かおる、竹倉宏明</p> <p>5歳~74歳に至る男女を対象に能動握力と受動握力を測定し、両握力の発達について検討した。</p> <p>その結果、女子は能動的な筋力発揮より受動的な筋力のほうが男子に対して相対的に優勢であること、また男女ともに受動握力は幼児の時点で比較的大きな発達をなしていることなどが考えられた。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：朽木勤、宇佐美かおる、宮崎義憲</p>

4. 幼児のSquat Jumpにおける筋出力特性について	共同	S60年9月	第40回日本体力医学会	<p>幼児男女を対象に両手を体側につけたまま膝角度を、110度、90度、70度にした状態での垂直とびおよび負荷を用いた状態での垂直とびを行わせ、大学生男女を対照群として比較検討したところ、幼児は下肢筋群の筋出力における集中発揮能力が未熟な段階にあることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、竹倉宏明、井上直子、岡部洋、江口淳一</p>
5. 発育期における静的筋力と動的筋力の発達について	共同	S60年9月	第40回日本体力医学会	<p>小学生を対象に筋力を静的なもの動的なものにわけて測定し、その年齢発達の過程を観察することを目的とした。</p> <p>その結果、静的筋力と動的筋力は、同様の発達傾向を示すが相関関係に一定の傾向がみられないということから、静的筋力と動的筋力とは、筋出力様式における発達の違いによると考えられることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析及び考察、まとめ、口頭発表 共同発表者：宇佐美かおる、井上直子、岡部洋、江口淳一、宮崎義憲</p>
6. 地面反力からみた垂直とびの発達に関する検討	共同	S60年10月	第36回日本体育学会	<p>小・中学生および高校生に対しいくつかの条件による垂直とびを行わせ、その際の地面反力記録を記録した。その記録より、重心の跳躍高、踏切時の力学的パワー、力積などを導き出し、その結果を発育発達の分析した。</p> <p>その結果13歳以降の思春期における跳躍高の男女差は、主に腕の振込みや膝の反動などによるスキルの要因よりも脚のパワーの発達差によることが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、井上直子、岡部洋</p>
7. 背筋力測定時における体幹背筋群の諸活動について	共同	S60年10月	第36回日本体育学会	<p>背筋力の測定において測定条件を変化させ体幹背筋群の筋電図を記録し、その筋電図記録より条件の変化にともなう、体幹背筋群の筋活動および筋の出力特性について分析検討した。</p> <p>その結果、体幹背筋群の筋活動様式の差異は個人差によるものが大きく、背筋力の優劣によるものだけでは考えられないことが示唆された。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析 共同発表者：宮崎義憲、宇佐美かおる、井上直子、岡部洋</p>
8. 専攻分野別女子大生の健康意識と日常生活の特性	共同	H4年12月	第43回日本体育学会	<p>首都圏に位置する大学・短大の1・2年生女子を対象に健康に関する調査を行い、身体、生活、食、運動の側面から健康意識と行動について専攻別に検討した。</p> <p>その結果、健康に対する自己評価は専攻による違いは認められなかった。健康に対する知識、生活習慣、食に関しては、専攻による違いが認められた。</p> <p>本人担当部分：データ集計・分析、まとめ、口頭発表 共著者：宇佐美かおる、井上直子、湊久美子、西島洋子、坂木佳寿美</p>

9. 学習者はどのようにパフォーマンスを変容させるのか？	共同	H19年9月	第 58 回日本体育学会	<p>成人女性の投能力の基礎資料を得るために、投動作と打動作の画像分析と観察的評価に加えプロトコルを採取し、運動習熟度との関連性を分析した。その結果、運動学習過程において学習者は明確な意図を持って、自己のパフォーマンスを変容させていることが明らかになった。</p> <p>本人担当部分：投、打動作の画像分析および観察的評価を担当 共著者：井上則子、宇佐美かおる</p>
10. 市川市における働き盛り世代の運動行動と健康度について	共同	H20年3月	第142回日本体力医学会関東地方会	<p>市川市の働き盛り世代を対象にした健診結果及びアンケート調査を分析検討することにより、生活習慣病予防のための基礎資料を得ることを目的とした。その結果調査対象者の約半数が週に1回以上、30分以上の運動を習慣的に実施していた。また中学、高校時代のスポーツ経験が各年代におけるスポーツ・運動習慣につながっていた。さらにスポーツや運動を経験あるいは実施している人は、食事のバランスが良い状況であった。日常生活における活動度が高いとBMI、血中中性脂肪の値とも良い値を示す傾向がみられた。これらのことから、スポーツや運動を習慣的に実施することが日常生活における身体活動も活発化し、その結果、充実した食行動につながる可能性が高く、それが生活習慣病の予防への第一歩となることが示唆された。</p> <p>担当部分：データ集計・分析および考察、まとめ、口頭発表 共著者：宇佐美かおる、上野祐紀子、北村裕美、湊久美子</p>
11. 市川市における働き盛り世代の現在の運動行動と運動経験の関係	共同	H20年5月	第 15 回日本健康体力栄養学会	<p>市川市の働き盛り世代を対象にした健診結果およびアンケート調査より、生活習慣病予防のための基礎資料を得ることを目的とした。対象者は、20歳代を最低とし、年齢低下あるいは年齢上昇にあわせ、運動する傾向がみられ、過去の運動経験が現在の運動習慣につながることを示された。また、現在、運動習慣のある対象者がBMI、血中中性脂肪値ともよい値を示す傾向がみられた。これらのことから、スポーツや運動を習慣的に実施することが生活習慣病予防への第一歩となること、そのためには過去に運動経験を持つことが大きな動力となるため、学校教育期間の積極的な運動指導の必要性が示唆された。</p> <p>担当部分：データ集計・分析および考察 共著者：上野祐紀子、宇佐美かおる、北村裕美、湊久美子</p>
12. 「健康」「人間関係」授業での指導計画案作成の基礎づくり	共同	H28年5月	日本保育学会第69回大会	<p>養成校における5領域の指導法授業における初期段階の指導法を検討することを目的とした。指導案作成につながる前段階としてのプロセスを、「健康」「人間関係」指導法の授業内で、プログラム立案としてグループ活動課題として、それぞれの指導内容を生かしたアプローチで学生に声掛けをした。実施時期が1年前期(入学後3か月)ではあったが、導入・展開・まとめを意識して立案に臨んでいた。ただ、ねらいの設定では、子どもの実態や場面の想定をするための経験がまだ不足しているため、「言葉かけ」の検討が重要であると感じた。今後、他の領域とも連携を図り、学生の理解を促し、意欲を高めていきたい。</p> <p>担当部分：「健康指導法」の分析 共著者：菊池篤子、宇佐美かおる</p>
その他 (表彰等)				なし

## 専任教員教育研究業績

平成28年6月10日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
菊地 篤子	きくちあつこ	保 育 学 科	学科長 教授・准教授 助教	男・女
担 当 科 目 名			学内委員会等(委員長)	
「人間関係指導法」「乳児保育Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」「卒業研究(ゼミナール)」			入試募集委員	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
平成6年3月	京都女子大学家政学部児童学科卒業			学士(家政学)
平成8年3月	大妻女子大学大学院家政学研究科児童学専攻(修士課程)修了			修士(家政学)
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教育内容又は業務内容		
静岡県立伊豆中央高等学校非常勤講師	平成8年4月～平成10年3月	「家庭科」担当		
静岡県立沼津西高等学校非常勤講師	平成8年4月～平成10年3月	「家庭科」担当		
静岡県三島市健康推進課保健センター委託職員	平成9年4月～平成18年3月	乳幼児心理相談員		
静岡県田方郡函南町保健センター委託職員	平成10年4月～平成12年3月	三歳児健診心理相談員		
小田原女子短期大学家政学科非常勤講師	平成10年4月～平成15年3月	「家庭保育」担当		
静岡県田方郡修善寺町健康増進課保健センター委託職員	平成11年4月～平成16年3月	乳幼児心理相談員		
小田原女子短期大学保育学科非常勤講師	平成13年4月～平成24年3月	「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」担当		
静岡県田方郡中伊豆町健康増進課保健センター委託職員	平成15年4月～平成16年3月	三歳児健診心理相談員		
静岡県伊東市保健センター委託職員	平成15年4月～平成16年3月	二歳児健診心理相談員		
静岡県伊豆市健康増進課委託職員	平成16年4月～平成24年3月	乳幼児心理相談員		
小田原女子短期大学保育学科非常勤講師	平成21年4月～平成22年3月	「環境指導法」担当		
横浜国際福祉専門学校非常勤講師	平成17年4月～平成18年3月	「人間関係」担当		
近畿大学豊岡短期大学通信教育部非常勤講師	平成17年4月～平成18年3月	「人間関係」担当		
静岡県伊豆市教育委員会学校教育課委託職員	平成19年4月～現在に至る	巡回相談員		
静岡県伊豆市教育委員会学校教育課	平成22年4月～平成24年3月	特別支援教育コーディネーター		
小田原女子短期大学(現:小田原短期大学)保育学科准教授	平成24年4月～現在に至る	「人間関係指導法」「乳児保育Ⅰ」「保育実習指導Ⅰ」「保育実習指導Ⅱ」「保育実習Ⅰ」「保育実習Ⅱ」「卒業研究(ゼミナール)」担当		

所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)
日本保育学会	平成8年～現在	正会員
日本家政学会	平成8年～現在	正会員
日本発達心理学会	平成13年～現在	正会員
日本臨床発達心理士会	平成16年～現在	臨床発達心理士正会員

社 会 活 動 等		
名 称	活動期間	活 動 内 容
大妻女子大学家政学部附属 児童臨床研究センター研究 協力員	平成8年4月～現在	研究協力員
静岡県伊豆市教育委員会 就学支援委員	平成16年4月～現在	副委員長
静岡県伊豆市教育委員会 特別支援教育専門家チーム 会議委員	平成21年4月～平成24 年3月	委員
静岡県伊豆市こども課 要 保護児童対策地域連絡協議 会委員	平成20年4月～現在	委員
小田原市おだわら男女共同 参画プラン策定検討委員会 委員	平成26年4月～平成28 年3月	委員 (有識者)

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等		
名 称	取得年月	取 得 機 関
幼稚園教諭一種免許	平成6年3月	京都府教育委員会
中学校教諭一種 (家庭科)	平成6年3月	京都府教育委員会
高等学校教諭一種 (家庭科)	平成6年3月	京都府教育委員会
社会教育主事任用資格	平成6年3月	京都女子大学
保母資格 (現保育士)	平成6年10 月	京都府
幼稚園教諭専修免許	平成8年3月	東京都教育委員会
臨床発達心理士	平成16年 2月	臨床発達心理士認定機構

研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論 文等の名称	単 著 共 著の別	発行又は発 表の年月	発行所、発表雑誌又は 発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 育つ・育てる	共著	平成15年4 月	健帛社	乳幼児の「育つ・育てる」という領域に関する多様な 視点を、親子理解と支援・発達理解・子ども理解・反 抗期・育ちの現場・現代の課題などとして整理・理論 化した学術書である。全215頁 編著者：千羽喜代子・ 山崖俊子 共著者：池田りな・長山篤子・菊地篤子・ 帆足暁子・星順子・矢内由 本人担当部分：「第5章 第一反抗期を再考する」(p.95 ～120) 乳児保育期に表出し始める第一反抗期について、筆 者は「自己主張不的確期」と考え、第一反抗期とは、 子どもの社会性やことばの発達段階と照合して、その 時期独特の発達段階から表出される自己主張の姿で ある、という理論を展開した。そして、家庭内の人間関 係場面で、自己主張から現れる反抗の表現を①反抗の 始まり、②弟の誕生と反抗の多様化、③自立の進行と反

<p>2. 子どもの心の育ちと人間関係 一人を育てるためのかかわりと援助ー</p> <p>3. 乳児保育</p> <p>4. 保育内容「人間関係」</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 21 年 9 月</p> <p>平成 25 年 4 月</p> <p>平成 26 年 3 月</p>	<p>保育出版社</p> <p>大学図書出版</p> <p>大学図書出版</p>	<p>抗、の3段階に分けて段階的に分析した。更に、縦断的事例を取り上げ、反抗の表れを紹介・分析した。また、日米間の反抗期の受け止め方、関わり方の違いなどを紹介し、その後の幼児教育期のスムーズな人間関係の育ちのために配慮すべき要点を整理した。</p> <p>「保育者にしてもらおうことを受け入れ喜ぶ (2 歳児)」 「まねっこや見立て・つもりを楽しむ」(2 歳児)「ルールが理解できなかつたり守れない」(気になる子ども)の項目を執筆担当した。</p> <p>第6章「乳児保育のネットワーク」(p.50~59) 乳児保育のテキストである。筆者は、乳児をとりまく様々な人や機関の役割について執筆した。専門職である保育士の在り方、保育所と各専門機関との連携、そして家庭と保育所の連携について、事例を交えて整理した。</p> <p>第2章『乳児期における「人間関係」』(p.18~35) 幼稚園教育要領の5領域のひとつである「人間関係」のテキストである。筆者は、3歳未満児の二兎とのかかわりの育ちの過程と、かかわる大人や子どもの在り方について執筆担当した。</p>
<p>(学術論文)</p> <p>1. 保育を営む者とその支援者</p> <p>2. 広汎性発達障害をもつ子とその母親への援助</p> <p>3. ふたりきょうだい育児をする母親がとらえる「下の子らしさ」</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p> <p>平成 16 年 3 月</p> <p>平成 18 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要第 33 号 p.33~40</p> <p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 34 号 p.50~56</p> <p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 36 号 p.55~62</p>	<p>子どもを取りまく大人の人間関係の表れの一つである子育て支援を、「子育てを営む者」と「支援者」という枠組みで捉え、相互関係や広義の支援、支援の意義等について分析した。支援は、その質・タイミングを計ることで営む者にとって本当の意味での支援となること、一方、支援を受ける者も、自らの許容範囲を把握する大切さを示した。特に乳児保育期は、支援の質を保つことに留意することが重視された。広義の支援機関とは、子どもが生活し、その家族が子どもとともに利用する場所全般を指し、また支援者とは、支援機関に従事する者全てを指す、と分析し、子育ては社会の様々な人や機関に支えられていることを考察した。</p> <p>共著者：菊地篤子・井戸ゆかり 本人担当部分：子育て支援の体制の整理と分類、支援の在り方に関する考察を担当し、論文として全てを著した。</p> <p>発達の遅れを指摘された幼児に対する行政の健診事後教室・園生活等での周囲の大人の人間関係を心理相談員の立場で実践研究した報告である。2年8カ月間の教室参加と発達検査、個別相談や事例検討会議を通して、対象児の特性を捉え、支援方法を模索した。そして、乳児保育期から4歳までの対象児の育児・保育方法を母親・保育士に伝え、幼児支援の方策を記した。また、実際にこの事例に携わった保健師などの専門職と母親・保育士の連携体制、さらに、園の保育士と家庭の保護者の意志疎通のための留意点などの課題を示した。</p> <p>共著者：菊地篤子・井戸ゆかり 本人担当部分：実践すべてを担当し、論文として整理、分析を行い、全てを著した。</p> <p>日本の家族構成では、子どものきょうだい数の実態として、ふたりきょうだい割合的に多いことを紹介し、ふたりきょうだい育児を経験した母親の第二子に対する育児姿勢と第二子への思いをインタビューして、母親が感じる「下の子らしさ」を探った。事前調査と事例研究から、家庭内における子どもの同士の人間</p>

<p>4. 「乳児保育」に対する学生の意識調査—魅力と困難さに関する一考察—</p> <p>5. 「地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援（1）—小田原モデルの研究と試行—」</p> <p>6. 「男女共同参画企画としての子育て講座で扱う内容の検討～12年間の変遷～」</p>	<p>単著</p> <p>共著</p> <p>単著</p>	<p>平成 26 年 3 月</p> <p>平成 27 年 3 月</p> <p>平成 28 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学研究紀要, 第 44 号 p.24～34</p> <p>小田原短期大学研究紀要第 45 号 p.50～63</p> <p>児童学研究（日本家政学会児童学部会）第 40 号 p.21～28</p>	<p>関係を整理し、きょうだい育児における生活背景の違い、第一子が比較対象となること、また母親の精神的ゆとりから、子の性質の捉え方に違いが生じることを考察した。中でも、母親に第一子を育てた経験から形成された「子ども理解」や「育児への認識」が、第一子との相違点を「下の子らしさ」と捉えることが考察された。</p> <p>筆者が担当する「乳児保育Ⅰ」「乳児保育Ⅱ」の授業において、学生が感じる乳児保育の魅力と困難さについて、履修前と履修後にアンケートを実施し、意識調査した。</p> <p>子育てひろばへの導入として開催する乳児向けの「赤ちゃんひろば」の小田原市における試行と本学独自プログラムについての共同論文の中で、赤ちゃんとの生活の工夫と理論、赤ちゃんひろばでの親子活動プログラムについて担当した。</p> <p>筆者が担当する男女共同参画企画の園出前子育て講座について、1 度の受講でも参加者の有意義な学習機会となり得る内容を検討するために、これまでの講座内容を話題別、時期区分別に整理、分析した。また、主催者、開催園、参加者のニーズや傾向を探り今後の話題の核となる内容を探究した。</p>
<p>(その他) 「報告書」</p> <p>1. 子育て支援センターにおけるボランティア活動を通じた次世代育成</p> <p>2. 静岡県三島市男女共同参画幼稚園保育園出前講座アンケート調査報告書</p> <p>3. 静岡県伊豆市男女共同参画出前講座アンケート</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p> <p>平成 16 年 1 月～毎年度 1～2 回</p> <p>平成 23 年 5 月～毎年度 1 回</p>	<p>平成 24 年度かながわ子ども・子育て支援推進調査研究事業費補助金報告</p> <p>静岡県三島市政策企画課</p> <p>静岡県伊豆市総務部地域づくり課</p>	<p>少子化や、若者が乳幼児と知り合う機会の希薄さなどの課題解決の一助として、子育て支援センターにおける、中高生や大学生のボランティア活動参加支援を行った報告である。 全 58 頁 研究代表者：吉田眞理 共同研究者：石井栄子・菊地篤子・宮川萬寿美・市野繁子・小田原市子育て政策課・マロニエ子育て支援センター 本人担当部分：4 研修テキストの全体構成案と内容案 (2)赤ちゃん(乳児)の育ちとあそび、5 研修実施報告(1)②研修の様子(2)②研修の様子 p.17～20、p.45,46,50</p> <p>乳児保育期の 0 歳～2 歳までの姿を、全体的発達面・運動面・親子の人間関係を始めとする社会性の発達面などを中心に年齢ごとに整理し、具体的な生活場面や遊びを著した。</p> <p>静岡県三島市内の幼稚園や保育園で毎年実施し、筆者が講師を担当している男女共同参画出前講座「みんな子育て」で実施しているアンケート調査の報告書である。家庭内人間関係構築のための「男女共同参画」ということばの認知度、性別役割分担に対する意識調査、各家庭内での役割分業についての実態調査、講座内容への意見等を毎回調査集計し、報告している。</p> <p>静岡県伊豆市内の幼稚園や保育園で毎年実施し、筆者が講師を担当している男女共同参画出前講座「みんな子育て」で実施しているアンケート調査の報告書</p>

<p>ト調査報告書</p> <p>「テキスト執筆」 1.みんなで支える・わたしが輝く「子育て支援ひろば」</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 3 月</p>	<p>小田原女子短期大学保育学科編</p>	<p>である。家庭内人間関係構築のための「男女共同参画」ということばの認知度、性別役割分担に対する意識調査、各家庭内での役割分業についての実態調査、講座内容への意見等を毎回調査集計し、報告している。</p> <p>中高生や大学生が子どもにかかわるボランティア活動に参加するときに必要な基礎知識を紹介した。誕生前から4歳過ぎまでの育ちの概要、親子への関わり方、小田原市の子育て支援ネットワークの紹介などを記した。全76頁 共同執筆者：宮川萬寿美・菊地篤子・吉田眞理他 本人担当部分：第2章 「はじめまして！赤ちゃん」 p.15～24</p> <p>乳児保育期の0歳～2歳までの乳幼児の姿を、全体的発達面・運動面・親子の人間関係等の社会性の発達面などを中心に、生活場面や遊びを年齢ごとに整理、紹介した。</p>
<p>「学会発表」 1.幼児期におけるふたりきょうだいの第二子の生活実態に関する事例的研究</p>	<p>単独</p>	<p>平成 17 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 58 回大会（大妻女子大学）要旨集 p.972～973</p>	<p>家庭内での子ども同士や親子の人間関係を整理し、第二子の生活実態をふたりきょうだい育児を経験した母親にインタビューして、第二子の特性を探り、母親からみた「下のらしさ」を探った。「下の子らしさ」は要領の良さなどの依存的な面と、手がかからず自立した面を併せ持っていることが解った。第二子の生活力は、親を独占する機会がなく、生まれながらの競争社会で培われ、また親自身も「育児経験者」で要領をつかんでいることが多い。「下の子の生活力」は家族関係の中で「下の子らしさ」と「親の育児姿勢」の相乗効果の中で形成されたものである、と考察された。</p>
<p>2.学生が意欲的に取り組んだ領域「人間関係」の演習テーマ</p>	<p>単独</p>	<p>平成 21 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 62 回大会（千葉大学）要旨集 p.299</p>	<p>短期大学生が意欲的に取り組み、知識や保育技術を習得しやすい演習テーマや授業構成を調査・検討した。保育者を志す学生に、演習終了時に意欲的に取り組んだ演習とそうでない演習をアンケート調査・分析した結果、特別支援教育やジェンダーフリーの観点に関する演習が印象深い傾向が強かった。一方、理論や知識の習得が主となる演習は印象に残りにくく、授業の組み立て方を再検討することが課題とされた。また、体験的な演習や活動の上に、理論を展開・定着できる演習テーマを模索することが提起された。</p>
<p>3.子育て講座のテーマ～男女共同参画の視点より～</p>	<p>単独</p>	<p>平成 26 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 67 回大会（大阪総合保育大学・大阪城南女子短期大学）要旨集 p.851</p>	<p>静岡県下の行政主催の男女共同参画企画子育て講座を11年間担当してきた中で、講座内容の変遷と取り上げるべきテーマの省察、今後への展望を発表した。</p>
<p>4. 子育て講座のテーマ第2報～男女共同参画講座参加者の意識調査～</p>	<p>単独</p>	<p>平成 27 年 5 月</p>	<p>日本保育学会第 68 回大会（椋山女学園大学）</p>	<p>第67回大会の続報。講座参加者の事後アンケートを分析し、講座テーマを検討した。その中で、男女共同参画とという語句が浸透していない中でも、講座の内容は共感できた意見が多く、啓発の意義が明らかになった。</p>

<p>「小冊子」 1 静岡県伊豆市特別支援教育支援員研修小冊子</p>	<p>単独</p>	<p>平成 23 年 8 月</p>	<p>静岡県伊豆市教育委員会学校教育課</p>	<p>筆者が立案主催した、市内の幼稚園保育園こども園小中学校の各種支援員の研修に用いられた小冊子。支援員の役割・事例検討・記録の取り方・対象児と支援員の人間関係や、支援員と教員や保育者との人間関係などの内容で作成された。</p>
<p>2 赤ちゃんを育て始めたあなたへ 子育て応援ブック</p>	<p>共著</p>	<p>平成 27 年 6 月</p>	<p>小田原短期大学</p>	<p>「赤ちゃん快適に暮らす」 p.26~27 赤ちゃん快適に暮らすための工夫やコツを紹介した。</p>
<p>「リーフレット」 1.静岡県三島市幼稚園男女共同参画出前講座</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年から毎年 1~2 回</p>	<p>静岡県三島市総務部(現:政策企画課)</p>	<p>年 1~2 回の頻度で、静岡県三島市内の幼稚園または保育園に出向き、男女共同参画出前講座を実施する際のリーフレットである。「みんなで子育て」というタイトルの、保育参観に合わせた保護者対象の講座で、世論や子育て事情の変化に合わせて、サブタイトルを改訂している。</p>
<p>2.静岡県伊豆市男女共同参画出前講座</p>	<p>単独</p>	<p>平成 20 年 1 月から毎年 1 回</p>	<p>静岡県伊豆市総務部(地域づくり課)</p>	<p>年 1 回静岡県伊豆市内の幼稚園または保育園に出向き、男女共同参画出前講座を実施する際のリーフレットである。「みんなで子育て」というタイトルで、保育参観に合わせた保護者対象の講座である。世論や子育て事情の変化に合わせて、サブタイトルを改訂している。</p>
<p>3.小田原女子短期大学リカレント講座</p>	<p>共著</p>	<p>平成 24 年 8 月</p>	<p>小田原女子短期大学保育学科</p>	<p>「身体を手がかりにした発達支援Ⅱ『乳幼児の模倣行為』～まねっこ上手は育ち上手～」という講座のリーフレットである。乳児保育期からの発達過程・目と身体の協応の必要性、人間関係の中から自然発生する模倣活動、子どもの望ましい模倣活動についてなどを整理した。</p>
<p>4.静岡県教職員組合田方支部教員研修男女共同参画推進学習会</p>	<p>単独</p>	<p>平成 24 年 11 月</p>	<p>静岡県教職員組合田方支部</p>	<p>小中学校教員を対象とした「子どもの生活を創る礎」という講座のリーフレットである。①家庭での男女共同参画意識②親の役割③育ちの予先など、教育現場と家庭で各人が各方向に対する人間関係を意識し、生活に参加する意欲を育成する方法について、演習資料を含めて作成された。</p>
<p>5.神奈川県小田原市情報紙おだわらの風</p>	<p>共著</p>	<p>平成 25 年 2 月</p>	<p>神奈川県小田原市市民部人権・男女共同参画課</p>	<p>男女共同参画社会の実現を目指した情報紙。「イクメン」とは何かをテーマに、ことばの整理や一般市民へのインタビューをした。筆者は家庭での性別役割分担の歴史的背景と昨今の社会での捉えられ方、今後への展望等の意見を記した。特に、子育ての、家庭内での家族全体の人間関係の在り方を再考し、子どもに対し、適切でバランス良いかわり方が求められるとした。</p>
<p>その他 (表彰等)</p>	<p>年 月 年 月</p>	<p>特になし</p>		

## 専任教員教育研究業績

平成28年 6月29日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
野津 直樹	のづ なおき	保育学科	学科長 教授・ <b>准教授</b> ・講師・助教	男・女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
保育者論、環境指導法、保育・教職実践演習、教育実習、教育実習指導、ゼミナール、(通信課程…特例：保育者論、環境指導法、職業と社会Ⅰ)			FD委員会	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項		学位	
H9(1997)年3月	関東学院大学法学部法律学科卒業		学士(法学)	
H12(2000)年3月	玉川大学大学院文学研究科教育学専攻修了		修士(文学)	
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
学校法人なかい学園	H9年4月～H20年3月	ぬるみず・毛利台・森の里幼稚園総務、平成14年より教務主事		
学校法人小田原女子短期大学	H20年4月～H26年3月	保育学科 助教		
学校法人三幸学園 小田原短期大学	H26年4月～H28年3月	保育学科 講師		
学校法人三幸学園 小田原短期大学	H28年4月～現在	保育学科 准教授		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
財)幼少年教育研究所	H15年4月～現在	所員		
日本児童学会	H18年4月～現在	会員		
こども環境学会	H25年4月～現在	会員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
社)神奈川県私立幼稚園連合会	H12年4月～H20年3月	研究部部員として活動。		
厚木市教育研究所	H18年4月～H20年3月	囑託委員として活動。「家庭教育に関する調査研究」		
子育て支援フェスティバル 実行委員長	H22年4月～現在	小田原市内で子育てを応援している団体で実行委員会を組織している。その委員会で委員長として活動。		
森の里公民館	H22年4月～現在	地元の公民館の運営委員として活動。		
小田原私立幼稚園協会研究会 講師・助言者	H26年5月～H28年3月	小田原私立幼稚園協会より講師依頼。テーマは「環境を再考する～いつもの保育から環境を切り取る～」2年継続。		
小田原市立幼稚園教育研究会 講師・助言者	H27年4月～H28年3月	小田原公立の幼稚園より講師依頼。公開保育研究会の講師・指導助言者として活動。1年間を通して下中幼稚園の保育指導も兼ねている。		
御殿場市幼児の教育・保育施設 整備基本構想策定委員	H27年7月～H28年3月	御殿場市子ども育成課から委員依頼。		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
中学校教諭専修免許(社会)	H12年3月	東京都教育委員会		
高等学校教諭専修免許(公民)	H12年3月	東京都教育委員会		
研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論文等の名称 (著書)	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
1. 保育内容「環境」	共著	H22年3月	大学図書出版	幼稚園教育要領・保育所保育指針の内容・環境の狙いと内容を反映した章立てとなっている。全206頁。 監修：無藤隆 編著者：無藤隆、中坪史典、後藤範子 共著者：吉葉研司、松寄洋子、金子仁人、野津直樹、福田きよみ、齊藤恵美子、佐藤英文、丹野禰子、佐藤康富、伊藤匡、降旗信一 担当部分：「第6章 自然環境とのかかわり」(p.65～

2. 保育実習－幼保一元化に向けて－	共著	H24年3月	青踏社	<p>p.79, p.180～p.182)を単著。      本書を手取る学生たちこそ、子どもと自然がかかわりあう時間を一緒に過ごすパートナーであり、その自然との出会いをより味わい深いものとする。下記の節は、子どもと出会うあらゆるモノである。それらと子どもが出会う時に、学生が(保育者となった時に)何に注視してその出会いをより味わい深いものとするかについて述べていった。      1 自然とかかわる(天体・気象・地表など)      2 季節とかかわる(食材など)      3 動植物、小動物とかかわる(植物・虫・小動物など)      4 生き物を飼育する(命の尊さを知る)</p> <p>実習準備のために書かれたテキストであり、多くの養成施設で学生と教員が行き当たる実習の最初のハードルを越える手助けをすることを目的として作成された。全136頁      編著：吉田眞理      共著者：吉原美弥子、木内英実、野津直樹</p>
3. 高校生のための「保育」入門テキスト	共著	H24年3月	小田原女子短期大学	<p>担当部分：「第5章 実習の保育日誌」「第6章 実習の指導計画案」(p.119～p.136)を単著。      第5章では、学生が実習に取り組む上で、技術的にも時間的にも困難とされている保育日誌を書く作業の本当の意味を説くことを第一義においた。それは、将来の自分へのたからものとなるということである。日誌を書くことがすなわち葛藤の記録となりえる。そして自身、他者限らず、その記録を振り返ること(省察すること)で自身の成長へとつながっていくであろう。      第6章では、指導計画案のトライアングルと「どてま」の法則を知った上で指導計画案を作成することをすすめていった。前者においては、子どもの実態をまず捉えた上で、ねらいを構築し、そのねらいに基づいて活動内容が決定されるという流れを意識した上で作成するよう説明している。後者は単純に、学生が指導計画案を作成する上で忘れがちな、導入・展開・まとめの流れを意識からなくさないために私が考案した言葉遊びである。</p>
4. 教育・保育実習に役立つガイドブック	共著	H24年9月	大学図書出版	<p>担当部分：「Chapter7 子どもと生活」(p.28～p.31)を単著。      子どもたちは毎日どんな生活をしているのか、ある幼稚園の実態を通して、長くは一年間、短くは一日のスパンで紹介している。さらに、子どもの気持ちをより深く理解するための手立てを、年長児(5歳児)のレレーを見ていた年少児(3歳児)の事例も紹介している。この事例は実際に私が幼稚園で撮影した映像に基づいたものである。また様々な作品を制作していく過程で子どもたちがどんな思いで描き、作り、表現しているのか、それを探ることも大切であるということを説明した。</p>
	共著	H24年9月	大学図書出版	<p>幼稚園や保育所の保育者と養成校実習担当の教員が共に頭を悩まされている学生の実習の実情を取りまとめ、両者が歩み寄る教育・実習保育実習の在り方を提言するものとなっている。全85頁。      編：子どもから学ぶ実践研究会      代表：渡邊真一      編集委員：黒田眞喜子、吉濱優子、桃枝智子、山室吉孝      共著者：溝脇しのぶ、照沼晃子、榊原剛、山崎和子、山下佳香、堀内千津子、野津直樹、園田巖、朴淳香</p> <p>担当部分：「step4 健康と育ち」(p.56～p.64)を単著。      7つの事例を通して、学生が実習生として陥りやすい健康や学生の育ちに関する問題を紹介した。それぞれの事例について「養成校からのアドバイス」と「受入れ園からのアドバイス」として両者の思いを、両者の思いを知り得る立場の者として執筆した。また、事</p>

5. 幼稚園教諭・保育士のための実習ガイドブック	共著	H26年4月	大学図書出版	<p>例ごとにワークを設けて、その事例をより深く考えるきっかけづくりもおこなった。取り扱った事例は以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 自分の体が心配</li> <li>2 実習時の健康チェック</li> <li>3 実習直前にひざを痛めてしまった</li> <li>4 実習終了後に腰痛になってしまった</li> <li>5 体を動かすことが苦手な実習生</li> <li>6 実習クラスを替えてほしい</li> <li>7 大人としての社会性が不足している</li> </ol> <p>実習に挑む学生にとっての身近な「助っ人」として活用できるよう、それにふさわしい理論・実践の専門家によって書かれたテキストとなっている。全151頁。 監修：福本俊 編著者：福山多江子、田中浩二、大塚良一 共著者：駒井美智子、田中浩之、堀内千津子、綾牧子、加藤智、志濃原亜美、福田智雄、望月文代、野津直樹</p> <p>担当部分：「第4章 指導案の作成」(p.137～p.144)を単著。 幼稚園における指導案の書き方について紹介した。幼稚園において、どう子どもの実態を捉え、どう部分実習指導案・全日(一日・責任)実習指導案を書いていったのかを伝えた。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 子どもの実態を捉える</li> <li>2 部分実習の指導案の書き方</li> <li>3 全日実習の指導案の書き方</li> </ol>
6. 保育・教職実践演習－保育理論と保育実践の手引き－	共著	H26年5月	大学図書出版	<p>保育・教職実践演習という科目だからこそ、保育現場で活躍した大学教員を集め、より保育現場の臨場感が伝わるようにという願いを込めて作成されたテキストである。全135頁。 編著者：横山文樹、駒井美智子 共著者：堤大輔、溝口武史、山本恵子、河合光利、守巧、仁藤喜久子、野津直樹</p> <p>担当部分：「第7章 総合的な実践を目指して」(p.87～p.102)を単著。 本学において保育・教職実践演習で実践してきた「模擬保育」について、その準備、実践、省察(意見交換会)の段階に沿ってわかりやすく執筆した。さらに、自身が幼稚園で経験してきた「幼稚園で誕生会の計画を立案する過程」を保育現場の臨場感が伝わるようにと願いを込めて執筆した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 模擬保育の準備、実践</li> <li>2 模擬保育終了～意見交換会～</li> <li>3 理論と実践との結びつき～誕生会の計画を立てる～</li> </ol>
7. 保育入門テキスト	共著	H27年3月	萌文書林	<p>同事項3を再編し発行したテキストである。 編：小田原短期大学 保育学科 監修：吉田眞理 共著者：内山絵美子、吉田収、上野奈初美、有村さやか、馬見塚昭久、金澤久美子、野津直樹、市野繁子</p> <p>担当部分：「Chapter7 子どもと生活」(p.30～p.33)を単著。 内容は同事項の3を参照。</p>
8. 生活事例からはじめる造形表現	共著	H27年4月	青踏社	<p>造形の基礎である素材の取り扱い方、表現技法から、それを保育現場で活かせるような造形活動、そして幼稚園での造形展という行事(実践事例)からより具体的な保育実践を学べる内容となっている。 編著者：宮川萬寿美、吉田収 共著者：野津直樹</p> <p>担当部分：「Ⅲ 実践編 造形展～向けての活動」(p.116～p.134)を単著。 保育現場における造形展(作品展)が実際にどのように行われているのかを38枚の写真を入れながらわかりやすく執筆した。さらに、ある幼稚園の実践事例を用いて造形展の計画立案から準備、当日、片づけ、振り返りまでを時系列に沿って執筆した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1 造形展の実際</li> </ol>

9.子育て応援ブック	共著	H27年6月	小田原短期大学	<p>2保育実践との結びつき（造形展の計画立案）</p> <p>赤ちゃんを育て始めた保護者のための子育てヒント集として、小田原短期大学教員で執筆した。</p> <p>担当部分：「赤ちゃん快適に暮らす」（p.28～p.29）を単著。</p> <p>赤ちゃん（子どもたち）を取り巻く環境として「環境って何だろう」「子どもと地域の人たち」「どうして？なんで？」を大切の3つのポイントに絞ってわかりやすく楽しく学べるように執筆した。</p>
(学術論文) 1. 幼稚園教師のモチベーションを高める要因に関する研究	単著	H12年3月	玉川大学大学院修士論文	<p>研究目的：営利組織・非営利組織におけるモチベーションを高める要因に関する理論研究を検討し、その上で幼稚園教師のモチベーションを高める要因を明らかにする。</p> <p>研究結果：幼稚園教師の自己実現の欲求を満たすものは、幼児の発達過程を見届けることであると確認し、その意識を高める努力をすること、説得や研修などとおして、幼稚園教師に自らがモチベーションを生み出すという意識に気付くように働きかけること、教師同士、園長と教師などの「行動/対話」により築かれていく教師間の協力体制を整え、それを含めた幼稚園全体の教育環境を再検討すること、など。</p>
2. 幼児期にはぐくむ「生きる力」を先人たちや生き物に学ぶ体験保育	単著	H14年3月	厚木市教育研究所教育実践記録(平成13年度教育実践記録集第28集)	<p>幼児期に体験することの少ない「昔あそび」「かたりべ」慣習など、大人たちのノスタルジックな回想を踏まえ家庭、日常生活や幼稚園生活の中に復活させるとともに、先人たちの生き方から学ぶ体験保育を進めた。また自然環境の中で生棲する生き物の生活を観察し、動植物の生体や行動に関心を持ち好奇心や探求心を深め、「生きる力」を学び、豊かな人間性の創出に取り組み、自然に身につけ自ら学び、考える力を体得する体験保育を実践した。</p>
3. 家庭教育に関する調査研究	共著	H18年7月	厚木市教育研究所(平成17年度研究紀要第79集)	<p>厚木市内にある小・中学校、私立幼稚園、市立保育所に通う子どもの保護者を対象として、家庭教育に関する意識調査アンケートを行った。「家族のかかわり」「家庭の教育方針」「家庭のしつけ」「地域とのかかわり」について意識調査を行い、家庭における生活実態や保護者の家庭教育への考え方の現状把握をし、家庭の教育力の課題を明確にすることを目的とした。</p> <p>共著者：野津直樹、奥田七代、石川和子、鈴木努、服部弥生、大木信子、安藤淳、播間則代 全86頁。</p> <p>担当部分：「家族のかかわり」</p> <p>家族のかかわりについてアンケート設問の作成、アンケート結果の分析等を担当した。アンケート回答者(9割が母親だった)に対して子ども、パートナー、祖父母と過ごす時間、過ごし方、会話内容などを質問した。幼稚園・保育所の子どもを持つ親が「パートナーと過ごす時間は2時間未満」と答えた割合が5割以上というアンケート結果を受け、「早く帰る日を作ってみては？」という提言をした。また、アンケート内の自由記述欄をまとめる作業も担当した。</p>
4. 学生のための指導計画教授法(幼稚園)～実習、実践を見据えた確かな力をどのように培うべきか～	単著	H22年3月	小田原女子短期大学(研究紀要第40号)	<p>研究目的：学生にとってよりよい指導計画教授法を明らかにすることを本研究の目的とする。</p> <p>研究結果：経験に即した指導法は、より具体的でわかりやすい教授法であったようで、一定の効果はあったといえる。しかし、「指導計画の書き方」といった「how to」を教授することに傾倒していたため「指導計画を作成する上で基本的に知っておくべきこと」についての理解が学生に定着するまでには至らなかった。</p> <p>指導計画の書き方を専門的知識・技術と考えるのなら、この部分においては、指導計画についての専門的知識・技術を習得できたといえる。しかし、それ以外の部分(指導計画を作成する上で基本的に知っておくべきこと)についての理解の定着が望まれる。さらに、他科目との連携を図りながら、理解が不足している部分について補填していきたい。</p> <p>私の指導計画教授法において「指導計画の書き方」以</p>

5. ひろば活動の 実践を通して指 導計画を作成す る試み	単著	H22年9月	全国保育士養成協 議会第49回研究大 会発表論文集	外の部分が学生に伝わったかどうかは疑わしい。学生が指導計画を「作成できる」状態へと導くことだけに固執せずに「指導計画を作成する上で基本的に知っておけなければならないこと」についての理解を定着した上での指導計画作成へと導きたい。  「教育実務演習」授業内における私が担当する学生グループでのひろば活動の実践を通しての指導計画を作成する試みを紹介した。この時点で進行中だったため、来年度にまとめを継続研究として発表する予定であった。
6. ひろば活動の 実践を通して指 導計画を作成す る試み その2	単著	H23年9月	全国保育士養成協 議会第50回研究大 会発表論文集	前述5.の継続研究として「教育実務演習」授業内において、学生グループでのひろば活動の実践内で指導計画を作成する試みのまとめを発表した。
7. 本学学生が持 つ「保育者のイ メージ」の変遷 についての研究	単著	H24年3月	小田原女子短期大 学(研究紀要第42号)	研究目的：保育者論を受け持った3年間(平成21年度～23年度)において、学生一人一人による保育者のイメージの変遷をたどることで、私が提示したキーワードのうち最重要ワードである「葛藤と成長、省察」が学生にどれほど定着しているのかを探ることを目的とする。 研究結果：様々なデータを分析し、それらを総合して考えると、1年次前期に「保育者論Ⅰ」、2年次後期に「保育者論Ⅱ」を開講すべきということを提言。
8. 保育環境に関 する一考察～砂 場での遊びを考 える～	単著	H25年9月	全国保育士養成協 議会第52回研究大 会発表論文集	園環境としての砂場について考え、砂場での子どもの遊びを記録し、記述し、論考することで「砂場での子どもの遊び」と「学生の砂場での遊び経験(体験)」を関連付けていく発表をした。
9. 保育環境に関 する一考察(そ の2)～砂場 での遊びを考 える～	単著	H26年3月	小田原女子短期大 学(研究紀要第44号)	研究目的：園環境としての砂場について考え、砂場での子どもの遊びを記録、記述、論考することで「砂場での子どもの遊び」と「学生の砂場での遊び体験(経験)」を関連付けていくこと。 研究結果：記録に登場する頻度が多い子どもyについて、その砂場での遊びを抽出することで、本研究者が見慣れない大人から本研究者個人へと変容する段階を経た後、より強く本研究者と関わりたいという気持ちにまで昇華したと推測できた。さらにはyにとって砂場とは自立して待つことができる場であると同時に一緒に誰かと遊ぶことのできる依存の場であることも導くことができた。これらは、4月から11月までの映像記録を記述化することでしか見えなかったyの心の動きである。そして、こういった分析の蓄積こそが本研究者の求める唯一の知識の源泉であり、この知識の源泉が本研究に基づく先の研究における最終的な到達点である、学生への寄与へとつながると確信した。
10. 子どもが環 境と出会う時の 保育者のかかわ りの実際 ～保育現場から 生まれる「環境 ブック」を作成 する試み～	単著	H26年9月	全国保育士養成協 議会第53回研究大 会発表論文集	研究目的：園生活における保育の一瞬の記録収集を行いながら(その記録には保育者の子どもたちへのかかわりも含める)、次の2つを研究の目的とした。 ①保育の一瞬における保育者の子どもたちへのかかわりをまとめた「環境ブック」を作成し、それをまずは本学学生に提示する。 ②保育の一瞬における保育者の子どもたちへのかかわりを、記録収集した保育者とともに省察を行うような一つの園内研修モデルを提案する。 研究結果：研究の目的①としては、同年11月19日の研究大会に向けての研究発表として準備を進めた。そこでは途中経過を報告する形をとった。研究大会で得た知見をもとにより良い環境ブックを作成していく予定とした。完成した環境ブックは、本研究者が担当する環境指導法や保育者論で本学学生へ提示する。研究の目的②としては、上記研究大会後の研究部会の中で取り組んでいく予定である。
11. 地域子育て ひろばを活用し た乳幼児家庭全 戸支援(1)～小 田原モデルの研 究と試行～	共著	H27年3月	小田原短期大 学(研究紀要第45号)	担当部分：「4.保護者向けテキスト作り (5)赤ちゃんと暮らす ③子どもと環境がかかわるということ」(p.58～p.59)を単著。 子どもにとってより身近な環境として、人、物、自然、社会の4つの環境を題材としながら、子育て中の保護者にとってわかりやすい執筆を目指した。 1 環境って何だろう？

12. 保育者としての葛藤と成長を知るためのインタビュー調査	単著	H27年9月	全国保育士養成協議会第54回研究大会発表論文集	2子どもと地域の人たち 3「どうして?」「なんで?」を大切に  研究目的:大学を卒業した学生が保育者となった時に、保育者としての葛藤の在り様、そしてその葛藤をもとにした成長の在り様が実際にどういったものであるのか、そのリアルを知ることを目的とした。
(その他) 1. 2.		年 月 年 月		
その他 (表彰等)				

専任教員教育研究業績

平成28年 7月 1日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
馬見塚 昭久	まみづか あきひさ	保育学科	学科長 教授・准教授(講師)助教	Ⓜ 女

担 当 科 目 名	学 内 委 員 会 等 (委 員 長)
文学・児童文学・言語表現・基礎学力演習・表現総合演習・卒業研究(ゼミナール)	FD委員会・入試募集委員会

学 歴		
和暦(西暦)年 月	事 項	学位
S59(1984)年3月	成蹊大学経済学部経営学科卒業	経済学士
H19(2007)年3月	明星大学大学院人文学研究科教育学専攻修士課程修了	教育学修士

教 育 歴 ・ 職 歴		
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容
三菱プレジジョン株式会社	S60年3月～61年6月	経理部原価課
神奈川県立みどり養護学校	H元年1月～元年3月	臨時的任用教諭
茅ヶ崎市立茅ヶ崎小学校	H元年4月～7年3月	教諭
茅ヶ崎市立今宿小学校	H7年4月～15年3月	教諭
茅ヶ崎市立浜須賀小学校	H15年4月～21年3月	教諭
鎌倉市立稲村ヶ崎小学校	H21年4月～23年3月	教諭
鎌倉市立稲村ヶ崎小学校	H23年4月～24年3月	総括教諭
鎌倉市教育委員会	H24年4月～26年3月	教育部教育総務課社会教育主事
小田原短期大学	H26年4月～現在	保育学科講師

所 属 学 会 等		
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
日本国語教育学会	H26年4月～現在	会員
日本児童文学学会	H26年10月～現在	会員
日本近代文学会	H27年4月～現在	会員
日本文学協会近代部会	H27年5月～現在	会員

社 会 活 動 等		
名 称	活動期間	活 動 内 容
小田原文学サロン実行委員会	H27年8月～現在	小田原固有の文学資産の有効活用を図り、文学の盛んな街づくりに寄与する諸活動を行う。読書会、朗読会等を開催してきた。
	年 月～ 年 月	

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等		
名 称	取得年月	取 得 機 関
高等学校教諭二級免許 社会	S62年1月	神奈川県教育委員会(昭61高2普第352号)
中学校教諭一級免許 社会	S62年2月	神奈川県教育委員会(昭61中1普第298号)
小学校教諭二級免許	H元年1月	神奈川県教育委員会(昭63小二普第62号)
小学校教諭専修免許	H19年5月	神奈川県教育委員会(平19小専修第0005号)

研 究 実 績 に 関 す る 事 項				
代表的な著書、論文等の名称	単 著 共 著 の 別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1 教室にあたたかい連帯感を	単著	1998年6月	教育誌「子どもと教育」(あゆみ出版) p68～p71	・プラスの視点で一日を振り返ることにより、友だちの良い点を見つけ、教室を温かい連帯感で満たすための提言。
2 子どもたちの	単著	1999年7月	教育誌「子どもと教	・従来の型にはまった「課題主義」の作文は、子ども

想像力・表現力を育てる創作遊び		～ 2000年2月	育」(あゆみ出版)	たちの内面的欲求を満足させにくい、「書くことがない」という事態が生じがちだった。それを打開する方策として、「感覚体験や心の世界をことばで自由に表現する遊び(創作遊び)」を論じたもの。
3 続いつでもどこでも群読	共著	2004年8月	高文研	学級・学年・全校活動のなかでの群読 民話の世界を共有する「モチモチの木」 80ページ～89ページ 企画・編集 家本芳郎・重水健介+日本群読教育の会 ・群読は、言語能力を高め、楽しい学校生活を作ることのできる「声を合わせる文化」である。朗読や演劇とは違う独自の文化活動だが、まだ脚本が少ない。本書では、物語教材の群読実践を紹介した。
4 基本的生活習慣のしつけ	共著	2005年3月	ひまわり社	A 健康な体をつくること ①健康生活の習慣 11. 運動する習慣が身についている 30ページ～31ページ ②食事の習慣 15. 偏食なく食べることができる 38ページ～39ページ 家本芳郎・編著 ・基本的生活習慣は、家庭生活、学校生活の「基本」であり、子どもの自立には欠かせないものだが、家庭の教育力が低下しつつある近年、十分身につけさせることが難しくなっている。本書では、家庭生活、学校生活の両面から、自立した子どもを育てるためのヒントを提示した。
5 授業ハンドブック	共著	2005年4月	たんぼ出版	1. 授業の力量をあげる基礎技術 ①授業のルールをつくる 8ページ～9ページ ③テスト問題の作り方 32ページ～33ページ 家本芳郎・編著 ・授業の技は、先輩教師から後輩教師へ連綿と伝えられてきたものだが、最近では多忙化により十分伝えられなくなってきた。本書では、授業の力量を高めるために、これだけは知っておきたいという基礎技術を絵入りで紹介した。
6 パッと使える学級づくり便利グッズ	共著	2008年3月	フォーラム・A	4章 授業をもうあげるグッズ ・マグネットネームプレート 100～101ページ ・百人一首 104～105ページ 重水健介編著 ・授業や学級活動で役立つ、便利な小物の作り方や使い方を紹介した。単に作り方だけでなく、独創的な使い方も紹介するように努めた。

7 保育入門テキスト	共著	2015年3月	萌文書林	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者を目指す人のために、保育者の仕事内容と保育者になるための勉強のエッセンスを紹介した書である。絵本の特殊性と子どもの見方についての解説を担当した。</li> <li>Chapter5「絵本や物語と子どもの世界」</li> <li>22 ページ～25 ページ</li> <li>共著者:内山絵美子、吉田収、上野奈初美、有村さやか、金澤久美子、野津直樹、市野繁子、吉田眞理、馬見塚昭久</li> </ul>
(学術論文)				
1 「共話」によって拓く、『スイミー』読解指導の新たな可能性	単著	2007年3月	明星大学通信制大学院研究紀要『教育学研究』第9号	<ul style="list-style-type: none"> <li>・物語教材の授業では、「共話による融合読み」が真に主体的・個性的な読みをもたらすことが報告されている。その有効性を活用して、教科書教材『スイミー』の教材としての不完全性を克服した実践報告。</li> </ul>
2 絵本『お手紙』が取り持つ異年齢交流学習 ―国語科学習における保幼小連携の試み―	共著	2010年12月	埼玉学園大学紀要人間学部編 第10号	<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育園、幼稚園から小学校への連続性のある学びを目指して、小学校2年生と各自の出身園々児たちとの交流を試みた。本研究では、交流の概要を示し、双方の反応及び意識を確認した。共著者:三浦正雄、馬見塚昭久</li> </ul>
3 絵本『お手紙』が取り持つ異年齢交流学習 ―国語科学習における保幼小連携の試み その2―	共著	2011年12月	埼玉学園大学紀要人間学部編 第11号	<ul style="list-style-type: none"> <li>・前述の紀要で明らかにできなかった、園児、児童の作品分析を通して、保幼小連携の可能性を探った。共著者:三浦正雄、馬見塚昭久</li> </ul>
4 松谷みよ子氏への書面インタビュー ―怪談・不思議譚・怪異譚・霊験譚をめぐって―	共著	2014年12月	埼玉学園大学紀要人間学部編 第14号 pp.205～209	<ul style="list-style-type: none"> <li>・赤ちゃん絵本から民話採の訪まで、幅広い活動をしてきた松谷みよ子氏に対して、怪異へのまなざしをテーマにインタビューをした記録。その結果、氏の作品の根底には、目に見えない世界への真摯な思いが反映されていることが明らかとなった。</li> <li>共著者:三浦正雄、馬見塚昭久</li> </ul>
5 民話における怪異と児童文学における神秘をつなぐもの～『ふたりのイーダ』にみる異界への回路～	共著	2015年3月	小田原短期大学研究紀要 第45号 pp.23～31	<ul style="list-style-type: none"> <li>・松谷みよ子のファンタジー児童文学と現代民話との接点を追求した。その結果、アニミズムや憑依を源泉とする生命観、仏教における輪廻転生、能における生者と死者との交流という三つの柱を基盤とする回路を明らかにした。</li> </ul>
6 山田太一氏へのインタビュー(1) ―怪談・不思議譚・怪異譚・霊験譚をめぐって―	共著	2015年12月	埼玉学園大学紀要人間学部編 第15号 pp.237～240	<ul style="list-style-type: none"> <li>山田太一氏は、生活感のある脚本を多数発表してきた一方で、『異人たちとの夏』等、異界や怪異を扱った小説も上梓している。それらの作品がどのような思想的背景のもと、どのような経緯で作品化されていたのか、インタビューによって明らかになった。共著者:三浦正雄、馬見塚昭久</li> </ul>

7 児童文学に描かれた告発と怪異 — 『死の国からのバトン』 (松谷みよ子) を支えるもの—	単著	2016年3月	小田原短期大学研究紀要 第46号pp.62~71	従来、松谷みよ子のファンタジー児童文学『死の国からのバトン』は、公害の告発が主テーマと考えられてきた。本稿では、作品に描かれた怪異の意味を考察し、「祖先崇拝による救済」というもう一つの重要なメッセージが隠されていることを明らかにした。
その他 (表彰等)				

## 専任教員教育研究業績

平成28年 6月 30日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
望月 たけ美	もちづき たけみ	保育学科	学科長 教授・准教授・ <b>講師</b> ・助教	男・ <b>♀</b>
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委 員 長)	
音楽表現Ⅰ、音楽表現Ⅲ、表現総合演習、卒業研究(ゼミナール) ピアノ弾き歌い、おだたん人間成長講座Aコース			人間成長講座運営委員会、マロニエ合同運営 協議会、クラブ連絡会	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
H3(1991)年3月	武蔵野音楽大学音楽学部作曲学科 卒業			芸術学士
H3(1991)年4月	武蔵野音楽大学大学院音楽研究科修士課程作曲専攻入学			
H5(1993)年3月	武蔵野音楽大学大学院音楽研究科修士課程作曲専攻修了			修士(音楽)
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
武蔵野楽器ヤマハ音楽教室	H2年4月～H11年3月	ピアノ科講師として勤務		
常葉学園短期大学 音楽科	H8年4月～H15年3月	非常勤講師 「音楽理論」「和声学」「ソルフェージュ」		
常葉学園短期大学 保育科 および保育専攻科	H16年10月～H26年3月	非常勤講師「音楽とこども」 保育内容研究「音楽表現」		
常葉学園短期大学 音楽科	H17年4月～H26年3月	非常勤講師 「音楽理論」「ソルフェージュ」		
常葉大学 教育学部	H21年4月～現在	非常勤講師 「音楽理論」「音楽Ⅰ」		
常葉学園橘高等学校音楽科	H22年4月～H26年3月	非常勤講師 「演奏法Ⅰ」「演奏法Ⅱ」		
富士常葉大学 保育学部	H23年4月～H27年3月	非常勤講師 「幼児音楽表現」		
小田原短期大学 保育学科	H26年4月～現在	専任講師として勤務。「音楽表現Ⅰ」「ピアノ弾き歌い」「音楽表現Ⅲ」「表現総合演習」「卒業研究(ゼミナール)」「おだたん人間成長講座」		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
静岡県演奏家協会	H17年4月～現在	正会員、静岡第一支部(演奏部)		
日本作曲家協議会	H18年11月～現在	正会員		
日本音楽教育学会	H24年6月～現在	正会員		
日本音楽表現学会	H24年6月～現在	正会員		
日本保育学会	H26年9月～現在	正会員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
四世代をつなぐ「みんなのコンサート」委嘱作曲・編曲家および音楽指導教員	H16年1月～現在	四世代をつなぐ「みんなのコンサート」第1回～第11回における、コンサート企画スタッフ、コンサートのテーマに応じた楽曲の編曲・作曲、児童合唱音楽指導		
河合楽器主催の音楽コンクール審査委員	H21年12月～現在	河合楽器主催音楽コンクール、こどもコンクール、歌のコンクール、ドリマトーン部門における、静岡東部・中部地区の審査委員長および審査講評		
カワイ音楽研究会研修講師	H22年9月～現在	河合楽器主催カワイ音楽研究会研修講師として、カワイ音楽研究会所属ピアノ指導者に、「コンクール課題曲の作品分析と演奏解釈」を講演		
カワイ音楽コンクール出場者ピアノ特別公開レッスン講師	H24年11月～平成24年12月、H25年11月～H26年4月、H26年10月～H26年11月、H27年	カワイ音楽コンクール出場者(幼児～高校生)を対象としたピアノ特別公開レッスン特別講師(カワイ楽器静岡東事務所主催)		

日本作曲家協議会主催 「第26回こどもたちへ」 楽譜出版応募作品選考委員	H23年6月	日本作曲家協議会楽譜出版事業「こどもたちへ」2011年版に楽譜出版される作品の選考
日本作曲家協議会主催 「第30回こどもたちへ」 楽譜出版応募作品選考委員	H26年7月	日本作曲家協議会楽譜出版事業「こどもたちへ」2014年版に楽譜出版される作品の選考
伊東西ロータリークラブ 第1682回例会講師卓話	H25年5月	「クラシック界における女性作曲家の存在」を講演 (於：伊東市暖香園会場)

担当教科目に関する資格・免許等

名称	取得年月	取得機関
中学校教諭専修免許(音楽)	H5年3月	東京都教育委員会
高等学校教諭専修免許(音楽)	H5年3月	東京都教育委員会

研究実績に関する事項

代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書・CD) ①「こどもたちへメッセージ2007」	共著	H19年12月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： 河合楽器製作所	ピアノ独奏曲『かえるくんからがまくんへ』 担当作曲部分：(pp14-15) CD：(truck10) 日本作曲家協議会が、音楽教育事業として力を入れている楽譜出版。公募作品の中から選曲された、作曲家が子供たちの為に書き下ろしたピアノ作品集。 小学校2年生の国語の教科書(光村図書)の教材、アーノルド・ローベルの『おてがみ』というお話をイメージして作曲。小学校での国語と音楽を連動させた授業の中で、鑑賞教材として使われた。
②「キッズBOXピアノコンサート2008」(第1刷)	共著	H20年11月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： オンキョウパブリッシュ	ピアノ連弾曲『小鳥のアンニン』 担当作曲部分：(pp78-81) CD：(truck27) 自分のパートの役割を意識できるような構成で、ピアノ発表会連弾曲として、各地で演奏されている。
③「キッズBOXピアノコンサート2010」(第1刷)	共著	H22年3月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： オンキョウパブリッシュ	ピアノ連弾曲『笑顔いっぱい花いっぱい』 担当作曲部分：(pp88-90) CD：(truck26) 機能と和声の特質や終止感、楽曲形式が分かりやすい作品。学習者が、音階構成音の各働きが感覚的に捉えやすいよう作曲した。
④「こどもたちへメッセージ2012」(第1刷)(第2刷)(第3刷)(第4刷)(第5刷)(第6刷)	共著	H24年3月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： 河合楽器製作所	ピアノ連弾曲『小さな赤いライオン』 担当作曲部分：(pp32-35) マーク・ベロニカ作『ラチとらいおん』という物語をもとに作曲。楽曲中の動機は、現れる度に拡大され、強い子になっていくラチのように豊かに華やかに変化していく。学習者が、物語の展開をイメージしながら演奏できるようになっている。
⑤「こどもたちへメッセージ2013」(第1刷)(第2刷)	共著	H25年3月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： 河合楽器製作所	ピアノ独奏曲『セキセイインコがみた夢』 担当作曲部分：(pp8-10) CD；(truck3) テクニックの学習を兼ね備えた作品。多くの子どもたちのピアノ発表会のレパートリーになっている。
⑥「初等教育課程のための鍵盤ハーモニイ入門」	共著	H25年3月	著者：山崎正嗣 望月たけ美 発行所：常葉学園 大学初等教育課程	執筆内容：音階上の主要コードネーム、音階の調性が変わった時の考え方、小学校歌唱共通教材全24曲の曲目解説。担当執筆部分：(pp13、15、52-60) 幼稚園教諭や小学校教員を目指す学生のための、コードネーム付と伴奏法のテキスト。幼稚園教諭・小学校教員養成大学で、授業テキストとして使用されている。

⑦「フレーズ感と和声感を大切にしたい新しいソルフエージュ」	共著	H27年3月	著者：山崎正嗣 望月たけ美 発行所：篠原印刷出版部	執筆内容：リズムやメロディーモチーフによる創作や2声～4声までの視唱課題の実施を通して、音楽表現を感じ取り、真の新曲視唱の力を身につけることを目指したI章から10章の課題集。全37ページ。 幼稚園教諭や小学校教員を目指す学生の為のテキスト。教員養成校の授業テキストとして使用されている。 常葉大学教育学部の山崎正嗣氏との共著。
⑧「ソルフエージュ実践ノート」	共著	H27年9月	著者：山崎正嗣 望月たけ美 発行所：篠原印刷出版部	執筆内容：「フレーズ感と和声感を大切にしたい新しいソルフエージュ」課題集のための実践ノート。創作課題、新曲重唱（2～4声）課題と、形式創作（一部形式～三部形式）課題および個人による旋律とリズム課題の実践ノート。全67ページ 常葉大学教育学部の山崎正嗣氏との共著。
⑨「こどもたちへ」メッセージ2016 27人の作曲家による～世界のごちそう編第2巻（第1刷）	共著	H28年4月	編者： 日本作曲家協議会 発行所： 河合楽器製作所	ピアノ独奏曲『小龍包を召し上がれ！』 担当作曲部分：(pp14-16) 世界のごちそう編として27人の作曲家によって作曲されたピアノ独奏曲、連弾曲集の第2巻。中国の音階であるペンタトニック・スケールを作曲。冒頭の左手部分から開始する主題が、曲全体にわたって活かされ、変容を遂げながらフィナーレ部分で拡大形となって登場する。対位法的要素と和声的要素を含む作品で、小さな手のピアノ学習者のフレーズ感や和声感を育むことを目指している。
(学術論文) 「日本の創作オペラの技法の研究」石桁真礼生きる作品『卒塔婆小町』をめぐって	単著	H5年3月	武蔵野音楽大学	修士論文。日本語のオペラを作曲するに当たり、自分で物語から台本を起こすことを考えていたためテーマとした。三島由紀夫作『卒塔婆小町』を、作曲家石桁真礼生が、大幅な改作をしてオペラ台本にまとめている事、また、現代のオペラとして登場人物に与えられた指導動機の扱いが見事である事から、考察の必要性を感じ研究論文とした。
「初等科教育課程における<音楽科>音楽実技の現状と模索」～音楽実技(ピアノ)における集団授業の試み～	共著	H24年12月	常葉学園大学研究紀要 (第33号)	執筆者：山崎正嗣、望月たけ美 執筆内容：幼稚園、小学校で必要なピアノの技術とはなにか。現場で求められる音楽実技とは何かに視点を置き、「歌う」という活動に向けた確かな力をつけるための音楽実技の取り組みについて、授業実践を通して論じた。 担当執筆部分：(pp18-24)『授業実践による問題点と改善点』～平成24年度前期「音楽I」15回の授業を振り返って～
(ポスター発表) 「地域力を活かした保育養成におけるピアノ技術の指導について」	共著	H27年5月	日本保育学会 (第68回大会)	共同研究者：今泉明美、東元りか、望月たけ美 小田原短期大学保育学科で平成26年度より実施している、新カリキュラム「地域力を活かしたピアノ特別授業(課外授業)」について、H25年度旧カリキュラムとの学習効果の比較分析を行い、新カリキュラムのによる保育者としての音楽実践力、その根底となる感性の育成への効果について検証した。
「保育者養成校における音楽科授業の取り組み～コード付けの学習を通して～」	共著	H28年3月	小田原短期大学研究紀要(第46号)	執筆者：東元りか、望月たけ美 小田原短期大学の音楽科授業におけるコード付け学習における学生の達成状況と、授業アンケート調査をもとに授業の効果について検討。コード付け学習を通して見える近年の学生の特性や課題、授業の展開や取り組みについて考察した。

<p>(教育活動における活動・編曲・作曲作品)</p> <p>①「みんなのコンサート」～四世代をつなぐ歌～真理ヨシコと共に～第1回～第12回</p>	自作品の提供	H17年1月～ H28年7月	みんなのコンサート実行委員会	<p>編曲・作曲担当。みんなのコンサート児童合唱団の音楽指導スタッフ。初代NHK歌のおねえさんの真理ヨシコ氏と共に、四世代をつなぐ歌で子供の心を育てようという企画のもと活動。毎年5月5日にコンサート。</p> <p>(於：静岡清水マリナート大ホール)</p> <p>第1回のテーマ「静岡ゆかりの歌」</p> <p>第2回のテーマ「静岡と子供の歌」</p> <p>第3回のテーマ「おばあさんのお母さんの歌」</p> <p>第4回のテーマ「子どもの心12か月」</p> <p>第5回のテーマ「手紙～童謡 90年赤い鳥から～あなたへの手紙」</p> <p>第6回のテーマ「歌でつなぐ『青い鳥』チルチルミチルの旅」</p> <p>第7回のテーマ「行ってみよう！歌のある町へ」</p> <p>第8回のテーマ「大好き！私の富士山～あっちこっちから見る～」</p> <p>第9回のテーマ「あくしゅでコンニチハ」</p> <p>第10回のテーマ「羽衣」</p> <p>第11回のテーマ「徳川家康公顕彰400年」</p> <p>第12回のテーマ「清見潟～海の日～」</p>
⑪静岡市立三番町小学校閉校記念コンサート	自作品の提供	H18年3月	静岡三番町小学校	「静岡フィルハーモニー交響楽団と共に未来を歌う」コンサートにおけるオーケストラ編曲 (於：静岡文化会館大ホール)
⑫静岡市立安東小学校創立記念コンサート	自作品の提供	H19年3月	静岡市立安東小学校	静岡市立安東小学校全児童による合唱編曲・室内オーケストラ編曲 (於：安東小学校体育館)
⑬静岡市立東源台小、浜田小学校音楽発表会	自作品の提供	H19年11月 H20年11月	静岡市立東源台小学校、浜田小学校	全16曲のわらべ歌が挿入された、児童合唱と身体表現のための作品。 (於：東源台小学校、浜田小学校体育館)
⑭富士リズム幼稚園・富士見台リズム幼稚園・青木リズム幼稚園音楽発表会	自作品の提供	H21年12月 H22年12月	富士リズム幼稚園・富士見台リズム幼稚園・青木リズム幼稚園	井沢学園グループの幼稚園、幼稚舎の音楽発表会における二部合唱の編曲。井沢学園より編曲依頼された。 演奏：富士リズム、富士見台リズム、青木リズム幼稚園 年中、年長児。 (於：富士ロゼシアター大ホール)
⑮静岡市立清水浜田小学校音楽発表会	自作品の提供	H25年11月	静岡市立浜田小学校	「清水三保」にまつわるわらべ歌の合唱作品。 (於：浜田小学校体育館)
⑯静岡市立清水船越小学校	自作品の提供	H27年11月	静岡市立清水船越小学校	小学校の音楽発表会における合奏曲「夕やけこやけ」の作品提供。静岡市立清水船越小学校2年生の合奏演奏のために編作曲を行った。 (於：船越小学校体育館)
<p>(作品発表、ピアノ演奏、指揮等)</p> <p>⑰オペラ『きつねの窓』</p>	作品発表	H8年2月(初演) H8年10月(再演)	東京室内歌劇場 27期第85回公演 常葉学園橘高等学校音楽科卒業生	第17回文化庁舞台芸術奨励特別賞受賞作品初演 (於：六本木 俳優座劇場) 常葉学園橘高等学校音楽科創立記念コンサート (於：静岡文化会館中ホール)

②ピアノ変奏曲 『さくらさくらの主題による変奏曲 in 上海』	作品発表 ピアノ演奏	H15年12月	上海ふたば幼稚園	上海ふたば幼稚園クリスマスファミリーコンサートにおける自作品の発表とピアノ演奏。世界初演。 (於：中国上海市建国賓館)
③オペラ『猫の踊り場』(初演)	作品発表	H11年4月	横浜市泉区オペラ研究会	横浜市泉区に伝わる民話をオペラ化。委嘱作品。世界初演。 (於：横浜泉区民センターテアトルフォンテ)
④オペラ『猫の踊り場』(再演)	作品発表	H13年8月	MEC	コンサート形式によるオペラ作品の再演。 (於：王子ホール)
⑤fl&pボラン『組曲：第1番』	ピアノ伴奏	H18年12月	静岡県演奏家協会	静岡県演奏家協会定期演奏会にフルートのピアノ伴奏で出演。(静岡音楽館 AOI)
⑥子ども遊び歌『おばあさんのお母さんの歌』	作品発表	H19年5月	第2回みんなのコンサート実行委員会	ピアノ・ヴァイオリン・チェロ・児童合唱の為に。 (於：静岡清水文化会館大ホール)
⑦オペラ『猫の踊り場』(改作版初演)	作品発表 指揮	H19年7月	静岡県演奏家協会	静岡演奏家協会定期演奏会にて改作版初演。 (於：静岡音楽館 AOI)
⑧ピアノ独奏曲『がまくんからかえるくんへ』	作品発表 ・ピアノ演奏	H19年11月	日本作曲家協議会	第23回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於：紀尾井ホール)
⑨『明治唱歌童謡アルバム』	作品発表	H20年11月	静岡演奏家協会	グランシップ提携公演事業「洋楽事始め」～モダンの風～初演。先人たちの輝き。室内オーケストラの指揮 (於：グランシップ)
⑩『舞踏への勧誘』	編曲 指揮			
⑪ピアノ連弾曲『小鳥のアンニン』	作品発表 ・ピアノ演奏	H20年11月	日本作曲家協議会	第24回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於：紀尾井ホール)
⑫ラフマニノフ『幻想的絵画』	ピアノ演奏	H21年12月	静岡演奏家協会	静岡演奏家協会「音楽の贈り物コンサート」出演。 (於：静岡音楽館 AOI)
⑬ピアノ連弾曲『笑顔いっぱい花いっぱい』	作品発表 ・ピアノ演奏	H22年3月	日本作曲家協議会	第25回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於：紀尾井ホール)
⑭混声合唱曲『登呂の木』『森が荒れる』	作品発表	H22年5月	みんなのコンサート実行委員会	第6回「みんなのコンサート」にて初演。 (於：静岡清水文化センター)
⑮ジュナン『椿姫』による幻想曲	ピアノ伴奏	H22年10月	静岡演奏家協会	静岡演奏家協会定期演奏会にフルートのピアノ伴奏で出演。 (於：静岡音楽館 AOI)
⑯混声合唱曲『茶っきりぶしの主題によるコンポジション』	作品発表	H23年2月 H23年7月	東京都大田区民コーラス・伊東混声合唱団	「大田区民コーラス2011年演奏会」にて初演。 (於：大田区アプリコホール)
⑰サンカン『ソナチネ』	ピアノ伴奏	H23年10月	静岡演奏家協会	静岡演奏家協会定期演奏会「世界音楽の旅」にフルートのピアノ伴奏で出演。(静岡音楽館 AOI)
⑱ピアノ連弾曲『小さな赤いライオン』	作品発表 ・ピアノ演奏	H24年3月	日本作曲家協議会	第28回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於：紀尾井ホール)
⑲声楽アンサンブルとVL, Piano『春の輪舞曲』	作品発表	H25年3月	ふじのくに文化芸術振興補助金事業	「春を呼ぶコンサート2013」委嘱作品の初演。 (静岡音楽館 AOI)
⑳ピアノ独奏曲『セキセイインコがみた夢』	作品発表	H25年3月	日本作曲家協議会	第28回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於：紀尾井ホール)
㉑ライネッケ『ソナタ』	ピアノ伴奏	H25年10月	静岡演奏家協議会	静岡演奏家協会定期演奏会「響秋」にフルートのピアノ伴奏で出演
㉒オペラ『猫の踊り場』(再演)	作品発表	H25年12月	MEC	MEC「25年th 記念演奏会」にて自作オペラの再演。 (於：東京 王子ホール)

㉓バートン『ソナチネ』	ピアノ伴奏	H26年4月	浜松笛の会	浜松フルートフェスタにピアノ伴奏で出演 (於:浜松ヤマハホール)
㉔バートン『ソナチネ』	ピアノ伴奏	H26年4月	静岡演奏家協会	2014「瞬間の贈り物」にフルートのピアノ伴奏で出演 (静岡清水マリナート)
㉕マルティヌー『ファースト・ソナタ』	ピアノ伴奏	H26年10月	静岡演奏家協会	静岡演奏家協会定期演奏会「響秋」にフルートのピアノ伴奏で出演 (静岡音楽館 AOI)
㉖木管アンサンブル『富士山の主題によるコンポジション』 『羽衣幻想曲』	作品発表 ピアノ演奏	H27年2月	静岡県文化財団 ふじのくに芸術祭2015	ふじのくに芸術祭 2015 オープニングセレモニー開催の為に静岡文化財団より委嘱され、ふじのくにに関連する富士山、羽衣をテーマに作曲。自作自演。 (静岡県立美術館ホール)
㉗第11回みんなのコンサート混声合唱曲『久能山』	作品発表	H27年5月	みんなのコンサート実行委員会	第11回「みんなのコンサート」にて初演。 (於:静岡清水マリナート大ホール) 徳川家康公顕彰400年記念コンサートにおける編曲。 演奏:みんなのコンサート児童合唱団、みんなのコンサート混声合唱団
㉘『羽衣幻想曲』 改作版	作品発表 ・ピアノ演奏	H27年10月	静岡県演奏家協会	静岡演奏家協会定期演奏会「響秋」にて改作初演 フルート、クラリネット、ピアノのために書かれた作品。 (静岡音楽館 AOI)
㉙木管アンサンブル『富士山』 混声合唱付き	作品発表 ・ピアノ演奏	H28年2月	静岡県演奏家協会	0歳からの音楽コンサートの企画と出演。 0歳～入場できる『第2回 演奏会に行ってみよう』コンサートにおける作品発表。ワンコインコンサートとして企画。
㉚ピアノ独奏曲『小龍包を召し上がり』	作品発表 ・ピアノ演奏	H28年3月	日本作曲家協議会	第31回「こどもたちへ」にて新作初演。自作自演。 (於:紀尾井ホール)
(表彰等)	H6年 3月	第17回 文化庁舞台芸術創作奨励賞および特別賞受賞 オペラ作曲部門 第1位 台本・作曲:望月たけ美		

## 専任教員教育研究業績

平成28年6月9日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
上野 文枝	うえの ふみえ	保育学科	学科長 教授・准教授・ <b>講師</b> ・助教	男・ <b>女</b>
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委 員 長)	
社会的養護・社会的養護内容・相談援助・保育実習Ⅰ（施設）・保育実習Ⅲ・生活実践Ⅰ（保育グッズ手作り講座）			おだたん人間成長講座運営委員 「短大通信」編集委員	
学 歴				
和暦（西暦）年 月	事 項			学位
昭和53年4月	奈良女子大学家政部被服学科 入学			
昭和57年3月	奈良女子大学家政部被服学科 卒業			
昭和58年4月	奈良女子大学大学院家政学研究科（修士課程）被服学専攻入学			
昭和60年3月	奈良女子大学大学院家政学研究科（修士課程）被服学専攻修了			家政学修士
平成11年4月	東京福祉商経専門学校社会福祉士養成通信課程入学			
平成13年3月	東京福祉商経専門学校社会福祉士養成通信課程修了			
平成14年4月	大正大学大学院人間学研究科（博士前期課程）社会福祉学専攻入学			
平成17年3月	大正大学大学院人間学研究科（博士前期課程）社会福祉学専攻修了			社会福祉学修士
平成22年4月	奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学講座（博士後期課程）入学			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
社会福祉法人東京都福祉事業協会母子生活支援施設スタート方南	平成10年4月～平成17年2月	母子指導員		
学校法人小池学園東萌保育専門学校 専任講師	平成17年4月～平成19年3月	「児童福祉論」「保育実習指導」「障害児保育」「社会福祉」「養護内容」「養護原理」等担当		
皇學館大学社会福祉学部 助手	平成19年4月～平成20年9月	社会福祉士/保育士/介護福祉士/教育実習等の実習事務・相談・学生支援		
皇學館大学社会福祉学部 助教	平成20年10月～平成25年3月	社会福祉援助技術現場実習・実習指導 平成23年度より「現代と福祉」「児童・家庭福祉論」「公的扶助論」等担当		
皇学館大学現代日本社会学部 助教	平成25年4月～平成27年3月	担当科目：「現代と福祉」「児童・家庭福祉論」「公的扶助論」「社会福祉援助技術現場実習指導Ⅰ・Ⅱ」「社会福祉援助技術現場実習」「スクールソーシャルワーク論」「現代日本演習Ⅱ」「リーダーシップ・セミナー」「介護等体験」		
小田原短期大学保育学科 講師	平成27年4月～現在	担当科目：「社会的養護」「社会的養護内容」「相談援助」「保育実習Ⅰ（施設）」「保育実習Ⅲ」		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容（役職等の活動を含む）		
日本社会福祉士会会員	平成13年5月～現在	会員		
日本社会福祉学会	平成19年7月～現在	会員		
NPO 法人日本スクールソーシャルワーク協会会員	平成20年4月～平成27年3月	会員		
日本学校ソーシャルワーク学会会員	平成20年4月～現在	会員		

日本子ども虐待防止学会	平成21年11月～現在	会員
日本家政学会家族関係学部会会員	平成22年7月～現在	会員
日本ジェンダー学会会員 (～現在に至る)	平成22年12月～現在	会員

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
東京都社会福祉協議会 母子福祉部会調査研究 委員会委員	平成13年4月～平成 15年3月	2年毎に実施する東京都内の母子生活支援施設の調査研究 と報告書の作成
皇学館大学地域福祉文 化研究所「ちょっとちょ っと講義」	平成22年5月26日	研究所主催の地域住民向け講座において、「現代日本でご 飯を食べられない子どもたち—子どもの貧困と世代間連鎖 の問題を考える—」のテーマで講座を行なった。
皇学館大学社会福祉学部 月例文化講座	平成22年10月16日	「現代日本でご飯を食べられない子どもたち—子どもの貧 困と世代間連鎖の問題を考える—」のテーマで講座を行な った。
高大連携授業	平成22年11月16日	三重県立名張高校における高大連携授業にて、「母子及び 寡婦福祉法」1コマ(90分)を担当する。
社会福祉法人明照浄済 会理事	平成24年4月～現在	児童養護施設、母子生活支援施設、児童館、児童家庭支援 センター等を運営する社会福祉法人の理事
名張市要保護児童対策 及びDV対策地域協議会 代表者会議	平成24年5月～平成 27年3月	名張市の要対協において、大学を代表して出席
社会福祉法人青松園評 議員	平成25年5月～平成 27年4月	特別養護老人ホームを運営する社会福祉法人の評議員
伊勢市男女共同参画事 業	平成26年11月14日	伊勢市人権施策推進協議会(事務局:伊勢市人権政策課) のセミナーにて講演を行った。テーマは「働く場における 女性の人権について」、対象は伊勢市内の関係官庁、市民 団体、学校関係、市職員、40名程度。

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭一級普通免許家 庭 昭和五六高二普第一二 七八号	昭和57年 3月	奈良県教育委員会
高等学校教諭二級普通免許 家庭 昭和五六中一普第一 二三九号	昭和57年3 月	奈良県教育委員会
高等学校教諭一級普通免許 家庭 昭和五九高一普第九 八号	昭和60年3 月	奈良県教育委員会
社会福祉士(登録番号第 29098号)	平成13年5 月	公益財団法人社会福祉振興・試験センター
訪問介護員養成研修2級課 程修了	平成17年3 月	ベネッセ

研 究 実 績 に 関 す る 事 項

代表的な著書、論 文等の名称	単 著 共 著の別	発行又は発 表の年月	発行所、発表雑誌又 は発表学会等の名称	概 要

(著書) 1. 社会福祉施設の理解を深めるために—これからの実習教育のあり方—	共著	平成 18 年 3 月	樹村房	福祉関係の人材養成においては、施設実習のあり方が重要であると考え、養成機関・受け入れ施設双方の視点を踏まえて論述されている。また、一般の地域住民とのかかわりについても視野に入れて、広く人材養成を目指す視点を盛り込んでいる。特に、具体的な事例を交えている点で、学生や一般住民にもわかりやすく、実習の果たすべき役割を明確にしている。
2. 平成22年度社会福祉学部月例文化講座13「開かれた時代の開かれた福祉」スクールソーシャルワークの可能性—福祉と教育の協働—	共著	平成 23 年 4 月	皇學館大学出版部	平成 22 年度社会福祉学部月例文化講座 13 「開かれた時代の開かれた福祉」において、講演を担当し、その後、同名の書籍として出版した。最近クローズアップされてきているスクールソーシャルワークについて一般市民にわかりやすく紹介した。スクールソーシャルワーカー活用事業の経緯と国内外の取り組み、今後の課題と可能性について示した。
(学術論文) 1. DV・PTSD・虐待など精神的ケアを必要とする母親に対するケースワークを考える—母子生活支援施設における日常生活支援を通して—	単著	平成 20 年 2 月	皇學館大学社会福祉論集 第 10 号 (皇學館大学社会福祉学会)	母子生活支援施設に入所した精神的課題を抱えた母子のケースに対する援助のあり方をケースワークの原則に沿って分析・考察した。さらに、日常の生活場面を通して、如何に効果的な支援を行うか、それによりクライアントのエンパワメント促し、問題解決に向かう課程を分析・考察した。
2. 子どもの健全な成長を保障する社会の実現に向けて—母子生活支援施設におけるマルトリートメントからの考察—	単著	平成 20 年 3 月	皇學館大学社会福祉学部紀要 No.10 (皇學館大学社会福祉学部)	母子生活支援施設に入所する母子について、家庭崩壊の要因をまとめるとともに、それらによって子どもの養育環境にも大きな影響を及ぼしていることを事例を元に考察した。児童虐待として見える以前の問題をマルトリートメントの観点で述べ、予防対策の必要性を示した。
3. 母子家庭の自立支援の現状と課題—元母子生活支援施設利用者へのインタビュー調査から—	単著	平成 21 年 3 月	皇學館大学社会福祉論集 第 11 号 (皇學館大学社会福祉学会)	母子生活支援施設を利用したことのある母子世帯の母親にインタビュー調査を行い、利用者としての視点から、施設を利用したことをどのように捉えているか、また、退所後の施設との関係や現在の生活について、子育てや自立の問題を中心に聞き取りを行い、そこからアフターケアのあり方や地域資源の活用や連携について考察した。
4. 母子家庭の就労支援について—母子生活支援施設における就労支援からの考察—	単著	平成 21 年 3 月	皇學館大学社会福祉学部紀要 No.11 (皇學館大学社会福祉学部)	母子家庭の置かれている現状と施策について、ある母子生活支援施設における就労支援と経済的自立の状況を 80 例から分析した。学歴、就労支援の効果、DV 等の影響、職業訓練の効果の有無との関係を検証し、自立支援のあり方について考察した。さらに、効果的な就労支援のためには生活全体の総合的支援が必要であることを示した。
5. 生育上の家族関係と生活困難の世代間連鎖について—A 母子生活支援施設における事例からの考察—	単著	平成 22 年 3 月	皇學館大学社会福祉学部紀要 No.12 (皇學館大学社会福祉学部)	母子生活支援施設では、様々な生活困難を抱えた母子の支援を行っているが、困難を抱える要因として母親の成育歴や家族関係が影響している点に焦点を当て、A 母子生活支援施設の事例を分析し、現状を示した。また、その結果と平成 21 年に実施された (財) こども未来財団による全国調査の結果を比較検討することで、母子生活支援施設入所者に対する支援のあり方を考察した。さらに、生活困難を抱えたひとり親家庭において、世代間で問題が引き継がれていく可能性について論じた。

6. 現代日本における教育と福祉の協働—スクールソーシャルワーカー活用事業の経緯と今後の展望—	単著	平成23年3月	皇學館大学社会福祉学部紀要 No.13 (皇學館大学社会福祉学部)	スクールソーシャルワーカー活用事業の導入の経緯と導入後の各自治体の取り組みについて、文献、調査研究結果を元にまとめた。学校における福祉的な支援の必要性が高まる今日、教育と福祉の協働を如何に進めていくか、課題は多い。2008年度の活用事業の創設までの経緯と、その後の運営の状況、政策や制度の経緯を踏まえた上で、現在の問題点を明らかにし、今後に向けての課題について論じた。
7. 母子生活支援施設利用者の家族関係と社会資源の活用に関する事例研究—一元利用者に対する聞き取り調査から—	単著	平成24年3月	皇學館大学紀要 第五十輯 (皇學館大学)	母子生活支援施設を退所した母子家庭の母親に対し、施設利用前、利用中、退所後の生活と人間関係について聞き取り調査を行い、語られた内容からそれぞれの時期における人間関係や社会資源の活用について抽出し、分析したものである。
8. 日本の母子家庭に対する福祉政策の現状と課題	単著	平成25年3月	皇學館大学紀要 第五十一輯 (皇學館大学) 107頁～129頁	"日本の母子家庭の8割以上の母親は働いているにも関わらず、貧困状態にある。この現状について、日本政府がどのような取り組みを行ってきたか、特に平成14年度以降の政策を中心に考察を行った。児童扶養手当支給額を抑える一方で、就労支援に力を入れるとされた政策は母子家庭全体の所得を底上げするだけの効果は見られていない。女性の就労全体を視野に入れて対策を立てる必要があると考えられる。
9. 高等学校における教科「福祉」のあり方について—福祉科の動向と課題	単著	平成26年3月	皇學館大学紀要第五十二輯 (皇學館大学)	高等学校において、1999年告示の学習指導要領に教科「福祉」が新設され、2009年に改定が実施されたが、これにより体制を整えるために苦慮している状況が見られる。本研究では、これまでの高等学校における教科「福祉」の導入と改訂の経緯をたどりながら、高等学校における福祉教育と人材養成についての現状と課題について考察した。
10. 母子生活支援施設の歴史とDV被害母子への支援—明治から現代のニーズの変遷を踏まえて—	単著	平成26年3月	現代日本論叢第4号 (皇學館大学現代日本社会学部)	母子生活支援施設は、明治期から今日まで母子家庭のおかれていた時代的背景に左右されながら変遷してきた。そして、高度経済成長期からその数は減少の一途を辿っている。本稿では、その背景に母子生活支援施設が「かけこみ寺」と称される緊急保護を要する母子への対応を担ってきたことに注目し、現代の日本社会における存在意義を論じた。今後もDV対応や生活困難母子に関してニーズが見込まれるが、地域的偏在や運営上の課題がある。
11. 母子寮及び父子寮に関する研究—ひとり親家庭に対する施策の変遷について—	単著	平成26年8月	日本ジェンダー研究 (日本ジェンダー学) 第17号	母子寮と父子寮の変遷と存在意義を比較しながら、時代背景との関係も含めて考察した。ジェンダーの視点から、母子家庭には法制化された支援が充実してきた一方で、父子に対する福祉的支援は必要とされながらも最近まで置き去りにされてきた状況を明らかにした。
12. イギリスのNHSにおけるパースセンターの役割—出産と子育ての連続性の視点から—	単著	平成27年3月	皇學館大学紀要第53輯	2014年3月22日～25日、ロンドン市を中心に5箇所のパースセンターを訪問し、助産師から設立の経緯や病院とセンターの関係、出産と子育てと助産師の役割等について聞き取り調査を行った。イギリスのマタニティ政策の中で、出産がどのように扱われ、助産師の役割と意識を明らかにした。出産の脱医療化、NHS制度によるすべての国民に平等な出産の場の提供、女性が主体的に出産の場を選ぶことと産後ケアと子育てとの連続性など、現地で直接調査し、施設設備を見学することで、イギリスの出産と子育てについての実情把握を行い、日本の現状との比較検討を行った。
13. 英国のNHS管轄のマタニティケア・システムとパースセンターの実態	共著	平成27年3月	愛知県立大学看護学部紀要 Vol. 21	英国 NHS 管轄のマタニティケア・システムとパースセンターの実態把握のためにロンドン市内と周辺の6か所のセンターにて、助産師へのインタビュー調査を行った。助産師がどのように妊産婦のケアを行っているかを調べ、日本の助産師の意識との違いを明らかにした。

(その他) (学会発表) 1. 新カリキュラムにむけた社会福祉援助技術現場実習の現状と課題—近畿・東海地域アンケート調査の結果を参考にして—	共同	平成 20 年 10 月	日本社会福祉学会 (大会名: 日本社会福祉学会全国大会 開催場所: 岡山県立大学)	社会福祉士養成が新カリキュラムに対応するにあたり、実習施設・機関に対するアンケート調査を実施、その内容を報告するとともに、問題点が明らかになった。新しい体制を求められる実習受け入れ側の混乱と情報不足、今後の課題について報告を行った。
2. 母子生活支援施設入所者の家族関係について—入所前から退所後の変化に関する考察—	単独	平成 22 年 10 月	(社)日本家政学会家族関係学部会 (大会名: 第 30 回家族関係学セミナー 開催場所: ピアザ淡海滋賀県立県民交流センター)	母子生活支援施設の元利用者に対する聞き取り調査によって得られたデータから、家族関係を中心にまとめ、入所直前と退所後の変化について考察した。また、インフォーマルな社会資源とフォーマルな社会資源についても、家族の変化とどのような関係があるか、考察した内容を発表した。
3. 母子寮および父子寮に関する研究—ひとり親家庭に対する施策の変遷について—	単独	平成 26 年 11 月 30 日 平成 14 年 5 月	日本社会福祉学会 (大会名: 日本社会福祉学会第 62 回秋季大会 開催場所: 早稲田大学)	明治以降に設立された母子寮は法的に規定されながら変遷し今日に至っているが、父子家庭のための施設はない。日本においてひとり親を対象とする法律は、1937 年に制定された母子保護法が最初だが、父子福祉については、法律の外にあったと言える。本研究では、母子寮と父子寮の存在意義と施策が時代背景の中でどのように変遷してきたのか、特に父子寮の存在に注目しながら、今日のひとり親家庭支援につながる点を中心に調査研究した結果を発表した。
4. イギリスの助産師を通してみる出産と子育ての連続性—バースセンターの助産師への聞き取り調査から—	単独	平成 27 年 9 月 20 日	日本社会福祉学会 (大会名: 日本社会福祉学会第 63 回秋季大会 開催場所: 久留米大学)	英国ロンドンにある NHS が運営するバースセンターで働く助産師に対し、出産と医療の関係、妊娠期から産後の子育て支援の現状について聞き取り調査を行った。ハイリスク出産や産後の子育て支援への引き継ぎの状況について、ポスターによる発表を行った。
(報告書) 1. 平成 14 年度東京の母子生活支援施設実態調査	共著	平成 15 年 3 月	社会福祉法人東京都社会福祉協議会母子福祉部会	東京都内 37 か所の母子生活支援施設とその利用者を対象として質問紙による調査を行い、利用者サービス、施設機能の向上に寄与すべく報告書として出版した。植山つる児童福祉研究奨励基金対象研究。
2. 板橋区の子育て支援サービスに対する利用者側からの評価～板橋区との共同調査を通じて～	共著	平成 16 年 3 月	大正大学大学院人間科学研究科	大正大学大学院児童家庭福祉研究班において、板橋区と共同調査を実施、区内の子育て世帯 1001 通の調査票より、地方自治体の子育て支援システムのあり方を考察した。
3. 板橋区における子育て支援事業のあり方に関する研究～板橋区との共同調査を通じて～	共著	平成 17 年 3 月	大正大学大学院人間科学研究科	前年度に実施した板橋区における子育て世帯に対する調査において、クロス集計と自由記述の分析を実施し、質的分析についてまとめた。
4. 児童家庭福祉における母子生活支援施設の役割と今後の展望—事例研究からのアプローチ—	共著	平成 17 年 3 月	大正大学社会福祉学会鴨台社会福祉学論集第 14 号	母子生活支援施設における 72 の事例について、入所前・入所中・退所時・退所後の時系列で支援内容、その時の状況を分析した。修士論文の要旨として掲載。
5. 世界のお産紀行英国バースセンター—訪問記	共著	平成 26 年 12 月 26 日	助産雑誌第 68 巻第 12 号	平成 26 年 3 月にロンドン市を中心に NHS が運営するバースセンター 6 箇所を訪問、助産師への聞き取り調査と参与観察を行った。他国のお産事情を紹介する内容として助産雑誌に寄稿し、施設紹介として掲載された。調査研究はユニバーバル財団による助成金により実施された。 【共著】 編者名及び共著者名: 山名香奈美・神谷摂子・上野文枝・松岡悦子 掲載頁: 1094 頁～1098 頁

6. 女性の生き方と妊娠・出産・子育て—イギリスのバースセンターを調査して	共著	平成27年3月	ユニバーサル財団助成事業	2014年3月に実施したイギリスのロンドン市を中心としたバースセンターの助産師への聞き取り調査の報告書。NHS制度における脱医療化の出産の現状について助産師の語りを通して調査、そこから女性の働き方や生き方を探り、日本社会との比較を試みた。ユニバーサル財団の助成金を活用した共同研究であり、報告分担の中で、本件を取り扱った。編者名及び共著者名：松岡悦子、山名香奈美、神谷撰子、上野文枝
(教材) 1. 福祉のたね	共著	平成21年2月	皇學館大学出版部	皇學館大学社会福祉学部10周年の記念出版として、高校生に配布する冊子を作成。「スクールソーシャルワーク」「福祉社会」の項目を執筆した。
2. 実習の手引き		成22年3月	皇學館大学社会福祉学部 実習支援室	社会福祉士及び介護福祉士法の改定により、実習が新カリキュラムとなった。これに伴い、実習指導で使用する実習の手引と日誌を作成した。
その他 (表彰等) 奨励賞		平成17年3月	大正大学社会福祉学会より修士論文に対する奨励賞	

## 専任教員教育研究業績

平成 28 年 7 月 1 日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
金澤 久美子	かなざわくみこ	保育学科	学科長 教授・准教授・講師・助教	男・ <input checked="" type="radio"/> 女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
保育の心理学Ⅰ、保育の心理学Ⅱ、教育相談、基礎学力演習 ボランティア活動、児童館実習			FD委員会、おだたん人間成長講座運営委員会	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
S53(1978)年4月	東北大学 理学部化学科入学			
S57(1982)年3月	東北大学 理学部化学科卒業			学士(理学)
H7(1995)年4月	明治学院大学 文学部心理学科 編入学			
H9(1997)年3月	明治学院大学 文学部心理学科卒業			学士(心理学)
H11(1999)年3月	日本女子大学 大学院人間社会研究科心理学専攻博士課程前期修了			修士(心理学)
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
世田谷区立教育センター	H11年4月～14年3月	教育相談員として、カウンセリング業務		
相模原市立青少年相談センター	H15年4月～20年3月	青少年教育相談員としてカウンセリング業務		
神奈川県臨床心理士会	H15年4月～20年3月	中学校へスクールカウンセラーとして派遣		
学校法人 小田原女子短期大学	H20年4月～H26年3月	保育学科助教として勤務		
学校法人 三幸学園 小田原短期大学	H26年4月～H28年3月	保育学科助教として勤務		
学校法人 三幸学園 小田原短期大学	H28年4月～現在	保育学科講師として勤務		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
心理臨床学会	H7年4月～年月	自己研鑽、事例研究		
日本臨床心理士会	H14年4月～年月	自己研鑽、事例研究		
神奈川県臨床心理士会	H14年10月～年月	自己研鑽、事例研究		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
小さな麦の会	H8年6月～H9年3月	小学生の親子を対象として車椅子体験講座を企画・実施		
小田原養護学校	H21年12月	保護者を対象とした『発達障害』に関する講演		
マロニエ	H24年2月	保護者を対象としたミニレクチャを実施		
小田原市生涯学習課	H25年3月(2回)	保護者を対象に『キラッと輝くパパ・ママ講座』での講演		
小田原市生涯学習課	H25年10月、12月(全3回)	保護者と祖父母を対象に『しつけの達人』の講演		
マロニエ	H26年4月	保護者を対象としたミニレクチャを実施		
小田原市生涯学習課	H26年6月	保護者を対象に『子育てパワーアップ講座』での講演「		
小田原市生涯学習センター	H25年4月～	キャンパス小田原運営委員		
赤ちゃんひろば	H28年4月～	小田原市内の『赤ちゃんひろば』の運営		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
臨床心理士	H14年4月	日本臨床心理士資格認定協会 (H24年2回目更新)		

研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書) 1. 「高校生のための保育入門テキスト」	共著	2012年3月	小田原女子短期大学 保育学科	神奈川県共同事業高大連携「保育者養成導入講座」事業の一環として作成したテキストで、Chapter 6 「子どもの発達と遊び」(p.24~27)を担当
(著書) 2. 生活事例からはじめるー保育内容ー総論	共著	2014年3月	青踏社	「保育内容」の教科書であるが、いくつかのトピックスを心コラムとして、心理学的に解説をした。 第5・6章 のコラム 「5-1 健全な愛着形成」「5-2 まねっこ(模倣遊び)」「6-1 遊びの理論」
(著書) 3. 「保育入門テキスト」	共著	2015年3月	萌文書林	高校生の保育入門のテキストである。Chapter 6 「子どもの発達と遊び」(p.26~29)を担当
(著書) 4. 「生活事例からはじめる 保育の心理学」	共著	2015年4月	青踏社	「保育の心理学」の教科書として執筆したものである。 基礎編 第1章 「保育の心理学とは」 第2章 「生涯発達と発達援助・初期経験の重要性」 第4章 「人とのかかわりを育てる」 実践編 第5章 「現代社会における子どもの発達と保育の課題」
5. 子育て応援ブック	共著	2015年6月	小田原短期大学	赤ちゃんを育て始めた保護者のための子育てヒント集として、小田原短期大学教員で共同執筆した。  担当部分：「心が育つ」(p.16~p.17)を執筆。 赤ちゃんの気持ちをどう読み取り、どのようにかわわると愛着が形成されるのかを分かりやすく解説をした。
(学術論文) 1. 研究ノート 「インターネットの危険性に関する学生指導の為の調査 ～迷惑メールに関する意識調査から～」(査読あり)	単著	2013年3月	『小田原女子短期大学研究紀要』43号	保育学科の1年生を対象とした迷惑メールに関する意識調査をもとに、今後の学生指導に向けて考察をした。
(学術論文) 2. 「保護者と指導者の視点から捉えるスポーツ活動における子どもの発達に関する研究～自転車競技のスクーリング場面から～」(査読あり)	単著	2014年3月	『小田原女子短期大学研究紀要』44号	都自転車競技連盟より依頼があり自転車競技のスクーリングに参加している子どもたちの保護者と指導者を対象としたアンケート調査を行った。それぞれの視点から子どもの成長を捉え、どのようなことが心理的サポートにつながるかを分析した。
3. (学術論文) 「地域子育てひろばを活用した乳幼児家庭全戸支援(1)～小田原モデルの研究と試行～」	共著	2015年3月	『小田原女子短期大学研究紀要』45号	本学の特別研究の一員として加わり、「赤ちゃん広場」の運用に関して、小田原市と共同で取り組んだものである。
(その他)				
その他(表彰等)				

## 専任教員教育研究業績

平成 28 年 4 月 1 日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
小倉 直子	おぐら なおこ	保育学科	講師	女
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等	
障害児保育Ⅰ、障害児保育Ⅱ、言葉指導法、保育実習指導Ⅰ、保育実習Ⅰ（施設）、卒業研究（ゼミナール）、おだたん人間成長講座Bコース			おだたん人間成長講座運営委員会、マロニエ合同運営協議会、	
学 歴				
和暦（西暦）年 月	事 項			学位
平成2(1990)年4月	京都大学 教育学部 入学			
平成7(1995)年3月	京都大学 教育学部 教育学科 卒業			学士（教育学） 第2420号
平成7(1995)年4月 ～平成9(1997)年3月	東京都立大学 人文科学研究科 修士課程 科目等履修生			
平成10(1998)年4月	龍谷大学 文学研究科 教育学専攻（教育心理学）修士課程 入学			
平成12(2000)年3月	龍谷大学 文学研究科 教育学専攻（教育心理学）修士課程 終了			修士（文学）
平成12(2000)年4月	龍谷大学 文学研究科 教育学専攻（教育心理学）博士後期課程 入学			
平成15(2003)年3月	龍谷大学 文学研究科 教育学専攻（教育心理学）博士後期課程 単位取得満期依願退学			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
横田小児科医院 「発達と育児の相談室」	平成12(2000)年9月 ～平成28(2016)年2月	発達相談員（非常勤）、ペアレント・トレーニング		
南足柄市 障害児童デイサービス「くまさん教室」	平成16(2004)年4月 ～平成21(2009)年2月	心理相談員（非常勤）（市内保育園・幼稚園巡回相談を含む）		
藤沢市 母子保健事業	平成16(2004)年4月 ～平成17(2005)年3月	乳幼児健診 心理相談員（非常勤）		
三島市 母子保健事業	平成16(2004)年4月 ～平成18(2006)年3月	乳幼児健診 心理相談員（非常勤）		
熱海市 母子保健事業	平成16(2004)年4月 ～平成21(2009)年3月	乳幼児健診、親子教室、園巡回等 心理相談員（非常勤）		
伊東市 母子保健事業 他	平成17(2005)年4月 ～平成21(2009)年3月	乳幼児健診、親子教室、園巡回、児童発達支援事業「さくら保育園」、幼稚園等 心理相談員（非常勤）*単発で現在に至る		
常葉学園短期大学	平成17(2005)年4月 ～平成23(2011)年3月	保育科 非常勤講師 2005年「カウンセリング」、2006～2011年「年齢と子どもの発達」		
南足柄市 教育委員会	平成20(2008)年4月 ～平成26(2014)年3月	就学相談 心理判定員（非常勤）		
足柄上郡 中井町 母子保健事業	平成21(2009)年4月 ～平成22(2010)年3月	乳幼児健診、園巡回、子育て支援センター等 心理相談員（非常勤）		
南足柄市 母子保健事業	平成21(2009)年4月 ～平成24(2012)年6月	乳幼児健診 心理相談員（非常勤）		
足柄上郡5町 障害乳幼児地域訓練会「ひまわり教室」	平成22(2010)年4月 ～平成26(2014)年3月	心理相談員（非常勤）、ペアレント・トレーニング		
小田原市 教育委員会	平成22(2010)年4月 ～平成28年(2016)年3月	就学相談 心理判定員（非常勤）		
小田原市 早期発達支援事業	*平成22(2010)年4月～ 平成24(2012)年4月～現在	*2010～12年はモデル事業（公立保育園巡回相談） 市内保育園・幼稚園巡回相談 心理相談員（非常勤）		
足柄上郡 大井町 母子保健事業	平成23(2011)年4月 ～平成24(2012)年3月	乳幼児健診 心理相談員（非常勤）		
小田原市 母子保健事業	平成23(2011)年4月～	心理相談員（非常勤）		

	～平成 28(2016)年 3 月	
小田原市「子ども発達相談」	平成 24(2012)年 4 月 ～平成 28(2016)年 3 月	心理相談員 (非常勤)
小田原短期大学	平成 26(2014)年 4 月～ 平成 27(2015)年 4 月～ 平成 28(2016)年 4 月～	保育学科 非常勤講師 「障害児保育Ⅰ」「障害児保育Ⅱ」 保育学科 特任講師 現職

所 属 学 会 等

名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)
日本応用心理学会	平成 10(1998)年～	平成 10 年、11 年、12 年 学会発表、平成 22 年 大会企画シンポジウム話題提供
心理科学研究会	平成 11(1999)年～	平成 17 年 ミニシンポジウム話題提供
日本発達心理学会	平成 11(1999)年～	平成 22 年 自主シンポジウム話題提供
日本教育心理学会	平成 15(2003)年～	
日本臨床心理士会	平成 19(2007)年～	
日本外来小児科学会	(学会員ではない)	平成 17 年 学会発表、21 年 シンポジウム話題提供、22 年 セミナー話題提供、24 年 ワークショップ開催
<研究会>		
全国障害者問題研究会	平成 3(1991)年～	
京都保育問題研究会	平成 10(1998)年～17(2005)年	
人間発達研究所	平成 10(1998)年～	平成 16 年 発達診断セミナー シンポジウム話題提供

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
湘南心理研究会 「コスモスの会」	平成 12(2000)年 9 月～	平成 21(2009)年より世話人 (運営委員)
社会福祉法人泉会	平成 17(2005)年 7 月 ～20(2008)年 3 月	評議員 (平成 22(2010)年 10 月～24(2012)年 1 月も)
西湘子ども発達研究会	平成 19(2007)年 6 月～	主催 * 平成 26 年～「新版 K 式発達検査勉強会」より名称変更
小田原市教育委員会 就学支援委員会	平成 21(2009)年 4 月～	就学支援委員
小田原市いじめ防止対策調査会	平成 27(2015)年 4 月～	いじめ防止対策調査委員

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
応用心理士 第 222 号	平成 16 年 1 月	応用心理学会
臨床心理士 第17834号	平成 19 年 4 月	日本臨床心理士資格認定協会 (平成 24 年 3 月 資格更新)

研 究 実 績 に 関 す る 事 項

代表的な著書、論文等の名称	単 著 共 著 の 別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. 発達心理学用語集	共著	平成 18 年 4 月	同文書院	発達心理学の用語集、基本用語と関連用語を見開きで解説。5 障害と発達支援の「内部障害」「視覚障害」「聴覚障害」を担当。 応用心理学における最新の学問的知見を、身近な事実から具体的に分かりやすく説明した辞典。3.発達心理学分野で「そこで笑ってくれるから一乳児期前半の赤ちゃん」、「こどもの発達を支える仕事」を執筆。 保育士試験に対応した保育の基礎用語集。発達心理学領域では「発達検査と発達指数」「レディネス」「原始反射」「粗大・微細運動の発達過程」の項目、精神保健領域では「精神遅滞」「ダウン症」「ブラダー・ウィリ
2. 応用心理学辞典	共著	平成 19 年 1 月	丸善	
3. 厳選 保育用語集	共著	平成 19 年 7 月	創成社	

4. 生活事例から始める保育の心理学	共著	平成 27 年 4 月	青鞆社	イ症候群」「フェニールケトン尿症、クレチン症」「発達障害」「染色体異常」「統合保育」の項目を執筆。 「保育の心理学」テキスト、保育の中の生活事例を豊富にとりあげつつ、基礎編で心理学の基礎を、実践編で保育実践における事例を扱う。基礎編・第 5 章「子どもの発達評価」、実践編・第 3 章「保育における発達援助」第 4 章「発達援助における共働」を執筆。 宮川萬寿美・神蔵幸子編著、宇佐美かおる、金澤久美子、片山伸子、小倉直子
5. 保育者のための障害児保育一理解と実践	共著	平成 28 年 3 月	萌文書林	「障害児保育」テキスト。第 4 章（1）障害受容について の部分を執筆協力。尾野明美 編著。
(学術論文) 1. 1 歳前半における発達連関の検討とコミュニケーション形態の変化—1 次元可逆操作の獲得における「きざしの時期」の導入—	単著	平成 17 年 9 月	人間発達研究所 紀要 第 17 号 P2-25	1 歳前半の 7 名の子どもの縦断調査から、運動面、認知面、対人言語面、自我の育ちにおける発達連関を分析。発達の質的転換期における各領域がどのようにに関連し、統合されていくのかについての、理論仮説モデルを作成した。発達心理学の理論において、同じ課題であっても、質的転換の前後でまったく別の意味を持つことについての論考。
2. 地域における非常勤心理職の連携の試み—「ひとりぼっち」の仕事は、もうしない!	単著	平成 22 年 10 月	発達 No.124 Vol.31 [特集]発達の早期支援に向けて II 連携による早期支援の実践 ミネルヴァ書房 p27-34	自治体における非常勤の心理専門職として何をなすべきか、自身はこの神奈川県西部の 2 市 8 町でどんな連携の仕組みを作ってきたか、の実践レポート。孤立しがちな非常勤専門職が、連携して顔の見える関係を作っていくことの困難さと重要性を示唆し、各地で奮闘する非常勤心理専門職へのエールとした。
(その他) 1. カリフォルニア教育事情①～④	単著	平成 16 年 3 月～17 年 3 月	人間発達研究所通信 No.95、No.96、No.99、No. 100	渡米生活で体験した現地保育園、小学校、語学クラスにおけるカリフォルニア教育事情をレポート。住むところ探しから始まり、保育園探し、現地の学校教育、土曜日の日本語学校、大人向けの語学クラス、サマースクール、子育て文化などについての報告。
2. 発達相談室の窓から— 発達の道すじ編	単著	平成 20 年 1 月～21 年 2 月	横田小児科医院 院内報「こあら通信」第 117～130 号	横田小児科の院内報に、誕生前から青年期までの子どもの発達の道すじを、イラスト付きで保護者向けに分かりやすく解説。子育ての見通しを持ち、子どもたちの健やかな発達への心からの驚きと興味、敬意と共感を持ってもらえるよう、解説。
3. 発達相談室の窓から— Q&A 編	共著	平成 23 年 5 月～25 年 12 月	横田小児科医院 院内報「こあら通信」第 157～187 号	「言葉が遅い」「指しゃぶり」「落ち着きがない」「園や学校に行きたがらない」など、子育ての様々な悩みに答える Q&A。て安心して見守っていてよいことと、専門家に相談すべきポイントの両方を押さえた。執筆、杉崎雅子、小倉直子
4. ほめて育てる! 子育てのコツ はじめてのペアレント・トレーニング	単著	平成 27 年 3 月	小田原短期大学 (平成 27 年度 神奈川県地方創生大学連携事業)	平成 27 年度神奈川県の地方創生大学連携事業において、小田原市教育委員会との協力で実施したペアレント・トレーニング 8 回講座の講座内容と報告をまとめた冊子。
その他 (表彰等)				

専任教員教育研究業績

平成 28年 6月 21日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
東元 りか	ひがしもと りか	保育学科	学科長 教授・准教授・講師(助教)	男(女)
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
音楽表現 I, 卒業研究 (ゼミナール), 保育実習指導 I, 保育実習指導 II			FD 委員会	
学 歴				
和暦 (西暦) 年 月	事 項			学位
平成 14 (2002) 年 3月	お茶の水女子大学文教学部芸術表現行動学科音楽表現コース卒業			学士 (人文科学)
平成 16 (2004) 年 3月	お茶の水女子大学大学院 博士前期課程 人間文化研究科 人文学専攻 音楽表現 修了			修士 (人文科学)
平成 26 (2014) 年 3月	お茶の水女子大学大学院 博士後期課程 人間文化研究科 比較社会文化学専攻 単位取得満期退学			
平成 11 (1999) 年 7月	ハンガリー国立リスト音楽院夏期セミナーピアノ演奏コース修了			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
お茶の水女子大学文教学部 芸術表現学科音楽表現コース 教務補佐員	H16 年 5 月～H18 年 3 月	ゼミナール補佐および教務関連補佐		
小田原短期大学 保育学科	H23 年 4 月～現在	H23～H25 非常勤講師, H25 より特任助教, H26 より助教として勤務。これまで「音楽表現 I」「音楽表現 II」「音楽表現 III」「卒業研究 (ゼミナール)」「保育実習指導 I」「保育実習指導 II」を担当。		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容 (役職等の活動を含む)		
東洋音楽学会	H16 年 10 月～ 現在	東日本支部参事: H16・17 年度例会委員, H18・19 年度機関誌編集委員会編集委員		
お茶の水音楽研究会	H18 年 4 月～ 現在	お茶の水音楽論集第 9 号編集委員 (H18 年度)		
日本保育学会	H25 年 9 月～ 現在	正会員		
日本音楽の教育と研究をつなぐ会	H27 年 6 月～ 現在	正会員・委員 (平成 28 年度)		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
さくらチャイルドセンター 音楽表現講師	H25 年 5 月～ H26 年 3 月	音楽表現及び親子音楽あそび講師 (神奈川県子育て支援事業)		
松林保育園親子音楽あそび 講師	H25 年 12 月～ H26 年 3 月	わくわくランド親子音楽あそび講師 (神奈川県子育て支援事業)		
豊島区立南長崎幼稚園園内 研究講師	H26 年度 (年 4 回)	音楽 (歌唱指導、楽器・合奏指導) 講師。		
平塚市私立幼稚園研究会 第 2 部会講師・助言者	H26 年度～H27 年度	研究テーマ「集団あそび～友だちとのコミュニケーションを深めるために」における講師および助言(2 年継続)。		
豊島区立南長崎幼稚園園内 研究講師	H27 年度 (年 3 回)	音楽 (歌唱指導、楽器・合奏指導) 講師。		
担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等				
名 称	取得年月	取 得 機 関		
中学校教諭専修免許状 (音楽)	H16 年 3 月	東京都教育委員会		
高等学校教諭専修免許状 (音楽)	H16 年 3 月	東京都教育委員会		
研 究 実 績 に 関 す る 事 項				

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文) 1. 「土踊の伝承と保存について」(修士論文)	単著	平成 16 年 3 月	平成 16 年度お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人文学専攻 修士論文	鹿児島の無形文化財である伝統芸能「土踊」は、現在、鹿児島県加世田市竹田神社夏祭りにおいて奉納されている。本研究では、現在を含め、これまでどのように伝承されてきたかを歴史的史料とフィールドワークから明らかにした。さらに、芸能の保存という観点から、現在の社会においてどのように捉えられるかを考察した。「平成 15 年度 大学院人間文化研究科博士前期課程人文学専攻修士論文要旨集」に掲載、及び『音楽文献目録』2004 年 p.74 にタイトル掲載。
2. 「土踊の伝承と保存について」(査読付)	単著	平成 19 年 3 月	『お茶の水音楽論集 第 9 号』お茶の水音楽研究会発行 p.1～p.13	修士論文の内容の一部をまとめ、加筆、修正を加えた。主な観点は下記の通り。まず第一に「土踊」がどのような歴史的構築の上に成り立っているかを明らかにした。第二に「土踊」習得の過程を観察することによって、伝承の維持、方法を確認した。第三に、「土踊」の担い手・保存会を含めた伝承組織の活動から「土踊」の変容と伝承の方向性について検討した。
3. 「British Library に所蔵される保育唱歌の墨譜について」(査読付)	単著	平成 23 年 4 月	『お茶の水音楽論集 第 13 号』お茶の水音楽研究会発行 p.47～p.59	「保育唱歌」とは、明治初期に創作された教育用唱歌の総称である。これらの楽譜は、主に手書きの墨譜という形態で現存しており、楽譜に記載の状況(収録曲目、詞章、音等)は、楽譜によって異なる。雅楽関係者、当時の幼稚園関係者等の手によるものが殆どで、現存する楽譜の数は多いとはいえない。これらの、国内外の大学図書館、公共の機関における所蔵を明らかにするとともに、諸楽譜に記載の事項について比較検討をおこなった。
4. 「保育現場における伝統的な音楽の実践と小学校音楽科カリキュラムとの関連性について」	共著	平成 27 年 3 月	小田原短期大学研究紀要第 45 号 p.10～p.22	保育現場における伝統音楽に関する実態を調査し、それを明らかにするとともに、小学校音楽科のカリキュラムとの関連性を考慮しながら、保育現場と小学校連携についての可能性の一端を探った。特に、就学前の伝統的な音楽的経験から得られる子どもの発達、育ちへの期待について考察した。
5. 「保育者養成校における音楽科授業の試み～コード付の学習を通して～」	共著	平成 28 年 3 月	小田原短期大学研究紀要第 46 号 p.51～p.61	本学の音楽授業におけるコード付の試みについての報告と、その中でみられた学生の様子や理解度を鑑みながら、より効果的な伴奏付の指導方法について考察した。
(研究ノート) 1. 「子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究(1) 一箱根町よさこいソーラン踊りを通して」	共著	平成 27 年 3 月	小田原短期大学研究紀要第 45 号 p.78～p.80	子どもの発達を総合的に促す保育活動について検証することを目的とし、子どもたちによるよさこいソーラン踊りを題材として、事例研究および実験的検討の報告を行った。
2. 「子どもの発達を総合的に促す保育活動の研究(2) 一箱根	共著	平成 28 年 3 月	小田原短期大学研究紀要第 46 号 p.109～p.115	箱根町の子どもたちによるよさこいソーラン踊りを題材とし、子どもたちの指導にあたる指導者および保育者から、聞き取りあるいは質問紙による調査を行った。調査の主な観点は、指導におけるねらい、子どもたち

町よさこいソーラン踊りを通して—				の様子、指導上の留意点とし、前報で観察した子どもたちの変化について意味づけすると同時に、地域全体で子どもたちの発達支援に繋げられる可能性を見出した。
(学会発表) 1. 口頭発表 「土踊の伝承と保存について」	単独	平成 16 年 4 月	東洋音楽学会 4 月例会	東洋音楽学会 4 月例会において、修士論文の内容をまとめ、口頭発表をおこなった。発表は、修士論文の章立てに即したが、特に「伝承の実際」についての報告と、伝承組織と社会（地方自治体、小中学校、地元住民）との関わり、伝承組織の機能についての検討結果に重点をおいた構成となった。発表後、「(社) 東洋音楽学会東日本支部だより」 第 5 号 12 頁 (平成 16 年 5 月 20 日発行) に発表要旨が掲載された。於：東京藝術大学
2. ポスター発表 「地域の伝統文化を取り入れた保育活動の展開の可能性」	共著	平成 26 年 5 月	第 67 回日本保育学会	保育園における地域の祭りを取り入れた保育活動を分析し、地域の文化を継承していくための地域の繋がり、保育のあり方に関して考察した。
3. ポスター発表「地域の祭りをきっかけとした保育内容—地域文化の継承と創造—」	共著	平成 26 年 9 月	全国保育士養成協議会 53 回大会研究大会ポスター発表 共著・発表論文集	伝統的な行事、祭り、音楽が生活の中に当たり前のよう活動がある保育園の事例を通して、文化を継承することと、継承とともに創造しながらある保育内容の展開について考察した。
4. ポスター発表「地域力を活かした保育養成におけるピアノ技術の指導について」	共著	平成 27 年 5 月	第 68 回日本保育学会	平成 26 年度から小田原短期大学保育学科で実施している「地域力を活かしたピアノ特別授業（課外授業）」に関して、H25 年度旧カリキュラムとの比較分析を行うことで、その学習効果について考察した。さらに、保育者としての音楽的な技術、表現力の獲得へ繋げるための授業展開の可能性について検証した。
(その他) 1. 「第 18 回鹿児島県人演奏会」出演	共同	平成 14 年 4 月	主催：鹿児島県文化振興財団、南日本新聞社、鹿児島新人演奏会事務局	於：鹿児島県文化センター
2. オペラ「フィガロの結婚（全幕原語上演日本語字幕付）」	共同	平成 16 年 3 月	お茶の水女子大学大学院 音楽表現学コース 第 3 回院生オペラ	お茶の水女子大学大学院 音楽表現学コース第 3 回院生オペラ、W.A.モーツァルト作曲「フィガロの結婚（全幕原語上演日本語字幕付）」において、ピアノおよびチェンバロの伴奏として出演。出演は院生他、プロ・卒業生等の助演による。指導：平尾力也、林廣子。指揮：山館冬樹。於：お茶の水女子大学講堂徽音堂
3. 「東元りか・細川えり ピアノジョイントコンサート」	単独・共同	平成 16 年 10 月	自主公演	ピアノソロ・2 台ピアノ・連弾によるジョイントコンサート。於：新宿文化センター小ホール
4. 「李昭静ソプラノリサイタル」ピアノ伴奏	共同	平成 17 年 11 月	李昭静（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）	「お茶の水女子大学大学院博士後期課程音楽表現論演奏会」於：牛込笹筒区民ホール
5. 「フルートコンサート」ピアノ伴奏	共同	平成 18 年 12 月	主催：さいたま市本郷保育園	Fl：阿部みどり 於：さいたま市本郷保育園
6. 「美しい日本	共同	平成 18 年 4 月	主催：業平山南蔵院	Sp.：林廣子 於：しばられ地蔵南蔵院

の唄」ピアノ伴奏		月		
7. 「07 THE NEW TEAR GRAND SPECIAL CONCERT 新春に贈るオペラアリア、歌曲、ピアノ名曲の夕べ 華麗なるアーティストの競演」ピアノ伴奏	共同	平成 19 年 1 月	主催：KOKUSAI CHOWA CLUB／ASIA ART ASSOCIATION	Sp.：林廣子 於：紀尾井ホール
8. 「中津川祥子 ソプラノリサイタル」ピアノ伴奏	共同	平成 19 年 11 月	中津川祥子（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）	「お茶の水女子大学大学院博士後期課程声楽表現論演奏会」於：お茶の水女子大学講堂徽音堂
9. 「Tre Fiori di Te ピアノ&ソプラノリサイタル」	単独・共同	平成 21 年 3 月	自主公演	ソロ・連弾・ピアノ伴奏として出演。於：太田区民ホール・アプリコ
10. 「ソプラノ・リサイタル 韓国人作曲家<나운영 LAUN YOUNG>研究 李昭静 韓国音楽コンサートー宗教音楽&羅運榮の歌曲ー」ピアノ伴奏	共同	平成 21 年 9 月	李昭静	於：お茶の水女子大学講堂徽音堂
11. 「Alberetti concert vol.2」ピアノ伴奏	共同	平成 21 年 10 月	主催：Alberetti	於：東京建物八重洲ホール
12. 「明治と音楽 ～唱歌を中心に～」レクチャーコンサート	単独	平成 22 年 10 月	自主公演	於：スタジオプリモエラ
13. 「東元 りか & 宮本 香織 Piano Joint Concert Vol.1」	単独・共同	平成 23 年 1 月	自主公演	ソロ・2 台ピアノによる演奏。於：新宿文化センター小ホール
14. 「インターナショナル・ミュージック・アカデミー北九州」受講、コンサート出演	単独	平成 24 年 3 月	主催：北九州市、(財)北九州市芸術文化振興財団 後援：ベルギー王国大使館	インターナショナル・ミュージック・アカデミー北九州のオーディションに合格、アカデミーを受講し、修了時、コンサートへ出演。 於：北九州市立響ホール
その他 (表彰等)				

## 専任教員教育研究業績

平成 28年 6 月 16 日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性別
内山 絵美子	うちやま えみこ	保育学科	学科長 教授・准教授・講師・助教	男(女)
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委員長)	
教育原理・教育制度論／教育実習／保育実習指導 I			学生指導・支援委員会 通信学務委員会 短大通信編集会議	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
平成 15 (2003) 年 4 月	中央大学法学部政治学科 入学			
平成 19 (2007) 年 3 月	中央大学法学部政治学科 卒業			政治学学士
平成 21 (2009) 年 4 月	筑波大学人間総合科学研究科教育学専攻(博士前期課程) 入学			
平成 23 (2011) 年 3 月	筑波大学人間総合科学研究科教育学専攻(博士前期課程) 修了			教育学修士
平成 23 (2011) 年 4 月	筑波大学人間総合科学研究科教育基礎学専攻(博士後期課程) 入学			
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
(株)ジェイネット・コーポレーション	平成 19 年 4 月～平成 20 年 1 月	教材販売・営業		
(株)パソナ・フォスター	平成 20 年 2 月～平成 21 年 3 月	渋谷区放課後子ども事業スタッフとして、渋谷区笹塚小学校内に設置された放課後子どもクラブで勤務。		
筑波大学人間総合科学研究科ティーチング・フェロー (TF)	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	教員の授業を補佐する業務を行いながら、授業の組み立て方、講義や討論の技術、学生との接し方などを学ぶとともに、授業の一部を担当する。担当した授業は「教育法制論」。		
共栄大学教職アカデミー特別研究員	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	毎週、学生の教員採用試験合格に向けた学習支援の相談員(職名:教育学部センター特別研究員)として勤務。毎週一定数(平均 5～6 人)の学生が相談に訪れ、一般教養及び教職教養などの個別指導を行う。また、カフェの利用促進、学生の自主学習支援のために、30 分のプチ講座「教員採用試験合格までの計画をたてよう」、「みんなでやれば怖くない教育時事」などを実施。		
土浦協同病院附属看護専門学校非常勤講師	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	教育学を担当。具体的には、教育内容・目的の変遷、近代公教育制度の成立、なぜ学校へ行くのか、学びとは何か、教師とは何かを講義したのち、学生に命に関する内容で授業指導案の作成をしてもらった。		
慈恵柏看護専門学校非常勤講師	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	同上		
日本大学文理学部臨時職員	平成 25 年 7 月～平成 25 年 12 月	研究補助業務(データ入力、分析補助)		
小田原短期大学	平成 26 年 4 月～(現在に至る)	教育制度論、教育実習、保育実習指導などを担当。		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
筑波大学教育学会	平成 23 年 3 月～(現在に至る)	編集委員会幹事(平成 25 年 3 月まで)		
日本教育政策学会	平成 23 年 5 月～(現在に至る)	大会参加、学会発表、論文投稿など		
日本教育行政学会	平成 23 年 7 月～(現在に至る)	同上		

日本教育制度学会	平成 26 年 1 月～（現在に至る）	同上
日本教育経営学会	平成 26 年 1 月～（現在に至る）	同上
日本スクールコンプライアンス学会	平成 27 年 5 月～（現在に至る）	理事推薦委員会委員（現在に至る）
日本教師教育学会	平成 27 年 9 月～（現在に至る）	大会参加、学会発表、論文投稿など

社 会 活 動 等

名 称	活動期間	活 動 内 容
時事通信出版局『教員養成セミナー』	平成 23 年 5 月～（現在に至る）	連載全 12 回で採用試験の頻出領域を網羅した得点力アップのための問題演習を執筆。毎号「教育の基本理念」や「教育の目的・目標」、「学校と就学」「教職員の服務と処分」などのテーマを設定。内容構成は、「一目でわかる」要点事項、練習問題、解答解説となっている。
協同出版『月刊 教職課程』	平成 25 年 8 月～平成 28 年 3 月	「合格力育成セミナー」のページでは教員採用試験の頻出領域について、知識の定着はかるために、「教育に関する法規」や「学校に関する法規」「教員に関する法規」など内容ごとに分けて練習問題の解答・解説、出題傾向と対策などを監修。
協同出版・協同教育研究会 公開講座（教員採用試験対策）	平成 25 年 1 月～（現在に至る）	教員採用試験の教職教養のうち「教育法規」「教育時事」に関して、基本的な用語、教育法規や教育政策の全体像、全国的な出題傾向について講義を行う。自治体ごとの出題傾向も踏まえ、関東の各自治体別の対策講座も行っている。
科学研究費助成事業 基盤研究 (C)「若手教員の育成プログラム開発および支援システム構築に関する総合的研究」（研究代表：共栄大学 和井田節子）	平成 25 年 6 月～平成 28 年 3 月	研究協力者
科学研究費助成事業 基盤研究 (B)「効果的な学校運営のための学校財務の実証的研究」（研究代表：日本大学 末富芳）	平成 25 年 7 月～平成 28 年 3 月	研究協力者として、自治体へのアンケート調査、ヒアリング調査に参加。平成 26 年 6 月の日本教育経営学会では、主に海外の研究動向について報告を行う予定。
科学研究費助成事業 基盤研究 (B)「単位学校を超えた教育史限活用の実証的研究—学校横断型人的リソースを中心に—」（研究代表：日本大学 末富芳）	平成 28 年 4 月～現在に至る	研究分担者

担 当 教 科 目 に 関 す る 資 格 ・ 免 許 等

名 称	取得年月	取 得 機 関
	年 月	
	年 月	

研 究 実 績 に 関 す る 事 項

代表的な著書、論文等の名称	単著 共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概 要

<p>(著書)</p> <p>1. 『教育委員会改革5つのポイント—「地方教育行政法」のどこが変わったのか』</p> <p>2. 『よくわかる、心にひびく、はじめの一步 保育入門テキスト』</p> <p>3. 『生徒指導とスクール・コンプライアンス—法律・判例を理解し実践に活かす』</p> <p>4. 『予算財務で学校マネジメントが変わる』</p> <p>5. 『JSCP双書4教育課程論』</p>	<p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p> <p>共著</p>	<p>平成26年12月</p> <p>平成27年3月</p> <p>平成27年12月</p> <p>平成28年4月</p> <p>平成28年5月</p>	<p>学事出版</p> <p>萌文書林</p> <p>学事出版</p> <p>学事出版</p> <p>教育開発研究所</p>	<p>本書は、2013年に地方教委行政の組織及び運営に関する法律が改正され、60年ぶりに大きく変わる教育委員会制度について、何がどのように変わるのか、教育現場にはどのような変化が生じるのか、わかりやすく解説したものである。</p> <p>子どもたちの健やかな育ちを支える保育の仕事をわかりやすく紐解いたものである。Chapter1「仕事としての保育」(6～9頁)、Chapter9「保育者への道」(38頁～41頁)を執筆。</p> <p>本書は、いじめ防止対策推進法の成立や少年法の改正など、生徒指導にかかわる法や社会的背景が大きく変わるなか、その理解と対応について、具体的な判例などから解説している。「第5章 児童虐待の防止と学校の役割—予防から自立支援まで—」を分担執筆している。</p>
<p>(学術論文等)</p> <p>1. 「文部科学省の学校教育の多様化政策——『専門性』と『参加』による教育の機会均等保障」(研究ノート：査読有)</p> <p>2. 「義務教育費国庫負担制度改革における文部科学省の対応とその論理——地方分権と教育の機会均等保障との調整」(研究ノート：査読有)</p> <p>3. 「ソーシャル・キャピタルの研究的・政策的課題——「自発的協力」の観点から」(査読無)</p> <p>4. 「教育政策形成における政府間関係の分析枠組み——動的相互依存モデルの可能性——」(査読有)</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成25年3月</p> <p>平成25年3月</p> <p>平成25年3月</p> <p>平成26年3月</p>	<p>筑波大学人間総合科学研究科教育基礎学専攻『教育学論集』第9集、131頁～154頁</p> <p>筑波大学人間系教育学域『教育学系論集』第37巻、13頁～25頁</p> <p>筑波大学学校経営研究会『学校経営学論集』第1号、1頁～11頁</p> <p>筑波大学人間系教育学域『教育学系論集』第38巻、1頁～13</p>	<p>本稿は、1980年代以降、教育の多様化の政策原理を、文部科学省と内閣や内閣設置審議会教育の政策を対比しながらその特徴と意義を明らかにした。文部科学省による多様化政策の特徴として、①内閣側が民間企業の参入と親の選択を重視したのに対し、教育委員会や教員など「専門性」による教育の提供と意思決定を重視したこと、②内閣側が「選択」のための多様化を求めたのに対し、文科省は「参加」による多様化を推進したことを明らかにした。</p> <p>本稿は、地方分権改革の一環として2001年に始まった義務教育費国庫負担制度改革において、文部科学省が、分権化と教育の機会均等とをどう調整したのか、その論理を明らかにした。文科省は制度を維持したうえで、教員給与の水準と配分を地方に委ねるとした。そこでは制度という大枠だけでなく、標準法と人材確保法という一定の枠付けを維持し、さらに教員の評価と教育の成果の検証を行うことで、機会均等を維持することとした。</p> <p>本稿は、近年ガバナンスの文脈でも注目されているソーシャル・キャピタル(SC)論について、「自発的協力」に着目し、研究上、政策上の課題を明らかにした。研究上の課題としては、SCの影響過程への着目あげられる。SCの存在の関係はブラックボックス化されている。また政策上の課題としては、対等な関係性の構築があげられる。エリートと一般市民の選好との乖離を回避するためには両者の対等関係が必要となるのである。</p> <p>本稿は、新たな教育政策形成における国と地方及び地方同士の相互影響関係を捉えるモデルとして、伊藤修一郎の動態的相互依存モデルの可能性を検討したものである。地方分権改革が推進され、地方が地域や学校の実情に応じた政策を実施するようになっており、特に特例的な仕組みをもつ教育分野において新たな取り組みを可能にする条件や、他の政府に与える影響を考察する枠組みとして有効であることを述べた。</p>

<p>5. 「教育経営・行政に関する研究動向」</p> <p>6. 「学校マネジメント研究の国際動向～学校財務に焦点を当てて～」(研究ノート:査読有)</p> <p>7. 「A 県の取り組みにみる若手教員育成支援の現状と課題」</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成 26 年 11 月</p> <p>平成 27 年 3 月</p> <p>平成 27 年 9 月</p>	<p>日本教育制度学会『教育制度学研究』第 21 号、238 頁～244 頁</p> <p>小田原短期大学『小田原短期大学研究紀要』第 45 号、71 頁～77 頁</p> <p>「初任期教員の育成プログラム開発および支援システム構築に関する総合的研究(科学研究費報告書)」</p>	<p>本稿は、2013 年度以降に公表された論文・書籍を対象とし、教育経営・教育行政に関する研究動向を整理するものである。近年の研究動向の大きな流れの一つは、「ガバナンス」や「政治」といったキーワードに代表されるように公教育における意思決定の在り方を再検討する流れである。もう一つは、人口減少や少子化・高齢化によって教育に関する財政的な制約が増す中で、教育活動を支える資源の確保や配分についての研究である。こうした研究を概観している。</p> <p>本稿は、学校マネジメントに関する研究の国際的な動向をあきらかにすることを目的としている。特に学校分権の先進国である英米では、①学校予算財務と児童生徒の教育達成に関する研究、②予算権限のある校長・学校理事会の役割や能力に関する研究、③School Business Manager など事務スタッフに関する研究、④教員の財務マネジメントに関する能力育成に関する研究などが行われていた。</p> <p>本稿では、初任期教員の成長支援の観点から、育成プログラム及び支援システムについて A 県の取り組みを調査しまとめた。</p>
<p>(その他)</p> <p>1. 「規制改革における学校の多様化政策への文部科学省の対応——コミュニティ・スクールの法制化に焦点を当てて」(口頭発表)</p> <p>2. 「義務教育費国庫負担制度改革における文部科学省の対応とその論理——地方分権と教育の機会均等との整合性」(口頭発表)</p> <p>3. 自治体発教育政策の国による採用とその影響——教育の機会均等保障の観点から」</p> <p>4. 「地方独自政策の波及における国の「介入」とその影響——少人数学級編製の導入を事例に——」(口頭発表)</p>	<p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p> <p>単著</p>	<p>平成 23 年 7 月</p> <p>平成 24 年 3 月</p> <p>平成 24 年 10 月</p> <p>平成 25 年 10 月</p>	<p>日本教育政策学会第 18 回大会</p> <p>筑波大学教育学会第 10 回大会</p> <p>日本教育行政学会第 47 回大会</p> <p>日本教育行政学会第 48 回大会</p>	<p>本発表では、学校多様化政策のひとつであるコミュニティ・スクールが法制化されるまでの政策過程に焦点をあて、文部科学省の多様化政策の政策原理について報告を行った。具体的には、文部科学省があくまでも教育委員会など教育の「専門性」を前提とした学校の多様化を目指したことで、競争と選択ではなく保護者や地域住民の参加によって学校の多様化を図ったことは、新自由主義的改革から教育の原理を守ることにつながったことを指摘した。</p> <p>本発表では、2001 年以降の義務教育費国庫負担制度改革の政策過程に焦点をあて、文部科学省の地方分権改革への対応とその論理について報告を行った。文部科学省は、国庫負担制度の本質である教育の機会均等＝教員給与の保障による「優秀な教員の確保」を維持するため、総額裁量制の導入及び国庫負担の減額と地方へ財源移譲を行うことで地方分権を図る一方、制度の維持と教員評価と給与の連動などによって、教員の質保証を行おうとしたことを明らかにした。</p> <p>本発表は、自治体が独自に取り組み始めた教育政策が国によって採用され全国的に展開された事例のいくつかを取り上げ、その過程の特徴を抽出するとともに、その採用の背景と影響を検討することを目的とした。結果として動的相互依存モデルによって、自治体発教育政策が国によって採用されるプロセスを検討することで、地方分権と教育の機会均等との調整を観察できた。自治体での新たな政策の採用の中で、国では特例や例外として位置づける対応が行われること、その後、国での制度化によって例外が普遍化される(例外でなくする)ことなどが指摘できた。</p> <p>本発表では、少人数学級編製の導入と展開を事例に、各都道府県における導入と国の「介入」(＝政策採用)との関係について考察した。それを通じて地方が地域のニーズに応じた政策形成を行うための政府間関係の在り方について示唆を得ることが目的である。都道府県教育委員会への質問紙調査の結果から以下のことを指摘した。第 1 に、財政的支援がないと政策波及が促進されない可能性である。第 2 に、しかし一方で財政的支援を伴う介入は、地域のニーズに基づかない政策採用も促すことである。</p>

<p>5. 「効果的な学校運営のための学校財務の実証的研究 (1)-学校レベルでの予算・財務の実態と課題を中心に」</p>	<p>共著</p>	<p>平成 26 年 6 月</p>	<p>日本教育経営学会 第 54 回大会</p>	<p>効果的な学校運営のためには、学校の予算・財務面での自律性の拡大が不可欠であることから、本研究では(1)公立小中学校における効果的な学校運営のための学校予算の運用手法と組織体制の在り方、(2)学校運営に要するフルコスト(教職員給与やサポートスタッフ、運営経費を含めた総予算額)の算出し、学校へ委譲されるべき予算額や財務権限、アカウンタビリティの遂行体制の検討、(3)スクールリーダーや学校事務職員の専門性の向上について国内外の理論や専門職養成・研修の先進事例の検証を行う。今回の報告では (1) を中心に報告した。</p>
<p>6. Book Review 『ゆとり教育』批判に根拠はあったのか? (雑誌記事)</p>	<p>単著</p>	<p>平成 27 年 4 月</p>	<p>『教職研修』521 号 p.112</p>	<p>「ゆとり」批判は、教育制度・政策批判か若者批判か、その複雑さを紐解いた書である、佐藤博志・岡本智周著『「ゆとり」批判はどうつくられたのかー世代論を解きほぐす』の書評。</p>
<p>7. 「効果的な学校運営のための学校財務の実証的研究 (2)-国内外の自治体・政府による学校支援体制を中心に」</p>	<p>共著</p>	<p>平成 27 年 6 月</p>	<p>日本教育経営学会 第 55 回大会</p>	<p>前年度に引き続き「学校のマネジメント空間の矮小化」に陥らない学校予算・財務制度の在り方を考えていく。スクールリーダーや学校事務職員の財務面での専門性の検証およびその向上策の検討、日本の学校運営、学校財務の課題・改善策を明確化するための国際比較分析を行うことで、学校単位でのマネジメントに影響を与える、自治体による予算制度設計、予算・権限委譲を含め、学校支援体制のインパクトや望ましいあり方を模索した。</p>
<p>その他 (表彰等)</p>	<p>平成 26 年 2 月</p>	<p>筑波大学人間総合科学研究科ティーチング・フェロー (TF) 優秀賞</p>		

## 専任教員教育研究業績

平成28年7月1日

氏名	ふりがな	所属学科	職 位	性 別
中山 貴太	なかやま たかひろ	保育学科	学科長 教授・准教授・講師・助教	♂・♀
担 当 科 目 名			学 内 委 員 会 等 (委 員 長)	
【通学】「教育実習指導」「保育実習指導Ⅰ」「ボランティア」「卒業研究」 【通信】「健康・スポーツ実技」「健康・スポーツ理論」「身体表現Ⅰ」「身体表現Ⅱ」			オリンピック・プロジェクト	
学 歴				
和暦(西暦)年 月	事 項			学位
平成 18 (2006) 年 4 月	大阪大谷大学人間社会学部人間社会学学科 入学			
平成 22 (2010) 年 3 月	大阪大谷大学人間社会学部人間社会学学科 卒業			学士(人間社会学)
平成 22 (2010) 年 4 月	順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 スポーツ社会科学領域 スポーツマネジメント学専門分野 博士前期課程 入学			
平成 24 (2012) 年 3 月	順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 スポーツ社会科学領域 スポーツマネジメント学専門分野 博士前期課程 修了			修士(スポーツ健康科学)
教 育 歴 ・ 職 歴				
名 称	期 間	教 育 内 容 又 は 業 務 内 容		
順天堂大学 スポーツ健康科学部	H.23年4月～H.25年3月まで	ティーチング・アシスタント 担当科目「総合講座(前期)」、「組織開発実習」		
医療法人誠心会 神奈川病院	H.24年4月～H.27年3月まで	外来治療の一環としたデイケアにおけるプログラム講師(スポーツ担当)(非常勤)。		
医療法人清和会 浅井病院	H.24年4月～H.27年3月まで	精神科医療における運動療法(非常勤)		
順天堂大学スポーツ健康科学部	H.24年5月～現在	非常勤助手として研究、実験の補助		
社会福祉法人ゆりの木会 ゆりの木苑	H.24年6月～H.27年3月まで	特別養護老人ホームにおける運動療法(非常勤)。		
東京未来大学子ども心理学部	H.25年7月～現在	非常勤講師 担当:「子ども体育」(通信教育課程)		
東洋学園大学	H.25年9月～現在	非常勤講師 担当:「スポーツ 2」「スポーツ 1(H26年～)」 「身体とウェルネス(H26年～)」 「人間のセクシュアリティ/保健学(H.27年～)」		
所 属 学 会 等				
名 称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)		
人類働態学会	H.22年4月～現在	会員 学会発表		
日本スポーツ心理学会	H.22年4月～現在	会員 学会発表		
日本体育学会	H.23年5月～現在	会員 学会発表		
日本幼児体育学会	H.28年1月～現在	会員 第12回大会実行員		
社 会 活 動 等				
名 称	活動期間	活 動 内 容		
神奈川県地方創生大学連携事業「子育て世帯が住みたい魅力ある地域を創る～保育と食育を通じた地方創生～」	H.27年9月～H.28年3月迄	神奈川県地方創生大学連携事業として幼稚園に通っていない2～3歳児とその親に対して音楽、造形、身体表現の面から教育支援を行った。		

担当教科目に関する資格・免許等				
名称	取得年月	取得機関		
健康運動実践指導者	H.21年5月	健康・体力づくり事業財団(第90900882号)		
中学校教諭一種免許状	H.22年3月	大阪府教育委員会(平21中一第787号)		
高等学校教諭一種免許状	H.22年3月	大阪府教育委員会(平21高一第1044号)		
中学校教諭専修免許状	H.24年3月	千葉県教育委員会(平23中専第62号)		
高等学校教諭専修免許状	H.24年3月	千葉県教育委員会(平23高専第71号)		
日本サッカー協会公認C級コーチ(日本体育協会公認指導員)	H.24年12月	(公財)日本サッカー協会(C000542347)		
研究実績に関する事項				
代表的な著書、論文等の名称	単著共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌又は発表学会等の名称	概要
(著書)				
(学術論文) 野球独立リーグ所属選手のセカンドキャリアに関する研究 一キャリア成熟度と職業レディネス概念を援用して一	単著	2012年3月	2011年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科修士論文	著者：中山貴太 本研究では、四国アイランドリーグPlusに所属する現役選手に対してセカンドキャリアに対する心理不安を、インタビュー調査を基にキャリア成熟と職業レディネスの観点から展開した。結果、1. 高校卒業選手の方が大学卒業、専門学校卒業選手よりも不安は少ないが、キャリア成熟度、職業レディネスが共に低いことが示された。2. 引退後に対する不安を感じている選手ほどキャリア成熟度や職業レディネスが高い傾向が示された。3. 選手の年齢や所属年数は心理不安に対して影響を及ぼしているものの、キャリア成熟度や職業レディネスとの関連は選手の語りからは確認されなかった。
(その他：学会発表) 1.日本におけるチーム効力感尺度開発の試みー大学スポーツチームを対象にー	共著	2010年11月	人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第93号、10-11頁	共著者：芳地泰幸、中山貴太、山田泰行、水野基樹 本研究では、米国で開発された Collective Efficacy Questionnaire for Sports (CEQS) を翻訳し、日本の大学生スポーツチームにおけるチーム効力感の開発を試みた。その結果、一連の手続きを踏襲し、日本におけるチーム効力感尺度が開発された。
2.日本の大学生スポーツチームにおける CEQS の有効性に関する研究	共著	2010年11月	日本スポーツ心理学会「日本スポーツ心理学会第37回大会研究発表抄録集」114-115頁	共著者：芳地泰幸、中山貴太、山田泰行、水野基樹 本研究では、欧米で開発された Collective Efficacy Questionnaire for Sports(CEQS)を日本語に翻訳し、翻訳された尺度が日本人大学生スポーツチームの目標達成に向けた動機づけの指標となりえるのかを、結果期待の視点から検討した。その結果、翻訳された CEQS は目標達成にむけた結果期待を十分にとらえており、日本の大学生スポーツチームにおける目標達成に向けた動機づけの指標となり得る可能性が示された。
3.チームビルディングの実践とその効果の検討ー大学生スポーツチームを対象にー	共著	2011年6月	人類労働学会全国大会「人類労働学会会報」第94号、57-60頁	共著者：芳地泰幸、中山貴太、水野基樹、北村薫 本研究では、首都圏の大学に所属する大学生スポーツチーム2チームを対象に2日間のチームビルディング(TB)を実施し、その効果をTB実施直後におこなった自由記述式アンケートに基づき検討した。その結果、TBを実施することでチームが活性化すること、TBの効果は少なくとも3つの段階および5つの側面の2軸から捉える事が出来る事が示された。
4.大学生スポーツチームにおける集団効力感と文脈的パフォーマンスの関連	共著	2011年9月	産業・組織心理学会「第27回大会発表論文集」151-154頁	共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫 本研究では、首都圏及び関西圏の大学スポーツチーム(14チーム)を対象に集団効力感と文脈的パフォーマンスの関連を検討した。その結果、文脈的パフォーマンスと集団効力感には有意な正の相関関係が存在することが確認された。さらに、文脈的パフォーマンスの実行レベルは集団効力感に直接

5.選手が抱く指導者に対する信頼の要因について	共著	2011年9月	日本体育学会「日本体育学会第62回大会予稿集」101頁	<p>的な正の影響を与える事が明らかになった。</p> <p>共著者：中山貴太、芳地泰幸、水野基樹</p> <p>本研究では選手が抱く指導者への信頼に着目し、その要因を構造化した。その結果、信頼につながる要因として「経験」や「人間性」など11の要因が、非信頼につながる要因として「専門知識の欠如」、「一貫性のない指導」など7要因が抽出された。さらに本研究の特出すべき点は、指導者は信頼するものだという盲目的に信頼する選手が存在することが確認できた点である。これは、多くの権限が指導者に集中している結果であると考えられる。</p>
6.チームビルディングの実践とチーム活性化に関する研究—大学生野球部を事例に—	共著	2011年10月	日本体育学会「日本体育学会第62回大会予稿集」103頁	<p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫</p> <p>本研究では、大学生野球部を対象に2日間のチームビルディング(TB)を実施し、その効果をチーム活性化の視点から検討した。その結果、TBを通じて大学生野球部が活性化すること、3か月後には若干低下するが、再度TB(フォローアップ研修)を実施すると再び向上することが確認できた。以上から、TBの継続的実施が重要であるという実践的知見が得られただけでなく、縦断的な検証の必要性も明らかになった。</p>
7.チームビルディングの実践が集団効力感およびチーム活性化に及ぼす効果に関する研究—大学生野球部を事例に—	共著	2011年10月	日本スポーツ心理学会「第38回大会研究発表抄録集」48-49頁	<p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、中山貴太、北村薫</p> <p>本研究では、首都圏の大学に所属する大学生運動部うち野球部を本研究の調査対象に、2011年1月から9月まで約8か月間、横断的な調査を実施した。その結果、TBを通じて大学生野球部が活性化すること、3か月後以降には活性化度は若干低下するが、再度TB(フォローアップ研修)を実施すると再び向上することが明らかになった。また、近年注目されている、集団効力感が2日間のTBのトレーニングによって向上する可能性が示唆されたことは大きな発見と考えられる。</p>
8.大学生のアルバイト従事がもたらす葛藤と恩恵—多重役割マップの特徴から—	共著	2011年11月	人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第95号、15頁	<p>共著者：山田泰行、芳地泰幸、中山貴太、榎原毅、広沢正孝、水野基樹</p> <p>本研究では、多重役割マップを用いてアルバイトに従事する大学生を対象に、彼らが担う様々な役割間の関係明らかにした。その結果、アルバイトは大学、人間関係、家庭といった役割にネガティブな影響(NSP)を及ぼす一方、人間関係と家庭にポジティブな影響(PSP)も及ぼしている事が明らかになった。つまり、現代の大学生にとってアルバイトに従事することは、様々な葛藤と恩恵を伴うものであるということが明らかになった。</p>
9.大学生スポーツチームにおけるチームビルディングの導入とその効果の検討Ⅰ—内省報告を分析対象とした定性的調査の視点から—	共著	2012年8月	日本体育学会『日本体育学会第36回大会予稿集』113頁	<p>共著者：水野基樹、芳地泰幸、中山貴太、藤井啓嗣、山田泰行</p> <p>本研究は、効果的なチームづくりやチーム変革の一環として多くの組織に導入されているチームビルディング(以下、TB)に注目し、TB導入がもたらす効果を得られた内省報告(質的データ)から明らかにすることを目的とした。その結果、以下の結論を得た。1. TBの導入は、TBを体験した参加者に様々な効果をもたらす。2. それらの効果の背景には、TBプログラムを通じ、参加者間で互いに自己開示と傾聴を繰り返すことによる、多くの気づきと、新たな発見がある。3. TBの効果は大きく「自分自身に関すること」、「他者との関係に関すること」、「所属組織(チーム)に関すること」の大きく三つの側面から捉えられる。</p>
10.大学生スポーツチームにおけるチームビルディングの導入とその効果の検討Ⅱ—構造化を目指した定量	共著	2012年8月	日本体育学会『日本体育学会第36回大会予稿集』120頁	<p>共著者：芳地泰幸、水野基樹、山田泰行、中山貴太、藤井啓嗣、北村薫</p> <p>本研究は、大学生スポーツチームへのチームビルディング(以下TB)の導入がもたらす効果を定量的調査から明らかにし、その効果の構造化を目指したものである。その結果、1. 大学生スポーツチームにTBを導入することで少なくとも選</p>

的調査の視点から ー				手の自己理解、他者理解、さらには組織理解の促進・向上がもたらされる。2. TB を通して認められた効果のうち自己理解および、他者理解の側面はそれぞれ二つの要因から、さらに組織理解の側面は三つの要因から理解することができる。3. 各側面における効果の各要因は同時に体験される（生起する）傾向にある。以上の結論を得た。
11. 首都圏における自転車利用の実態把握Ⅰー自転車利用時の行動特性と意識に関する質問紙調査からのアプローチ	共著	2013年6月	人類労働学会会報第98号21-22頁	共著者：川田裕次郎、藤井啓嗣、 <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、水野基樹 本研究は自転車利用者における利用時の行動特性と意識に関する基礎データを得ることを目的とした。結果、1. 自転車利用時の行動特性と意識には、少なくとも4つの因子（種類）が存在すること。2. 自転車利用時の行動特性と意識は、男女別に見ると、男性の方が女性よりも不良であること。3. 自転車利用時の行動特性と意識は、年齢との関連性を見ると、年齢の低い者ほど不良であること。4. 自転車利用時の行動特性と意識は、職業別に見ると、「学生」が「主婦」よりも不良であること。5. 自転車利用時の行動特性と意識は、運転免許の有無別に見ると、関連性が示されないこと。以上が確認された。
12. 首都圏における自転車利用の実態把握Ⅱー事故およびヒヤリ・ハット体験レポートからのアプローチ	共著	2013年6月	人類労働学会会報第98号23-24頁	共著者：芳地泰幸、藤井啓嗣、 <u>中山貴太</u> 、川田裕次郎、水野基樹 本研究は千葉県における自転車利用の実態を把握することを目的とした。事故およびヒヤリ・ハット体験レポートから体験場所として最も多いのは「交差点」であった。相手として最も多いのは「車」であり、それらの要因として最も多いのは「飛び出し・一時不停止」であった。
13. フィットネスクラブ従業員のレジリエンス向上のための組織的支援	共著	2013年6月	人類労働学会会報第98号43-44頁	共著者：庄司直人、藤井啓嗣、森口博充、 <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、水野基樹 本研究はフィットネスクラブ従業員のレジリエンス向上のプロセスを質的データをもとに解明することを目的とした。結果、レジリエンス向上のプロセスを構成する要素として、「組織的サポート戦略」、「レジリエンスに寄与する個人資源」、「困難、失敗に起因するポジティブ作用」、「困難による弊害、成功体験、考え方の変化」、「レジリエンスに寄与する望ましい心理状態」、の8項目に分類された。
14. 国内の主要学会における自転車研究の研究動向の把握	共著	2013年6月	人類労働学会会報第98号58頁	共著者： <u>中山貴太</u> 、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹 本研究は日本人間工学会、日本交通心理学会、人類労働学会において自転車研究がどのように展開されてきたのか調査した。結果、過去50年間で自転車に関する研究が計49編確認され、「身体的側面に焦点をあてた研究」、「工学的側面に焦点をあてた研究」、「心理的側面に焦点をあてた研究」に分類された。
15. 体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象とした入学前教育の導入効果Ⅰープログラム体験後の心理的変容の視点からー	共著	2013年8月	日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』122頁	共著者：水野基樹、芳地泰幸、 <u>中山貴太</u> 、北村茉衣、野川春夫 体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象に2012年と2013年に導入された入学前教育プログラムの効果を導入前後の心理的変容の視点から検証し、効果的な入学前教育プログラムの展開に向けた資料を得ることを目的とした。その結果、プログラムを体験した学生の多くに「自己理解」、「他者理解」、「学校理解」の高揚が確認され、「ふりかえりレポート」からは、「入学後への期待」、「卒業後のビジョンの明確化（再確認）」、「仲間づくり」に関する記述が数多く確認された
16. 体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を対象	共著	2013年8月	日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』137頁	共著者：芳地泰幸、水野基樹、 <u>中山貴太</u> 、藤井啓嗣、野川春夫 本研究では、体育系大学におけるAO・推薦入学予定者を

<p>とした入学前教育の導入効果Ⅱープログラムを体験した学生の入学後の追跡調査の視点からー</p>				<p>対象に2012年および2013年に導入された入学前教育プログラムを体験した学生の入学後の実態を把握することで、入学前教育の効果と、今後の入学前教育プログラムの展開に向けた資料を得ることを目指したものである。そのため本研究では、「成績調査」、「授業態度の観察」、「インタビュー調査」の3つの調査から学生の実態把握に努めた。3つの調査結果を統合すると入学前教育の導入には一定の効果がある傾向が示された。</p>
<p>17.フィットネスクラブ従業員におけるスポーツ経験がレジリエンスに影響を及ぼすプロセスに関する研究</p>	<p>共著</p>	<p>2013年8月</p>	<p>日本体育学会『日本体育学会第64回大会予稿集』135頁</p>	<p>共著者：庄司直人、芳地泰幸、<u>中山貴太</u>、藤井啓嗣、水野基樹 本研究では、首都圏のフィットネスクラブで勤務する従業員26名を対象に、過去から現在にわたるスポーツ実施経験が、レジリエンスの獲得・向上に影響を与えるプロセスをインタビュー調査から明らかにした。その結果、スポーツでの経験が、思考様式や認知の変化に影響を与え、そして、レジリエンスの獲得・向上につながる事が示された。</p>
<p>18.対「自転車」における事故及びヒヤリ・ハットの实態把握</p>	<p>共著</p>	<p>2013年11月</p>	<p>『人類動態学会会報』第99号、7-8頁</p>	<p>共著者：<u>中山貴太</u>、庄司直人、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹 日本の政令指定都市（千葉市、横浜市、相模原市、さいたま市、大阪市）において対自転車における事故およびヒヤリ・ハット体験に関する実態を明らかにするために街頭調査を実施した。その結果、交通構成員が対「自転車」に対して事故及びヒヤリ・ハットを経験する状況は、自転車運転者のスマートフォンや音楽再生機器の使用等の「電子機器の使用時」、「右側走行時」、「スピード超過時」である。そして、それらは「歩道」、「交差点」、「狭い道」、「坂道」において発生する傾向があることが明らかにされた。</p>
<p>19.自転車運転者の不安全行動を引き起こす心理的要因に関する研究ー政令指定都市の事故およびヒヤリ・ハットレポートからのアプローチー</p>	<p>共著</p>	<p>2013年11月</p>	<p>『人類動態学会会報』第99号、9-10頁</p>	<p>共著者：庄司直人、<u>中山貴太</u>、芳地泰幸、藤井啓嗣、川田裕次郎、水野基樹、北村薫 政令指定都市（千葉市、横浜市、相模原市、さいたま市、浜松市、大阪市）に在住の189名（男性118名、女性71名、平均年齢=39.69歳）を対象に危険を予見しながらも事故やヒヤリ・ハットに至ったと運転者が認知する事例を用いて、不安全行動に至る心理的要因を検証した。その結果、不安全行動が誘発されやすいと推測される環境は、①時間的切迫とリスク受容量の増大やリスクの過小評価が重なるとき、②目的地到着直前や通勤経路など慣れ親しんだ場所で慢心に近い感覚に陥ったとき、③交通他者と交錯する場所で、交通他者の動向を決めつけたとき、であることが明らかになった。</p>
<p>20.A Study on the Effects of Team Building for University Baseball Team in Japan : Focused on Morale and Belief in Cooperation</p>	<p>共著</p>	<p>2014年8月</p>	<p>The 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress in Tokyo, CD-ROM The 7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress (ASPASP_2014) 於:National Olympics Memorial Youth Center (NYC), Tokyo, JAPAN</p>	<p>共著者：Yasuyuki Hochi, Motoki Mizuno, <u>Takahiro Nakayama</u>, Mai Kitamura, Riyako Honda, Kaoru Kitamura The purpose of this study was to examine the effects of the experience of TB among university baseball team from the view point of Morale and Belief in Cooperation. We carried out TB designed by Kitamori (2008) to one university baseball team (69 players) in 2013. The average age of the 69 participants was 20.15 years (SD=.87). We use Scale to Measure Belief in Cooperation (Nagahama, et al. 2009) and Morale (Tsuruyama, 2011) to examine the effects of TB. The answers of this investigation were collected from the participants before and immediately after the intervention of TB. The paired t-test showed that the score of moral of university baseball team was higher than before TB experience (<math>t=2.56, p&lt;.05</math>). The practical implication of these findings suggested that implementation of TB is effective from the viewpoint of morale.</p>

<p>(その他：雑誌記事)</p> <p>21. 人類労働学会 第 46 回全国大会におけるワークショップの報告 (シンポジウム「労働学会らしい生活の見直しから考える自転車の新しい役割～若手研究者育成支援による科研費申請のためのロードマップの一環として～」)</p>	<p>共著</p>	<p>2011 年 11 月</p>	<p>人類労働学会東日本地方会「人類労働学会会報」第 95 号、39 頁「第 1 班：子育て時の交通手段 (三人乗り、転落事故)」を担当</p>	<p>共著者：中山貴太、水澤隆、本田勇輝、稲葉健太郎、川田裕次郎、芳地泰幸、菅又雄太郎、庄司直人</p> <p>「第 1 班：子育て時の交通手段 (三人乗り、転落事故)」のグループワークでの議論やプレゼンテーションを振り返り、まとめたレポート</p>
<p>その他 (表彰等)</p>				